

「演劇会議」40号 予告

西リ演16年、東リ演15年を迎えて
「東西リ演の歩み」を企画——

通史・記念論文に先だち「年表」の
編纂に着手しました。

資料（劇団の設立年月日・東西リ演
加盟年月・上演した主要なレパート
リイ等）をお送り下さい。〆切6月
30日まで

「年表」作成委員

西リ演 仲 武司・森本景文

東リ演 黒沢参吉・萩坂桃彦

第3回東リ演「演劇大学」 の講演及分科会を完全収録

去る2月10・11・12日の東リ演「演劇
大学」における講演、分科会を完全録
音、集団内の学習に最適。

＜講演＞ 清洲すみ子・茂木 憲・土方
与平・黒沢参吉・芝田進午・水谷貞雄

＜分科会＞ 演出・作家作品・企画
演技

詳細は下記へ

400 甲府市蓬沢町318
TEL 0552 (33) 2547

深 沢 憲 治
(劇団やまなみ)

作間雄二戯曲集

苦節15年。劇団弘演をきづき
上ぎた全仕事。かえらぬ作間
雄二をしのんで多くの仲間
におくる——

＜収録作品＞

津軽ばか塗り 浅草象潟あたり
津軽謀叛人始末 正・続おりん口伝
秘密 喪の季節 雪夜
西津軽郡車力村 八戸無産者診療所

1978年4月発売 3,000円(予価)

申込先 「作間雄二戯曲集」刊行委員会
036 弘前市松原1-2-31 阿部方
TEL 0172 (77) 3 5 1 3

青年劇場機関誌 No. 5

リアリズム演劇の新たな可能性に
指針を与える粒よりの内容

「多すぎた礼束」の演技をめぐって

後藤陽吉・小竹伊津子・森三平太
松波喬介(司会・瓜生正美)

「かけの砦」のリアリズム 堀口 始
「スタニスラフスキイからサイバネティ
ックスまで」

—演劇の現状と問題—

千田是也先生にきく
(聞き手 土方与平)

発行所 青年劇場
151 東京都渋谷区千駄谷5-33-6
TEL 03 (352) 7 0 5 4

頒価・送料はお問合せ下さい。

現代をどう書くか — 私の作業 —

△78年度大阪自演連春の交流会における二つの講演▽

はじめに

大阪自演連連絡会議

議長 熊 本 一

息吹、未来、きづがわ、大阪、わだち、府
職劇研、十年実、どんちょう、磨夢の9劇団
からなる大阪自演連連絡会議は、一九六九
年合同公演長谷川伸二作「怒りのウインチ」
以降、どちらかといえば、第二期の職演祭な
どと、切れた所から出発した劇団へとその運
動の中心が引継がれたわけですが、一泊交流
会という型で、十年程前から、集りをもって
いたわけです。一つは五年に一度の合同公演
へ向けての必要性からも、又同じ仲間を識り
合うための要求もあったからでしょう。一
同に会し、飲んで劇団の報告や団員の紹介を

するという出発でしたが、74年合同公演岩倉
政治作「ばんどり騒乱記」以降急速に親密さ
を増し、互いの舞台を観合う関係が深まり、
運動論や、組織、創造に対する交流もされる
ようになり、毎年一月に、自演連主催、新春
交流会として定着してきました。76年、劇作
家の大橋喜一さん「リアリズム演劇につい
て」、77年、俳優の米倉斉加年さん、波田久
夫さん、評論家の中西武夫さんを迎えて「演
技者の問題と自演連運動」そして、今年78年
は新しく出発した春の演劇まつり〆と来年
行なわれるだろう合同公演に向けて、「労働
者作家の話の聞き、働く者の演劇の未来を」
ということになりました。複雑化した状況の
もと、大阪自演連も様々ですが、働きなが
ら、したたかに創作活動を続けておられる芳
地隆介、長谷川伸二、お二人の話し、又その

後の交流の中で、各集団の指導部なりは、可
能性みいたいなものを感じ取って帰ったと思っ
ています。他に、師子座の高橋美美子さん
は、新派仕出し時代失明を宣告されたながら
も、舞台に出た話や、妊娠を隠して三回の公
演に参加した話など、その芝居にかけた情熱
を、溢れんばかりのエネルギーで、楽天的に
語ってくださり、新人や女性は大いに発奮さ
せられたものでした。仲間の中からの、演
技、制作、観客等に対する報告等もあり、40
名の参加予定が70名を超える盛会となりました。

昨年の西リ演総会で感じたことですが、30
名位で勢いの良かった劇団が、現在数名で、
沈滞しているという話しや、児童劇や親子劇
場の取り組みが増え、労働者との芝居より、
児童劇が確実な手ごたえを得られるし、財政

的にうまく行く、等の発言の中に、自分の劇団の問題として、危惧を感じるので。私の属する劇団大阪も最近労働者演劇への問題意識や運動意識が低下し、劇団大阪は「鉄の団結」などと皮肉られた時と違い、たとえば連帯の能力などは発足当時にくらべれば、著しく落ちているなアーと感じられますし、それだけではないにしても劇団活動の中にも、芳地さんいところのセンスの共有が成り立ちにくくなっているという気がするのです。

「劇団員募集」では、8と9割が女性であり、その傾向の中で演劇運動であれば、当然ともいえる観客の女性化と低年齢化現象があり、こりゃ宝塚みたいに意識的にローティーンの女性向の芝居をしなければ、などと考えたりします。しかし、そのファンを、確実に育てるといふ宝塚みたいなやり方は、学校公演をあれだけ精力的にやっていたらっしやる先輩諸劇団の例をみても、むずかしいなアーと考えたり、西リ演劇会で「自立劇団は女、子供に乗っられる、もっと労働者と寄りぎりの所までやる必要がある」などと、生意氣かつ不謹慎な発言になって、皆さんから聖慮をかかったのですが……。

試行錯誤を続けながらも自分達の身近にい

る労働者とこつこつやるより方法はない様です。こんな時に迎えた芳地さん、長谷川さんの話は、私自身にとっても、大変意義あるものでありました。

大阪自演連には、"じえんれん"という機関紙らしきものがありますが、編集者の戴君が退団したあとで、適任者もみつからず、テープを起こすのはあきらめていたのですが、「演劇会議」よりの依頼もあり、急遽、劇団

労働者演劇の過渡期

芳地 隆 介

大阪の北野君にやってもらいました。芳地さん、長谷川さんには突然で申し訳ありません。文責は熊本です。今年春のまつりには、「わだち」が芳地

作品を取り組むといっています。芳地さんの来阪により、東京、京都、大阪の連帯がより進み、演劇関係が出来ればいいなアーと考えています。

労働者演劇をやっているわけですから、いろんな職種の人が集っておられることと思います。質問してもらったり、ディスカッションしながら私の考え方を述べていきます。私の本を読んでもらった人には、これまでも私が多様な仕事をしてきたか、年令なんかについても見当がつくと思いますが、20年ぐら

まず今、労働者がどんな状態におかれてい

るかということ、ちゃんと認識しなければいけないと思うんです。それは私が、こうして体を痛めたというではありませんけれど、労働自体が変化してきている。いろんな職種

がありますので簡単には云えませんが、非常に労働自身が単純化してきている。とくに70年代に入ってきて単純な復作業が増えてきた。つまり、アメリカのシステムが入ってきて、合理化が進み経済成長とともに非常に単純化する労働が一般化してきたということがあります。

これは、芝居を作る上で反対の状況になりつつある。芝居は体を解放して、自由にするということですから、それと反対の方向に社会の状況が進んでいるということなんです。

二つめは、ものごとをいろいろ想像する条件がなくなりつつあるんじゃないかということなんです。昔は、何か食べるにしても、これとこれを組み合せてとか、工夫してやっと思わんですが、今は、カップ、カップで間に合せてしまう。考えていく条件、想像していく条件が壊され、限定されてきているんです。これも芝居を作ることと反対の生活条件と云っていいと思うんです。

第三に、話し合うことがむずかしくなっ

きている。たとえば、一緒に働いて同じ仕事を手作業でやっている時には、喋りながらやることができなくても、労働が単純化してくると、おたがい喋れなくなってくる。

日常生活の中でも、家族の間で一人づつ机やテレビ等を持つようになってきて、お互い話し合う関係がなくなっている。以上三つばかり芝居を作ることの反対の生活条件が増えていることを相手どらなければいけないと考えているんです。

その中で、我々は労働者演劇というか、労働しながら芝居作りをしていくという自己規定をしている集団は、今云ったような条件があることを先ずは知っていなければならぬだろうと思うんです。これをね返すことは大変なことだと思います。しかし、そのことは結論的に言えば、逆に芝居を作る上に大きな材料になる。

そういう悪い条件をどうしてはね返し、どうやって自分たちが持っている創造力の未熟さとどう対応させていくか、いわばプラスの条件にもなり、マイナスの条件にもなっていくということなんです。

創造というのは、ものをどう見るといふことなんです。私は、テレビを見ていてドラ

マよりコマージュの方が好きなんです。コマージュというものは、現代の在り方を反面教師的にいろいろ教えてくれるんです。たとえば、野菜を作る人、食べる人というのがありました。それを私の子供に、このコマージュをおかしくないと聞いたんですが、こんなの当り前だと云うんですね、野菜をお母さんが作って息子に食べるよ、って云っているんです。若い人が年寄りにむかって、気をつけろよって云うのが普通だと思わんです。

コマージュは反対になっている。女房にも、おかしくないかと聞いたんですが、野菜の宣伝だから仕方がないじゃない、と返ってくるんですね。関係が実にいびつになっていると思うんです。そういう現象化している中に、いろんないびつなものがある。

そのいびつさを見ぬく感性というか、感覚をつかんでいくということが重要になってくる。つまり、さきはど云った条件を、どう相手どるか我々の条件を云っているわけですけど、それを芝居を作る必要条件の一つにしなければならぬと考えているんです。

二つめは、芝居は集団で作るわけですから集団創造をどう考えるかということが非常に重要だと思わんです。これは当り前のことで

すが、なかなかできていない。東京のプロ的な劇団の仕事しながら見ていると、各セクションが機能化しているんです。早い話が、照明株式会社があるし、舞台監督の会社がある。悪いと云っているのではなく、金を払えば何でも間に合うといったように、どんどん機能化している。その機能化というのは、社会の在り方と関係しており、芝居の世界でも、それが進行していると思うんです。

集団創造というのは、相互のジャンルがデイスカッションしながら作らねばならないということが云われてながら、うまくいってない。芝居を作る内部から機能化が進んでいるわけですが、芝居は、もう少し集団で議論されるべきです。このことは、集団でやるのですから集団の民主性に関係があるし、その人を民主的に鍛えるということや集団員の主体性、あるいは俳優に自立性を持たせるといふことに関わるのですから、もう少し問われなければならないように思っています。往々にして機能化する傾向があって、演出家が一番えらいとかいいうんじやなくて、集団でどうやって作っていくかということを重視する必要があると思います。

しかし、一方で、それが可能なのかという

疑問も持っているのですが、集団で作るといふことが問われなければ、本当の意味で民主的にできないと思うんです。

私が本を書くことになったのは、芝居を初めた頃、民話劇の盛んな時代だったんですが、見ていておもしろくないなど云っているうち、それなら、お前が書いてみるよ、と云われてやりはじめたんです。

最近、「演劇会議」を見ていても創作劇が増えてきて、既成のレバばかりをやっているんじゃないんです。私は、労働者がおかれている実体を芝居にしなければ仕様がなし、今ほど、それがせまられている時は、ないんじゃないかと思うんです。だけど、実は本当にむずかしいことなんです。我々がおかれている労働の実体や、生活を誰が書くかといえど誰もいないんです。結局、我々が書かなければ誰もいない。逆にそれほど、お互いの労働の実体や生活がわからなくなっているんです。たとえば、私は、全電通に勤めている諸君と、よく仕事を一緒にするんですが、一人一人がどんな仕事をしているのか聞いてもわからない。電通は、先進の情報産業ですが、友だちの私が聞いても理解できない

い。それを専門家の誰かに書いてもらおうとしても、到底、無理ですね。そこに働いている人が、やらなければダメだと思えます。今労働の実体を出すだけでも、とても重要な問題があると思うんです。

先日、繊維労連の職場を見せてもらったんですがどんなに、自分がわかってないか反省させられます。「野妻峠」や「女工哀史」とどう変っているか、「明日を紡ぐ娘たち」から、10年たっているが、どうなっているか、自分の職場でも、どう変ってきたかわからない。そういうことが構造的にそうなるわけ、そのことを知らせていくことだけでも、告発になっていくという気がするんです。

私の職場でも、小包が壊れるようにしか扱われていない。ていねいさなど全くない、四階から一階まで、ボタン一つで落されてしまふ。こういう例は、皆さんの職場の中にも一杯あると思うんです。そんなのが、芝居になかなか見えて来ないんです。そういう意味で、創作万才なんて気はないんですが、もっと、そういったものを向けたものを創りださなければならぬと思います。

二つめに、じゃ、そういうものを、どう作

っていくのかは、私たちの課題ですから、簡単に答えは出せませんが、それを、どう自分のものにするかと云えば、一つは前段で、抽象的に云いましたけれども、あえて簡単に云ってしまえば、俗にいうプロフェッショナルな真似をする必要は、ないんじゃないかという気がしますね。どっかの劇団の真似は、できるだけしない方がいいと思います。

発想、想像力を、どうやって自分独自のものとして持ち得るかということ。ものごとを絶えず疑ってかかること。これは、プレヒトなんかも云っていることなんです。まず、疑ってかかることが、発想の起点になるわけです、どうやって変えていくか発想の転換が、重要になってくると思うんです。これは、演出や役者をやるときも、もちろん、本を書くときも全部同じだと思うんですね。役者さんには良く云うんですが、自分がこうなりそうだなと思ったら、一度反対のことを考えてみてくれと注文を出して、そこから発見してもらうことを心がけています。プレヒトに、「見なれたことを、見なれぬように見よう」という言葉があるんですけど、そういうことは、基本的に重要なことだと思うんです。

三つめには、運動ということ、どう考え

るかということ。価値感が多様化していると、よく云われますが、何をお互いが共有しているのか。このことでは一致できるということがなくなってきた。私はセンスの共有といっているんですが、そういうことが芝居の場合は、集団でやることだから、センスの共有が成り立ちやすいわけです。

芝居であるからこそ、その集団がどうやって、センスを共有していくかということが、やりやすく魅力があるわけです。そこを運動として考えながら、センスの共有についてデイスカッションして作っていく。そのことが、その集団の独自性を育てていくし、他の集団に影響を与えていくと思うんです。

最後に、現代はいろんなことが多様化して

芝居に対する魅力について

長谷川 伸 二

かをつかんでもらえばいいと思います。

ここ(寿光寺)は、私ものなじみのあるところ

合活動をしていたんですが、どうしても芝居との矛盾というんですか、そんなものが有りました。組合の幹部活動家というのは、だいたい芝居をやっていたものが卒業してやるんだというジレンクスがあり、理解してもらえないという点でやり易かったんですが、逆に、「今日は組合で仕事があるから」ということで支障もありました。すでに労働組合との関係は密接だったと思っています。事実、稽古場であるとか、芝居の上演も職場の中でやっております、また、稽古場や経費の問題や上演についても、労働組合との密接な関係でできていたわけです。

昭和28年、職場演劇祭等があり、労働組合の中でも文化祭がやられ、公社側も、文化的な娯楽を与えなければならぬということ、公社が金を出して、私たちが芝居をする。もちろん、賃金をもらいながら休憩室で公演し、その間は、皆なも仕事を放り出して親に来るといふ状況もあり、そういう芝居のやり易い数年があったわけです。

それが何故やりにくくなってきたかといえば、「品質管理」の問題が出て来たり、労働組合が文化の問題をどう考えているかということが有ります。最近の組合の大会議案書なるとの間が、うまく行かなくなり、稽古場、経費関係が断ち切られて、外で芝居を進めていかざるを得なくなり、いろんな事情はあったのですが、赤木正賢の「白衣の告発」という芝居を最後に、演劇集団「へちま」の活動を停止した次第です。

私は、その後も芝居を続けていきたいというので、劇団大阪のみなさんと「ゆるしちゃん」の山河を作ってきたんですが、この作品は、技術革新を進めていくと人間はどうなるのかということ、どうにかなった人間が、今度は職場をどのように考えているのかということを書いてみたかったです。それが、ちょうど東京の電通の職場なんですけれども、職場で沖繩基地の問題や、合理化反対、賃金上げろ、とかいうパッチやプレートをつけていて、それを勤務時間につけていてはならないということで裁判になった「パッチ権闘争」の話と、「ゆるしちゃん」の山河の中で主人公の役割を果たしている西村忠太という人が、合理化が進められていく中で、古い技術者が犠牲になっているが、パッチやプレートを集めるのが好きで、いろんなパッチをつけ職場の中で自分の位置を決めており、しかも痛快に、パッチの問題を管理者

ども見ても文化について2と3行しか書かれていませんが、当時は、最低、1と2頁にわたって書きました。それは、職場の中に、機械化・技術革新によって合理化が急テンポで進められることにより、労働運動の方について行けなくなるわけです。職場の中には、非常に恐慌状態がおこるんです。特長的なことをいえば、今まで手で電話交換していた局が、自動化されることによって、電話交換手がいらなくなるんです。しかも、技術者も少なくてすむわけです。何十分の一、何百分の一、の要員でいけるようになる。

そのために、それらの人に退職勧告や配置転換しなければいけない。そういう問題を労働組合は、どう受けとめるのか、合理化にもなる労働運動が立ちおくれたことがあったわけです。その元兇である機械化・技術革新による合理化の問題を書こうとして「迂回路」という作品が出てきたわけです。

「迂回路」というのは、現在よりも、さらに新しい自動交換機を導入する時期、実験段階、それから実際に使われていく経過の中で、ハイレベル技術者の人たちを技術革新の中で、どう考えたらいいのかということを書いてみたんですが、ハイレベル技術者が管理者

に斗っていく、その西村忠太は、それを斗いとかという認識をもっているか、いないかわからないんですが、私は、はっきり斗っていると思ってるんです。その人を、パッチ権闘争と絡ませながら、ゆかいに痛快に闘いを進めていく人を書いてみたいなあと思ったんです。下敷きには「阿Q」とかがあったんですが、日本の「阿Q」を書いてみたいなんかという大それた考えがあったわけです。

以上のような現在の自分の職場の中で、自分の目を通して、いろんな状況やら、人間関係なりを表現していきたいというのが私の一環として書いていく姿勢です。自分らが職場で働いておいて、働いているということ、自分たちが見て、ウソのない連続して矛盾なく生活を維持していけるような状態をなんとか作り出していこうという姿勢で芝居を書いていこうと思っています。

「ゆるしちゃん」の山河を書いている時に、魯迅の書いたものを見ると、「徹底の徹底」というものや、「まあ、だましてもええやないか、そういう時代やで」というような随筆があったりするわけです。現在の状況の中で、どう自分たちのやっていることを正当

をなぐることでしか解決できないという、何とも不様な怒りでしか表現できなかった、にが経験もあり、もっと、機械化なら機械化で、見通しが持てなかったものかと反省させられている。

その「迂回路」という作品で技術革新という問題をとらえてみたんですけども、一方、急テンポで進められる合理化の問題と、労働運動のおくれというものの中で、何とか実体をあばき出して、人間の尊厳を守ろうということがあったわけです。そこで、千代田丸事件というのがありまして、千代田丸という海軍艦隊が朝鮮海峡に出港を命じられたのを、拒否指令を命じた労働組合の幹部が首を切られたんです。それを不当だと提訴して裁判を争っている中で、労働側から、組合員としての権利を取り上げられてしまい、全く何が正しいのか、私の中でもわからなくなってしまう、「怒りのウイッチ」を書き上げることになったんです。この中で、本当に働いている人たちのことを考えているのは誰なのか、どういう人たちなのか、自分の目で確かめようと思ったんです。

ちょうど、この頃、労働組合と演劇サーク

化していくかということ、肩を張らずに、もう少し見通せるように一緒に楽しみながらやれるようになればいいなあと思っています。

芳地さんが云われていたように自分たちがおかれている状況、拡散されている人間関係労働に対する考え方は強烈であるし、深刻化してきている。労働の様相もわかりにくくなっていくと云われているんですが、自分自身の状況というのは、これほど単純になっていることはない、自分のことは良くわかっていと思うんです。相手との関係でわからなくしている。これを誰がわからなくしているかということを書いていく必要がある。

知らないことを書くより、知っていることを書いていくことが重要だと思っんです。皆さんも、知らないことを云うんじやなしに、自分が見聞きし、体験していることを、大胆に出していき、それで疑問を感じたら、その疑問をさらに発展させ、つき当れば本を説き、先輩にきいたり、自分で工夫して、何年間かつづけていくことが運動とのかかわりにもなっていくだろうと思っんです。

書かれた本の内容と、芝居の技術的な本でもいいですが、自分の作ろうとしている芝居

との落差ははげしいこと、これを埋めるためには、並大抵な努力が必要だと思ふんです。その努力にひしがれる方が大きいんじゃないかと思ふんです。専門家であるならば、そのへんは抜けていくかも知れないけれども、働きながら芝居を進めているならば、もう少し自分の状況を見つめていく、その見つけ方を徹底的にやってみよう努力をした方がいいのではないかと思ふます。

まだいろいろお話ししたかったのですが時間が来ましたので終ります。



長谷川さんの話を聞いて

長谷川さんの話は自らの作品が生れた背景を追い乍ら、何故この作品が生れたかを説明され、そこに創造者として目を向けるべき問題点を編り起してくれた。

長谷川さんは電々公社に検査官として勤務されたが、六一年に「蜘蛛」六二年「異常点物語」で、技術革新合理化の進展する六〇年代の職場を内部から鋭く描いた。そのあと「共働きの記録」を描いた。「零余子」は作者自身共働きの体験から託児所の悩みにぶつかることによって生れたといわれ、「迂廻路」「怒りのウインチ」「よろしやんの山河」などは、まさに電々公社の中に働く技術者が合理化と技術革新に闘いを挑み労働者も組合も職場を追われる体験から描かれた。

私は自分たちの生活に虚がなく矛盾のない生活ができるよう願いをこめる。

肩を張らず仲間と一緒にやってみよう。でリアリズムを考える。

―拡散される人間像と単純化される労働条件は、最も大切な人間の創造性が無

視されていることに目を向けた。と話された。六〇年代から七〇年代の社会状況の中で、職場も個人も、創造活動文化活動のしにくい環境にある―だからこそ一人になってはいけない。仲間と共に演劇活動を続けなければ、拡散されている人間関係―すら見破ることができない。それほど巧妙な社会構造でしばりつけられていると指摘された。

にもかかわらず長谷川さんは八〇年代に向けて、さらに魅力的であるための創作の方向を話された。

―生きている楽しさを描くこと。それが芝居の楽しさにつながりなまの心のふれ合う美しさまで発展する。

―だが、作家も演技者もそこを描くには何かにつかり、何かを見抜かなければならない―

むつかしい問題を提起されて話は終わったが、長谷川さん自身自演連運動に支えられてこそ創作活動が可能であったと私は思えた。(劇団十年実 真部 利治)

東り演第3回「演劇大学」を了えて

黒 沢 参 吉

第三回演劇大学は、いくつものかなり大きい問題を踏にのこして、終了した。

三六劇団―八〇人という参加数も、全般の運営も、五人の講師による講義も、さらに当日まで波乱にゆれ続けた六つの分科会さえも、寄せられたアンケート(五八通)、大学事務局の総括、分科会チェータの報告、そしてその後の参加者の感想等から、ひっくり返って成功と判断できよう。

一回失敗したら命とりになる―誇張でなくそう考えてきた事業だけに、三年連続ともかく、参加してよかったと認めてもらえたことは、卒直にいつて嬉しい。

第三回演劇大学の実施された要項は、次のとおりであった。

会場は前回と同じ、大宮市国鉄職員集会所八重垣荘(埼玉・塚越松雄氏のご尽力で)。

二月一日 一五時開校。

講義「私の歩いてきた道」 清洲すみ子氏

〃 「現代にとって有効な演劇とは」

沢木 憲氏

〃 「今日の企画について」 土方 与平氏

交流会

二月一日。

報告「私たちの舞台への問題提起」 黒沢参吉

講義「現代をどうとらえるか」 芝田進午氏

分科会(一四時―二二時)

交流会

二月二日。

分科会(九時―一〇時半)

講義「演技のはなし」 水谷 貞雄氏

まよめの全体会(一五時半開校)

分科会は、(1)企画について (2)演出の仕事

(3)演劇をどうつくるか(稽古のあり方) (4)

美術の仕事 (5)照明の仕事 (6)効果の仕事

(7)作家と作品研究(こぼしひろしについて)を予定したが、照明と効果については希望者が極度に少く、成立不可能と判断して、今回は中止。また(3)には三〇名を超す主に演技者が集まったため、言語訓練中心の(3)Aと肉体訓練中心の(3)Bに分けた。

分科会では又、(1)に土方与平氏、(2)に岡部政明氏、(3)Bに千田集生氏、(4)に岡島茂夫氏に、担当あるいは助言者としてご協力ねがった。

願を追って講義から大学の内容に入っていく前に、コマージュを一つ挿んでおく。劇団やまなみの深沢憲治氏が、大学の全コースを録音してくれ、各劇団で必要なものをダビングして実費で領けてくれる。学習等に活用されるとよい。(案内別掲)

清洲氏の自伝風なお話を、ちょうど同じ時代の東京近辺を貧窮の中で育った私は、ホロ苦い懐かしさで聴いた。ご本人はしきりに、身上話でと謙遜されたが、魅了されたのは懐古派だけではない。欲をいえば第一次新協劇団当時からの道の程を、もっとヤメこまかに伺える時間がほしかった。前回の長岡輝子氏もそうだったが、教訓臭の少しもない人間の裸

身をみせてくれるお話は、美しく愉しくしかも教訓的だ。

アンケートの印象をひろくと、○後輩の女優の一人として、とても感動○さりげない語り口の内にしたたかな根性と情熱をみる○問題にぶつかった時、体あたりしていくところに、私の生き方も「これだ」と思った○演劇に人生をかけた人の自信、エネルギー○女優志望として身につまされること多大。当然だが、若い同性の共感が目だつ。

茨木氏の講義は、その中で氏自身が幾度かくりかえされたように挑発的だった。いまや東り演の間でシンボルマーク化した、地域にねざすとか、労働の中からとか、現実に学ぶとかの概念をうちくちだいてごらん、そのくだかれた破片を君らをささえている基盤に立って、君らじしんのものとして再構築してみたまえーという勧めは、女性から叱られるかも知れぬが、殊更に男性的であった。

地域とは何か？ 土着性イデオロギーでは都市化現象で特殊性を失いつつある今日の地域をとらえることはできない。時間＝過去から未来をつらぬく歴史、空間＝社会的生活をささえる場、この縦横の軸の交差点として認識するとき、地域から世界が見えねばなるまい

し、演劇の方法も多様に拡がる。その意味で、京浜協同劇団の「金冠のイエス」は、あるべき地域演劇の典型といえる。

現実の状況は複雑といわれるが、それをどう把握するかが専門であれ業余であれ、演劇の共通課題であろう。舞台をとおして今日の状況を正しくとらええがきだすには、確かな方法論が必要であり、その探究が観客との結合、地域との密着を可能にする。

労働の中から演劇をつくりだすことが、かつては矛盾なくできたが、今日欲びや誇りを労働から得られる職場は稀有といつてよい。働くことが演劇にプラスするという命題が古典的になった以上、労働で失われる人間の生甲斐や創造性を演劇によって回復しようと考えるのが自然である。業余演劇というものの発想を、大胆に転換すべきではないか。

その上で、欲びとは創造性とは何かを問いつめたらどうか。歴史と地域の軸にささえられて生きる以上、我々をめぐる社会的現象と無関係な立場にありえない。しかし、現在の演劇には意識的にこれにこだわらない傾向がつよい。そこで東り演の諸君は、社会的現象に意識的にこだわって創造活動を展開してはどうだろうか。

これこれの理由で上演したいとせつつかれるとか、これがお客さんの要求だといえるものをつきつけられるとかの経験も、幾つもの劇団がもっているだろう。

企画というものが、才たけた企画マンやグループへの依存からでなく、集団全体から湧きあがって来るようにしたい。民主と集中という集団のルールを単に組織の原理にとどめず、創造の根源としてとらえ劇団員ひとりひとりの飛翔を保護してこそ、その願望は実現する。のちに触れる企画の分科会が、ひろく劇団活動全般にわたる討議をおこなったというのも、右の意味で当然であろう。

○(4)とかく当面の舞台づくりに意識を奪われがちの日常だが、それを支えるための土台であり、創ることを確かにするものであり、われわれの仕事の将来にかかわる課題でもある認識が鋭く研がなければならないということ——(5)認識自体の正確さと、体系的が必要であるということ——(6)講師自体の生き方が、求めている論理と重なり合って進められていることが見えたこと——感銘をうけた、とアンケートに記入されたのは、芝田氏の講義への感想である。

他にも、○視点の大きさ、こんな目を養いたい○自分のやっていることの立場をしっかりとおさえなおす絶対必要性を感じた○芝田氏の生き方に感動、体の中に熱いものがふき出てきた○目先の公演活動にしか関心もてない中で、もっと内外の情勢に敏感であることの大切さを考えさせられた○巨視的なもの見方とともに、あのように平明な魅力的な語り方で舞台をつくらなければ、と、多くの人が強烈にうけた印象を記している。

人間の歴史、世界史が巨大なドラマを内包しており、人権と自由を求めるたたかいが新しい世界を劇的に展開していく、そこをこそ諸君の舞台に——という芝田氏のよびかけといえる指摘は、スケールも大きく斬新であったが、私には若い参加者たちが、それを抵抗なく吸収している姿があわせて新鮮だった。

現実には、私自身も発見すること、そこからドラマを再構築することの間には、たとえブレヒトが「真実を書く際の五つの困難」で示したような容易なさがちかちかっている。それは疑いもないことだが、○芝田氏の視点と情熱は、私自身の今後の仕事に新しい開眼をせまる。という自覚は、やはり貴重だ。

参加者の多数をしめた演技者たちが、清洲

とうていこのような要約では伝えきれないが、アンケートの殊に男性の多くに挑発への反応がよみとれる。○逆説的論理に改めて地域性と自分自身の創造の問題をつきつけられた、手さぐりでもやっていきたい○自分のやっている活動の重要性を改めて感じた○私の中へ投げこまれた課題としてひきこまれた○今生きている現実を直視して、今つくりねばならぬ作品があると感じた○集団として何に向かっているのか、その展望を確かめねばというおもい○「地域」認識を新たにして周辺を、その生活と意識をみつめなければ。

青年劇場のレパートリーが、赤ちょうちんと観客の声をベースにきまるといって、満場の笑いを誘う土方氏の講義は、全員が自分の集団とひきくらべて、しかも共通性を感じながら聴いたのでないか。だが、天邪鬼な言い方を許してもらえば、多くの集団でことはどのように運んでいるのだろうか。赤ちょうちんで「マクベス」提案の下地がつくられたり、レバ選択の基準になりうる程に観客の声が収集されたりするというのは、実は大変なことではないのだろうか。

ひとりひとりの劇団員から、この作品を、

氏のそれと並んでつよく惹かれたのは、「蒸しお前はなぜ来ないのだ」での役づくりをめぐる水谷氏の講義だったとおもう。

かつて私は、金芝河の「鎮悪鬼」を上演した日韓国青年組織のメンバーから、この芝居をやったため何回か殺されそうになったと聞いてうけたショックを本誌に紹介したことがあるが、同様の水谷氏の体験は、K CIAによる金大中拉致事件ひとつとっても、単純な厭がらせなどとおしまいに

ならないことがある。ひとつの役を、そういう緊張した状況の中で演じることはめったにないことだろうが、水谷氏の挿話は、状況と芝居のかかわり、芝居と演技のかかわりにおいてたいへん示唆に富んでいる。朴正熙の崇拜者かK CIAか知らぬが、テロリストが仮りに「殺す」とすれば「怪しからぬ役」を演じる演技者なのだ。殺すならこの役を書いた作者か、この舞台を生んだ演出者にしてくれ、と叫んでも、多分ダメなのである。つまり、舞台の世界を最後までトントン背負うのは（背負わなければならないのは、或いは背負えるのは）、演技でしかない。

注釈すればそれは、演技の自立ということ

だろうが、私たちに演技がそういうきびしい面構えで見えているだろうか。アンケートにおもしろかった、たのしかった、との回答を多くみると、お話しもポドテキストをきききとって——と、演劇老年はお節介をやく。

演劇大学の講義が毎回好評といっても手前味噌にはなるまいと思うが、今回もそのようであった。とくに今度の場合、五つの講義が演劇創造の要にむかって角度を変えながら集中している点に特徴がある。意図してそうならなかったわけではないが、グローバルな時空にかわり現実状況にこだわって自己の立地点——地域をおさえ、自立した創造者として集団のドラマづくりに参与する、そこに生きた劇団活動のサイクルがある、という軌道がクッキリ描きだされたとおもう。

私のやった報告は、例によって温情的で徹底を欠くと批判された。このままでは東リ演の芝居はダメになると、実例を挙げて叱咤するのが与えられた任務だったが、どうもそうは聞こえなかったらしい。あれを聞いて、フンドシをしめなおそう(失礼)と、どこの劇団も考えてくれなかったら、報告は失敗である。

してほしいとの声があった。

(2)演出分科会の久保田明氏は、助言者の岡部氏をして、*「まずは演出の皆さんにご苦労様と申しあげたい。」*と言わしめる——演出者をとりにくく(雑音的な)状況がある、と前おきして、「女の一生」「小市民」「若者たち」の演出報告にあらわれた、演出外的(或いは前助)大変さを十二分にわかってしまうことへの抵抗から筆をすずめている。

*「日本文化、演劇運動を云々するが問題にならぬ水準の舞台が大半。」*という、主に演出者に向けた黒沢報告をうけて、疑う余地のない劇団のエネルギーを一つにまとめ、あるべき方向に突放する演出者の責任を久保田氏は次のように問う。

「若者たち」が三部までの映画シナリオで、登場人物を新しい時代の状況に追いこんでいる時、どうして我々は第一部で止まっているのか。「小市民」ベッセミョーノフと若者ニールとの対決が、ニールを好きになれない等という役者の中でどう創られるのか。

「女の一生」公演を一週間後に控え、稽古態度のよくない役者を降ろそうとした演出者の氣迫は、彼を変え周囲を変えはりつめた舞

六つの分科会については、担当者からそれぞれ報告を頂いた。紙数が許せばそのままの掲載が一番よいのだが、要約にとどめざるをえない。

(1)企画の分科会について担当の丸子礼二氏は、前出のように劇団活動全般に話題がひろがったと述べている。従来の制作—普及のワタをはみでて、企画の機能が劇団存在のポイント、進路の象徴と理解されている。

参加劇団の実情報告からスタート。団員の減少、観客数の低迷、周辺サークル劇団の消滅など状況は深刻、参加一二人中、一ケタなしいし一〇名前後の劇団が七つという。不況—物価高の投影と諦観してられないこの実情を、どうきりひらくか。

「日本の現状では演劇は伸びようがない、フランス等のように、国家助成を実現すべきだ。東西リ演で独自に調査し全国的な要求運動をおこさねば」との土方氏の助言。自治体とのかわりの諸例が出る。東京目黒区のぶどう、川崎の京浜など、助成—依頼料が製作費に追いつかず赤字を劇団が背負いこんで、しかも入場無料の不合理さ。名古屋の場合、芸術奨励賞、会場費半額助成(各劇団年二回)、青少年のための芸術劇場(助成八〇万、

台を生んだという。妥協のつみ重ねが演出者の要求を鈍らせ、ついにはその志までを低い所にひきさげてはいないか。交通整理など自願めいた仕事のしさまは、演出者の自願自縛であり、そこから自立したスケールの大きい斬新な演技の出現は、望むべくもない。

また、例えば、つかこうへいなど、到底うちではやれっこないと決めてかかるばかりか、あんな作品読むものも不穏といった自己規制が働くとしたら、我々のリアリズム演劇とはいったい何か。あれだけ人を集めているのだ、ひとつ演ってやろうという劇団はぐるまの姿勢が、例外では困るのだ。

自他の批判を遠慮なくかみ合わせて、演出の仕事や丹念に洗いだすところまでは行きつけなかったが、三演出者の報告、演技者からの助言等がやや機能して、演出分科会は聞きようがないとのジンクスは破れたようだ。こういう舞台が創りたいと話もひろがってきだし、もう一工夫で次回のメドもみえてくる。ここでも幾人かの出席してほしい人の顔が見えなかったのが残念。

○比較的内容深いものになった、更に課題を明らかにして学び合える場に○自分たちの創る課題を明確にするための討論を○何て魅

有料)と同じ革新自治体でも凸凹の差著しい。支木から青森市民小劇場建設の報告、一〇七文化団体の結束で推進、運営も利用者に任ず二期的な方向。ひろく文化団体と連帯しての市民権の確保と、全国先進例をキャッチしての自治体への持続的な働きかけが必要。

地域にねざす劇団活動ということで、各劇団の基本姿勢、歴史や体質、劇団生活の諸問題、レポートリーの選定、稽古の状況と普及の実体などが、かなりつつこんで話合われたし、同時に住民と一体となって地域の文化状況を変えようとする諸活動——たとえば、文団連活動、子ども劇場や小劇場などにも論議がひろがった。設定された九時間では不足と、報告は記している。

一二日朝のまとめは、劇団の主体的力量を直視しながらも、そのワタに閉じこもらぬ先取りした企画をもち、団員の意志を行動にたせる燃える稽古場をつくり、一つ一つの活動をつみ重ねることで地域定着の種子をまきつつける、と提起している。また湘南の貞包氏が、今まで企画という概念がなかったが、今後毎年このテーマで問題をもち寄ろうと、最後に提案した旨伝えていたが、アンケートには全劇団から必ず一人、この分科会に参加

力的な演出がいるのだからという意見を聞いた、問題点をしぼって○三劇団演出報告のポイントが不鮮明、課題として発展しない○演出の技術、方法について学びたい○演出理念ないし理論を話し合いたい今後の課題——展望を見出したい、企画—運営にかかわる話が多い。

(3)A演技(もの言いを中心に)。こぼやし担当の報告は、いささか衝撃的である。

男八、女一四、計二二人が参加。一日午後前半、演出とはどうあらねばならないか、芝居づくりとはどういうものか、について、後半、日本語の長所、欠陥、特色について講義。

その間、いろいろ日常的に困っていること、又、問題になっていることを聞く。「稽古していても、これでうまくいっているのか、どうかわからない」「演出が具体的に言ってくれないので困る」「どうしたらうまくいえるのか、教えてほしい」等々の声。

演技者がうまくなりたいたいの、方法論が確立せず苦しんでいるのがわかる。演技者のこの要求に演出は応えているのか。応えられず頭をかかえているならまだしも、頭をかかえていないから問題は深刻である。

講義に続き、もの言いを具体的に稽古して、声の出るのはほんの二、三人。他の人は自分の音声の歪みに気づいてもいない。

(1) 反覆するリズム (2) 同じ間のくり返し (3) 同じ語尾のくり返し、語尾のはね上り (4) 音声の振幅、強弱が自由にならない (5) 息つぎの間、息を補う間、息をとめる間がわからない (6) 息がぬける瞬間発声ができない (7) セリフに行動、状況が伴っていない (8) セリフから関係、地位、立場がうかんで来ない (9) 言葉の表情、心が表現できない。

こうした欠陥、歪みで身動きできなくなっている。それも、(7) (8) (9) の欠陥ならまだしも、(1) (6) の歪みが具体的に指摘されても、何度口伝えで言っても修正できぬ人がいる。音痴と同様、耳の問題か。俳優術の殆どをしめるというの言いがこれでは、演劇が成立する筈がないといっている。

磨けば光る人もいる。それが演技でない演技をくりかえしているから、いつまでたってもうまくならない。これでは演出できっこない。驚いたことに、こうして具体的にしほられたことがないという。不協和音しか出ない楽器で演奏会をやるようなもの。さっぱの木下刑事をやった高橋君や、やまなみの布引け

いをやった榎本さんの歪みをきいてると、これで「泰山木」「女の一生」など、想像を絶するといわねばならない。

演出に聞いて貰いたいとの声あり。解釈ばかりで、役者の基本的な欠陥を見ぬけない演出では発展がないと考えたからだろう。改めて東リ演の演出家は、まず役者を十分調律した楽器にする事から始めなければと痛感。

(3) B演技 (肉体訓練を中心に)。これも千田担当の報告を、ほぼそのまま。
参加者男四、女五、計九人。

体操 (実際は体操と発声半々) は、かつて東リ演数プロック等での経験と反省にたち、次の三つを目標にした。

- ・ 少い時間で日常訓練をする方法
 - ・ 自分を客観視する習慣をつけること
 - ・ 身体を動かすことが楽しくなるやり方
- どの劇団も共通の悩みは、時間がとれない、人が集まらない、演技と結びつかない、苦痛のみで面白くない、ということ。
そこで、朝起きたとき、道を歩いているとき、電車に乗っているとき、会社の休憩時間、フロアが短い時間で日常的にどう習慣化していくかということ。また、何人かで

組んでお互いに観察しながら身体で対話すること。遊びを加えながらやること。ただし、その動きに夢中になるのではなく、必ずその動きを客観視するもう一人の自分をおくこと。日常生活の中でふとした動き、声について指摘し合うのもよい。

以上のことを中心に二日間やった。
一〇人ということもあって、一人一人観た交流できるのが大きい収穫。時間の配分の問題もあるが、今後も小人数での講座を考えてはどうか。残念だったのは、大声をだしたりはげしく動きまわるには会場が不適な点。

アンケートからA B二つの分科会への注文をひろくと、Aについては、○人数が多すぎて実習一個人指導がまわってこない○非常に勉強になった、もっと多めに参加せよ、今後もぜひ続けて○時間が足りない○演出希望者も参加を○参加するがわの自覚、準備が必要。Bについては、○もっと時間がほしい○会場の配慮、公民館学校等が借りられないか○テキストがほしい○なんて人間の体ってすばらしいものなんだろう、俳優は体が財産、もっと大事にしよう。

(4) 美術の分科会。佐藤張二氏担当。

この分科会はゼミナールのそれも含め歴史も長く、顔ぶれも固定してきている。

それで、集まるとさっそく最近やった装置の図面、写真、資料等を卓上にひろげてガンガンやり合うといった雰囲気である。その中で言えることは、みんなの仕事が論理的にスッカリというかハッキリしてきたこと。こういう生活だからこういう装置という考え方の基礎がしっかりしてきた。

しかし、抽象化した場合など根底のリアリズムの目がまだ弱い。頭で考えていて、芝居と遊離する傾向がある。又、集団間の差もかなりひらきがある。京浜の「イルタータ」「夕鶴」など、プランを中心に製作のことも含め雑談風だし、質問をうける。

外遊中の園氏にかわって、東京演劇アンサンブルの岡島茂夫氏に、夜二時間ほどの講義をうける。それは主として、発想の問題で舞台美術以前のことといえる。演劇とはどういう芸術か—文学をはじめさまざまな芸術に絶望感をもつ中で、一回性の時間芸術である演劇には希望もてるかもしれない、ということから話の話題は悲劇的であった。

プランたてるとき絵に描くな、どこまでも自由に感性を大切に、感性をみかくには勉強

しかない—装置の理想は何もないことという岡島氏の話は、とくに初心の人にわかりにくいかなと思ったが、芝居とはデカイことを考えるものだ、自分は結構新しいと思っていたが、ケタがちがう等の感想が出た。

大学を講習会にはしたくない。現在到達している自分を公開する場、考えていることをぶつけあって論理をたかめる場にした。五人でも六人でも成立するのが、研究の場としての大学だ。

〇ものを創るといふこと、おぼろげながらわかってきた、役者の付属物でない自立した舞台美術、発見の多いものであった。○効果の分科会が廃止され美術にまわされ無味乾燥、生徒が一人だろうと必ずやるべきだ。

(7) 作家作品研究分科会。チュータ萩坂桃彦氏。参加者四人で辛じて成立の経緯あり。

自己紹介、分科会参加の理由。関心の度合まちまちなので、萩坂氏の「こぼやしひろし研究」の意味を説明。作品の出生由来を瞭かにし作家の成立を究明することによって、多くを学び若い書き手の起点とした。あくまで自分にひきつけて考えていってほしい。
① 劇団はぐるまとこぼやしひろし。高校演

劇の指導、はぐるま結成とこぼやし指導の確立、劇団レポートリー全系譜の検討。

② 作品集で最も良いと思う戯曲として、全員が「豚」を選び討議。岡安氏 (世仁下) のレポートあり、その報告をうける。

③ こぼやし戯曲の構成力。「郡上の立百姓」にいたる習作小品、およびはぐるま創作劇の出发点となった「風化」について。

④ 若者像の問題。「書けない黒板」と「ひしめき」の対比、作者が書けないというのは、今の若者がつかめぬということである。

⑤ テーマを背負う主人公のパターン化、行きつまり。「つくられた英雄」のイーザリイは何故つまらないか。

討議。境野作「木場の鉄太郎」岡安作「別れが辻」など引き合いに出る。

⑥ 頭人物が生きているのは何故か。「黒板」の先生のあるタイプ、生徒。「英雄」の男とローズ。「ひしめき」のおよし。「豚」の良治。

討議。観察が徹し、作者にはっきり人物が見えている。

⑦ こぼやしひろしの人間論。直接生活でふれ合った石垣氏 (仙小) の話が興味深い。

大綱は以上取極として、作者にとって書くエネルギーの原動力は劇団にあり、作者は牽引する立場でも牽引される状態でもある、という劇団と作者の関係。その劇団と観客とのかわりとして、はぐるまが岐阜で文化的市民権をひろげる必死の努力、創造の壁を破っていく劇団体制からの教訓を確認。

東リ演における創作劇への待望は、急を告げ、新しい書き手は足掻いている。かれらをシャッキリ立たせるためにも、先行作家の仕事に学ぶことが不可欠だが、主唱者以外四人という参加は、まさに淋しさ極まりない。アンケートに、山下栄氏(演劇アンサンブルかなざわ)が、私は本日より作家として出発することを決意しました。それは書ける気がする、ということではなく、作家の苦しみを本当に始める覚悟が定まったということなのです。次回には新しい質の苦しみを抱えて参加します。と記入している。

三日目の閉校行事が、今年はセレモニーのムードに流れなかった。萩坂氏のまじめい

わば棘のある論調が、そうさせなかった。しかし、中堅幹部学習という狙いの対象からキレイに逃げられて、そのかわりにお前行

って来いと初級レベルの人を押しつけられた感じは、萩坂氏だけがもったわけではない。むろん、若い人や研究生相当の人を排除する必要もつりもなし、銅鑼の千田氏からの「イカサムの冒険」を引例した、新人を大胆にこころした場に出すことがあたらしい。エネルギーを生むだろうとの提言も尤もなのだが、問題は幹部や古い人達があまり学ぶ必要を感じていないのではないかと、いうところがある。こばやし氏の調律できていない楽器への憤懣も、そこへぶつかっている。

参加した人たちに、大学が一定のメリットをもつ存在として受容されるようになったことは、アンケートの第四回にむけての提案・要求の項が殆どの人によって書きこまれていく事実でわかる。その内容も、一方で今回のように系統的な講義を求めつつ、それだけでは受け身なので討論の場がほしい、そしてそのためには一年間の活動の蓄積をここにもよる参加する側の主体性が欠かせない、とする意見が多い。殊に分科会について、課題を明確にしメンバーの定着をはかり、実践と理論化のサイクルをここからと望んでいる。

ところで、こうした強い学習意欲とかかわって、東リ演外の劇団の参加が目立っている

「こばやしひろし」研究のこぼれ

——東リ演「演劇大学」分科会の中から——

萩 坂 桃 彦

演劇大学の「作家・作品研究」という分科会に東リ演にとって本命ともいえる、こばやしひろしを据えて、参加者が司会担当者のほかに四人とは、正に恐れ入谷の鬼子母神だった。むしろそのことを研究した方が面白い程のものだが、今はそのゆとりはない。ただ、

今年の「大学」は確かに一寸変わった。「照明」「効果」の分科会も成立せず、希望者の大半は、「演劇をどうつくるか。稽古のあり方」(担当こばやしひろし)に殺到した。つまりどうしたら「うまい役者」になれるかが最大の関心事だったらしい。

勿論、それを嘆くことはできない。嘆くのもいけない。しかし折角の「大学」の企画がそうしたものの「だけ」に落ち込むとしたら、これは喜んでばかりもいられないと思う。

「こばやしひろし研究」が素通りして行きそうなことにほくは危惧を覚えたのである。

尤も、劇団はぐるまの代表者であり、東リ演の事務局長として、現役バリバリのこばやし氏を、ここで何も研究でもあるまいとする考えや加えて、萩坂の調子を合せた話など聞いても始まらぬとする考え方も成り立ちそうである。

つまり、企画そのものが興味の対象にならぬとするなら判るけれど、逆に実は今こそ興味を持つべきだとするのがぼくの言分だ。もっともこれは「うまい役者になりたい」という若い彼氏や彼女に向ってではない。はっきり名指し出来る各集団の書き手たち、書き手たらんとする誰彼に向って云っているのである。

劇団はぐるまの昭和五十二年度を了えた総会資料の中に、こばやし氏の「創造の総括」を読むことができる。ここで彼は、昨年、つ

ことは今回の特徴である。集団と参加人員をあげると、銅路どらまぐるま(1)、展望(2)、あすなろ(3)、銅路演劇集団(2)、北陸新協(1)、アンサンブルかなざわ(3)、金沢放送劇団(1)、おけら(4)、土くれ(1)、ぶどう(2)、高津(1)、一一劇団二人。この人々の発言や行動が、もはや東リ演のお客様などでないことを我々は記憶しておく必要がある。

第三回演劇大学の実施にからんで、いくつかの課題が出てきた。

企画分科会での土方氏の問題提起「国と自治体への助成要求運動と関連して、こばやし事務局長が発表した劇団活動実態調査がある。こういう種類の実務は、各劇団もつとも苦手の部分だが、正確な資料はたまたかの武器だから期限内の完了を果たさねばならぬ。

もうひとつ、若干大きいことになるが、我々の運動の到達点と目標をあきらかにするための論文、実践記録をまとめる必要がある。各々の地域・劇団の中に、小さい聖域をつくり守ることもやがて全国に普及する、という発想はもう古い。先進例も停滞例も、公開の中で学び生かされる時代である。

つまり52年度中の劇団公演レポートが悪く再演ものであったことを嘆く思いで受けとめている。「財産の喰い潰し」という言葉でそれを云っているが、これまで劇団はぐるまの興隆を支えて来た一年一作のこばやし戯曲の終焉を卒直に告白しているのである。

これは一人の作家の衰没終想を云うのではなくて、こんにち、発展の見通しや現実変革へのひき金を知覚できなくなったリアリズム演劇の本質を指すのである。

勿論ぼくは、「書けない」を連呼するこばやしひろしを額面通りには受取らぬけれど、少くとも「書けない」と云っているのは何なのか、遍って、「書けた」のは何だったのかを知ることは、こばやし氏等を次の年代で襲うこととするものにとって必須の条件だと思ふのだ。従って、「分科会」の企画は徹頭徹尾こばやし氏に対する阿諛などはなかったし、むしろ彼の諸作品を洗い出すことによって、新しい書き手たちのエネルギーにしたいというのが、偽わらぬ思いだった。

それでなくてさえ、東リ演十五年、そこには創造の蓄積もひきつきもきちんと見ることが出来るとは言い難く、むしろ断層、陥没、変質となつてあらわれているといえる。

暗いトンネルも意識しているうちはいいが
剥れてくると、暗さそのものが判らなくなっ
てくる。

第一次リアリズム演劇作家とこんにちの若
き書き手たちの関係は、ひき継ぎも学び継ぎ
もなく(勿論、一鞭に言えぬ点もあるにして
も)いまや若い彼らにとって、そういう作家
もあったかと記憶の埃りにまみれつつあるの
が実情である。

こんこの分科会に出席し、唯一人、レポー
トを出してくれた「世仁下乃一座」の岡安伸
治は、こぼやしひろしの偉さを認めつつも殆
んど心を動かされていない。つまり、見た目
では全く別のところから岡安君があらわれた
と見るしかない。それはそれで構わぬけれど
岡安君がなめている、こんにち彼の劇団での
創造の苦しみは、こぼやし氏が劇団はぐるま
の草創期において具さに体験したことと無縁
とはいえないのである。一作一作、劇団の命
運を賭けていった鮮烈な歴史は、岡安君にと
って衝撃だった筈である。そのことを、こん
ど始めて岡安君は字んだと云えるだろう。
ただ彼が、テキストの「こぼやしひろし作品
集」の中から、最も好きな作品の一つとして

「豚」を選んだことには、やはり岡安君に次
の世代を感じる。次の世代の岡安君を感じて
喜びつつも「豚」を選ぶことによって、彼は
こぼやしひろしと繋がったとぼくは思う。

「石るつ」の境野修次は「木場の鉄太郎」
という作者で、どこか八方破れの魅力を持っ
た作者としてぼくらの前に現れてきたけれど
「書けない黒板」の頃の定時制高校生として
社会に出て、それに共感をおぼえながら、十
年後の「ひしめきあう不毛の季節から」は、
彼にとつて大いに批判したい作品として出て
来ている。「ひしめき」の昌夫も教師の村井
も現実とは違ふと彼は謂うのである。

こぼやし氏における戯曲の系譜は、夙に書
くべき何かが明確であり、その明確さは観客
の心を射止め、そして観客は確実に劇団のち
からになるといった類のものであった。

それは原爆問題であり、朝鮮人差別問題で
あり、教育問題であり、「郡上一揆」をビー
クとした農民歴史劇であった。

明解なストーリー、必要なだけの人物、撰
ばれたセリフ、考えぬかれた構成は、利刀よ
ろしく局面を切つてゆく。岐阜大学教授の永
平氏は、これを「蛮勇」とよんで、たじろい

だ。たしかに、「郡上」「書けない黒板」に
到るまでのこぼやしひろしは斬り捲っている
のである。しかし、勿論これは、大衆作家か
書きなぐるのとは異質であつて、劇団はぐる
まという生きた人間の集団が、彼の仕事の背
後や根底にある。ぼくには、この、彼の刃が
どこで鍛えられたかが興味の対象なのであつ
た。

劇団はぐるまの第七回公演、こぼやしひろ
し創作劇として初めて登場した「風化」は、
作者三十二才の時の作である。この並々でな
い作品の整い方をみると、彼はその技術を
既にそれ以前に備えていたと見なくてはなら
ない。十四年にわたる高校教師の前半、さら
に遡つて竜谷大学の学生時代ということにな
る。特に彼は多く、大学時代に戯曲作法を学
んだことが計算として出てくる。

こぼやし氏が戯曲について、セリフについ
て誰に学んだかはかまわない。チェホフだろ
うが岸田国士だろが森本薫だろが、その
他もろもろだろが、それは当然として有つ
たろうし、とに角彼が自信の持てる一つの劇
作技術を身につけた時期が、正確にあつたと
いうことがわかればいい。

分科会では、こぼやし作品でテーマを背負

った主人公が意外につまらぬという話が出て
きた。それはフトして「つくられた英雄」の
イーザリイで出てきた。こういう批評は気案
ではあるけれど一面真実を突いていなくもな
い。境野君は頭を読むと結末が分ると云い、
全員口揃えて、ここでおもしろいのは「男」
と「ローズ」である、となつた。ぼくもそう
思う。こういう傍役のうまさも他の作品にも
あつて、「ひしめきあう不毛の季節から」の
おさと、「豚」の良治、「書けない黒板」の
落ちこぼれの生徒など、不思議と筆数少い傍
役、端役が躍動している。

しかし、本来「つくられた英雄」のイーザ
リイが詰らぬでは困るのである。やはりテー
マに人物が負けたのである。若しくはテーマ
をつらぬいたはずの人物に作者はふくらまし
きれなかったということもなる。

これはしかし厄介な問題だ。イーザリイを
あらゆるリアリティに於てこね廻しては
幕が下りない。云いたいことが何なのかも解
らなくなつてくる。実在のイーザリイは、病
名をパトル・ファティグ(戦争後遺症)と
診断され、原因不明の血液病で二児を失って
ノイローゼとなり、ヒロシマ原爆投下への恐

怖と強烈な軍人嫌悪症は、ついには妻との離
別まで招く。敗残の末路が病氣も治つて?
テキサスの小さな町で商店をはじめたとい
うなどの面白さ、無気味さは、小説ならいざ知
らず、戯曲では、視角を変えないと出て、こ
ない。

しかし、現在の若い書き手たちは、こうし
た現象のおもしろさを先にとるようである。
岡安君の「別れヶ辻」も汚物浄化槽の中の人
物たちやビルの屋上から投身を示威する女事
務員の生態を先ず絵づらとしてとらえるところ
からはじめている。

ところでこのテーマと人物の関係で、先に
述べた厄を免れた作品が少くとも二つある。
一つは「郡上の立百姓」であり一つは「豚」
である。

「郡上の立百姓」(郡上一揆)は久しぶり
に読み返して、世評の高さも許されると思っ
た。永平教授も「足で書いた」作品として他
の作品から区別した評価である。

作者三十七才。これを書き上げ上演の成功
もあつて多分翌年、高校の教職を絶つわけで
ある。脱稿までに二年費し、劇団ぐるみ泊り
込みの現地踏査などあり、これに取組んだ時

のこぼやし氏の身内は火照り切っている。一
揆の結末が悲劇であつたことは歴史が語つて
おり、そこにフィクションの必要はなかつ
た。いかに農民を描くかが作者の課題だつ
た。しかも規模は、美濃国郡上郡一三〇ヶ村
の農民たちである。

第一部では、毛見取に抗して立上つた発端
から闘いの諸相を磨り分けて、農民にあたえ
て描いてゆく。一人一人個性的なセリフで群
衆場面を見せる。前谷村の定次郎と歩岐島の
庄屋四郎左エ門の連けいがくっくると浮んで
くる。定次郎の江戸直訴まで、緊迫感が断れ
ない。

第二部の初まりは、直訴して囚えられた定
次郎の籠訴様のお国入りである。この場面の
農民の号泣、怒号の描出は圧巻といえよう。
獄を脱走し、再び江戸への直訴をたくらむ
定次郎たちの悲劇の様相は、定次郎が自分の
妻おかよを弟の宇吉にめ合せる場面があるが
愚通者だった宇吉の讀心の鮮やかさが逆照射
をみせて、悲劇の度が深まるのである。

この作品に、昭和三十九年十一月の岐阜市
での初演に七台のバスをつらねて四〇〇〇人
の観客がおしかけ、翌四〇年七月の名演自主

例會に五六〇〇人の観客、またその年には訪中新劇団のレパートリーになるというおまけまでつけると、その先が怖いほどのものである。勿論ぼくは、そんなことを云うためにこれを書いているのではない。「郡上の立百姓」はこぼやし氏の一つの頂点を示したことを云えば足りる。似てはいるが、「盛拵騒動」や「千木松原聞書」は比較にならない。

「豚」については、どうしてこの作品が生れたのであろうという好奇心が分科会では出た。ぼくは、「良治」の発見らしいと云った。岡安君は、幕あきの「爺とおよし」、幕切れの「およしと良治」のコントラストの妙に心ひかれたようである。岡安君のレポートを紹介しよう。

「何が鮮烈であり、印象に残ったかといえ、ラスト、良治に対して母およしが恐怖するところ、それは何故かを考えたとき、このドラマの完結する見事さがあると思う(偶然を全て取り外して本質を見つめ、逆に本質から偶然を組み立て再構築して提示する)。それはスタートでのおよしと爺との関係が再び鮮明に浮び上るといふ非常に効果的に終るこ

定の山口和紀君が都合で不可能になったことは諒解できるにしても、この分科会が、どこか宙に浮いたとすれば、その責任の一端は、劇団はぐるまに預けたい気が、ぼくはするものである。

結局、ぼくらの「こぼやしひろし」研究は入門のところで時間切れとなった。彼の作品が、劇団との関わり合いで、どんな時期、どんなテーマで書かれたかが、解ったところで終わった。

こぼやし氏がいま、「書けない」と云っているのは、「この時期、このテーマ」への模索であり、彼を突き上げる劇団のエネルギーの拡散化とも無関係ではない。さらに、或は彼の作品系譜でみられる一貫した作劇法が、ここで転換に迫られていると云えるかもしれない。

「郡上」や「豚」に見られた、対象に迫る劇しさは、今、「演出」に所を代えている。これがもう一度、ところを変えて噴出するであろうことをぼくは信じている。

とだと思ふ。つまり、物語(和夫と嫁が家を出てしまふ)の一つの筋が初まり終るといふかたちではなく、一つの人間の世界が表出するという、輪でくくられている作品が、完結することの重要性を教えられるのです」と述べ、続けて「そして一般的に(世間的に)註・萩坂)物語としての完結とドラマとしての成立の混同があるのではないだろうか? 確かに舞台には始まりがあり、中があり、終りがあった、一つのだけけれど、生きている世界に終りがなく、同様、現状に対して不満なのか、満足なのか、不満とすれば何に對して、どういう具合に、そしてどうすれば満足できるのかという己れの思いのたけを、全ゆる技術、手法を用いて、文字として表現し、舞台上演までこぎつけ、さらにより多くの人々に観劇してもらい、拒否、嘲笑、侮蔑等に身をさらして、それでもそれではいずり廻って進む以外に道はないのであろう」

後半は、いかにも世仁下乃一座の舞台そのものを語って興味深いので引用した。たしかに、「豚」は完結したドラマでは無い。いや完結したテーマはない。しかし、こ

こに見せた切口は、人間の、社会の、真実の

断面である。売れないキャベツをリアカーに積んで、日が暮れても売り歩く女房およしの哀しい売声を、おやじが口真似て、あのばかたれがと吐きすてる時の複雑な悲しさが、美事にそれは「喜劇」の域に昇華されている。やはり作者は、知っていることだけが、はつきり書けるのである。知らなかったら知るまで努力することだ。登場人物が作者の中を震えをおびて走るときだけ、その人物は生きてくるのだ。

参加者の一人、演劇アンサンブル「かなざわ」の山下栄氏は劇作の経験はなく、むしろ詩作畑の人だったらしいが、この分科会に参加して、一つのちからを得て飯っている。金沢にかえると早速、「風化」を読みたいのでプリントさせてほしいと註文がきた。

参加者のさいごの一人、仙台小劇場の演出者である石垣君は、これは遠慮しているのをぼくの方で頼んで加わってもらい、彼は、こぼやし氏と岐阜、仙台で起居を共にした経験もあるのも、もっぱら、こぼやしひろしの人間の側面を語ってもらった。

その点でいえば、劇団はぐるまからの参加のないのがむしろ奇怪であって、一人参加予

——劇団展望の集団創作——

集団創作というのがある。さいきんその状態をみるものが多くなってきたが、東京阿佐谷の劇団展望の「ま昼のちようちん」前・後篇はとくに興味をひいた仕事であった。

ここは10人と少し位の集団であるが、そのうち6人ほどの役者に、とにかく何か書かせて、それを集団討議し乍ら、結局は可成の水準のものに仕上げるといふ一寸ふしぎなことをしてみている。

勿論、一つ一つが小さな話なので、そこで作品論や作家論が成り立つ事情はないし、むしろ話は、当り、外れといった解釈ができるので、こんどみた後篇の、トリに見せられた「三尺虫の居どころ」など、それを書いたのが初めてだといふ若い女優さん、いきなり「作家」として称揚する、行き過ぎが出てくる。

作品は作家自らにおいて完成するという古い考えのぼくは、舞台のおもしろさと作品とその舞台にも出ている作者本人のごちやまぜの中で、この状況は一体何だろうと

考えさせられた。

どうやら秘密は、話は減法するが、書くことはハガキ一枚御免らしい、この大沢郁夫さんという演出者にあるらしい。

集団創作を創造の基本に据えて、とくに書いた本人につきかえして、それをからだやって見せてくれというような辛抱づよいことをこの人はするらしい。だからどの作品も自責にかられて切羽つまった一所懸命なものが出るのである。

これは集団創作の場合の巧い使い方である。生活はどこにもあるし素材はどこにもある。誰でも戯曲は書けるといふことは、誰か云ったどうか知らないが、どんなうまい話を、気のきいた風に書いてみせたところで、そこで芝居が生れたという風にはならない。

井上ひさしの「笑話」は「てんぶくとりお」で生きたのである。

だから、つまらぬ話は「つまらなく見せて下さい、それでない」と大沢さんにぼくは云ったのだ。(萩坂 桃彦)

「作家・演出家会議」の報告と私見と……

岸 本 敏 朗

(劇団四紀会)

研究作品 「あゝその時の太陽は……」

作 者 和田 澄子(未来)

演 出 寺下 保(未来)

問題提起 長谷川伸二

司 会 岸本 敏朗(四紀会)

作 者 説 明

「創作劇をほんとうに生み出そう、そしてそれでもって現在の演劇状況をきりひらいていくんだという鮮烈な思いがないのなら、西リ演なんかなくなっちゃっていいんや」とT氏は電話の向うで力説された。が、その彼も、久方ぶりの和田澄子さんの力作に非常に期待しつつ、やっぱり来れなかった。「企画の魅力がうすいのか、こんな企画は必要ないと思っ

ていられるのでは、今年日程に関しては早くから通知してあったから、来る気があれぼ……」と今年の会を世話してくれたM氏にいわれて返答に困った。一方、同日東リ演の方で開かれた演劇大学について「80名も参加者があってどうやら黒字ですよ、東リ演はすごいですよ。でもひどいんだなあ、「演技」の方には30名が集って、気負いこんだ「作家・作品」の分科会にはたった5名が、それも私を含めて。」荻坂編集長の電話にもやはり、どう答えてよいのか、ただうなづいただけでした。

さて当日、討議は前日夜、作者、演出の説
明があり、参加者一人一人が印象を出し合ったところで問題提起がなされ、更に簡単な質疑応答の後、交流会。翌11日午前中討議、午後まとめ、という経過であったが、例年二本とりあげる所を今年是一本にしぼったため、時間的にゆとりが出来、比較的進行に無理なく、沢山の人達に発言してもらえたのではなかったらうか。

日時場所 2月10・11日 於大阪上六荘
参加者 10集団 30名

扱われた、だからその人が書きたい女工哀史へ全面協力する、そういう事で愛を育てていったのではないかと思いつき、第一稿を昨年の始めに出した。そこでは上演稿の前の部分、父親との訣別、初恋、名古屋での生活等あったが、やはり東京へ出て来て細井の死までにしぼった方がといわれ、書きなおした。上演後も、いろんな問題をいわれ、やはり自分分はテーマをしぼりきっていく事が弱いんだなあと痛感しています。

演 出 説 明

モデルの高井さんに会おうかと思っただが、今回はそれにひっぱられてはと思いいわなかつた。この作品を、現在の高井さんやわれわれにどう結びつけるかという事でプロローグ、エピソードを抜おうとした。高井さんを通して今の僕らの生き方をと考え、変り者といわれながらも高しがみついているさちおは現在芝居をやっている僕らにダブルののではないか、そんな思いをぐるぐるまわって、結果としてそのまわり方がマイナスとなって、高井さんをまつりあげてしまつてふくらまされず、後半になっていけばいく程一本通すべき個性がゆれてしまった。

問 題 提 起

女性解放という角度からはどのように作者は考えたのだろうか。全体として人間の生き方はこの作品からうけられるが、例えば女工小史を書く事を通しての愛の問題といふ、実際の舞台も女性中心に進んだが今、女性の解放という角度からはとりあげずとも良い素材だろうか。女性の解放は与えられてこまでも来たのではなく、女性自身の強さの歴史を通して獲得されて来たと思うが、その思いはこの作品にないのだろうか。

次に、個性の開化をもめた女性のあゆみといひ、愛をその転化したものといわれるが、当時、個性というものをどう理解していたのだろうかという問題。当時の大日本労働総同盟友愛会の宣言文の中に「個性の発達と社会の人格化」という言葉をつかっているが、さちおが受けたったピラはこの意味の個性ではないか、ならば、天性的な個性ではなく人間性とか民主化といった色合いがもっと濃かったのではないか、更にいえば、当時の女性がその時代の状況の中にあつて、そこからいくらかでも解放された点、それが、個性の発達という事ではないだろうか。

と、以上大きく二点の提起の外に、関東大震災を何故出したのだろうか、それはさちおに

何を与えたのだろうか。又、後半、東京へ帰らねば書けないという夫の気持は妻としてわかりすぎて客にはわかりにくい等の指摘があり、又、参加者の一言印象でも、一幕に比して二幕がものたりない、カフェの場がわからない。又、女工小史の完成の課程が全然見えない等の意見が積極的に出された。以下、論議を通じて、問題点を大きく三つに分けてみました。

一、個性の開化を描くということ

個性の開化を求めて上京したさちおが前半ははねかえりとして単に性格的であったものが後半、細木との愛と死を通して、個性に目覚めて行く、そして例えば、さちおにとって人間として目につけて来たものは個々の名をもつてかかれ、そうでないのは、「トッカン」「唄い手」「ルバシカ」等表わされ、その典型は「うぶちゃん」であり、彼女が人間としてみえて来た時に「たみ」という名を得るんだという書き手としての細心が明らかになされ、更に作者より、個性というものはその簡単に開化するものではない、現在でも、それをどう開化させるかを今考えねばならないと鋭く語りこまれつつ、私にとってその

個性とはなにかつかみかかれた。

論議はあった。個性が愛を通して変っていくというのはわかるが、ここにある猥褻の愛はむしろ低い封建性を示すもので、日本的なおかみさんになってしまったのではないか、いやその事は女性解放の歴史の中で一段階であり、当時一紡織女工がやっとなつかんだものとして見るべきだろう。更には個性の一本調子の発展ではなく、ある個性が最後までガムシヤラにやっとなつかんだという生が女が出て、もっといやなものも出して良いのではなかったか等々。

しかし、結局ここで問題とされている個性というものが、私にわからなかった。例えば、近代は自我の目覚めといわれるが、その自我と関係があったのだろうか。又、かつてこばやし氏の言った「私の分裂」という事はどうか。現在若い人達のあらゆる判断基準が自分にとって面白い、面白くないかが決め手になるといわれ、それが個性的ともいわれている。その個性とここで問題にされている個性の開化とはどうきりわすぶのだろうか。和田さんとしては、女性の解放はなかなかだったといわれたが、今若い女性の大半の興味がおしゃれと食べる事と男性しかなく、そ

れで又充分生活していけるようにみえる事へ、何か強く求めるものがなかったのだろうか、ひょっとすれば、それが個性の開化を現代の女性に強く求めようとしたものではなかったのだろうか。

中申けない乍らこの点についてもっと深く得なかつた司会者の責を深く感じています。

二、歴史の発展にそつて人間の発展を書くことへの疑問

まず、猿渡氏はいいます。「個性の問題とその発展の問題は同次元ではない。後半、うぶちゃんのせりふが非常にうそっぽく聞えるのはその発展を非常に一面的にとらえているからではないか。私達は、例えば、木下順二のいうように、ドラマの展開は歴史の展開に似ている、そして人間の発展も作品の中ではそれにそつて発展される、という思いがある、そのため、この作品の後半がさちおの発展という所へ整理されすぎてしまっているのではないか、発展するものを描こうという意識が強すぎて、ことを性急にしまつて

あるのではないか、特にそのために落ちていったものは何だったろうかと考えてみる必要がある。単的にいえば、木下順二を私達がどうのりこえるのかという事ではないだろうか。」

この意識は最近の西リ演の中で、折にふれて出て来ています。和田さんも「女工史の時代、大正の時代、をあんまり考えずに書いた。その事をこの作品では考える必要がないのではないかと思いつつ——」と発言され、確かに、和田さんの事ですから人一倍歴史に於いて綿密に調べられたにもかかわらずそれをあまり作品の中で構築されようとしたとは思えないのは何故か。又、さかのぼって、昨年の作家演出家会議で、こばやし氏の「ひしめき合う不毛の季節から」の登場人物の一人である付添婚役の存在について、このドラマの展開になら、かみこんでいないと論じられつつも、作者のこばやし氏はこの女の存在を思いついた時、このドラマの筆がすんだと説明された。又その時、栗原氏も新劇の先駆者達が積み上げて来たものの探求と同時に、そこから今行きづまってしまったものの弊害も、明らかにされねばならない意味の発言がありました。

猿渡氏は更に続けて言います。「発展的な人物を描くという事はその中から自分も学ぶという意識があつて、それが歴史劇の場合、過去のそのような人を選び、その人の発展的なものだけを選んでしまふ。例えば、木下民話、夕鶴にしても、民話の中のいろいろなぶれが見事に意味をもつものとして形象化されてしまつている。しかし、その中で、民衆のもついろんな価値観なり、エネルギーなりが打消されてしまつているのではないだろうか。」

三、多場面の芝居を書くということ

「自分も演出者の一人としてこの本を最初に読んだ時、作者の要求は各場面を徹底して独立して見せ、その並列をトータルとして観客が見終つた時まったく新しい何らかの思いをお客にもたせ、そんな方法論にあるように思つた。」と私は言つて、後程交流会で中谷氏より、成程演出というものは自分達作家が発想がちがうものだ、と妙に感心されたが、この作品の構成の問題は主として演出陣からの発言が集中した。特に関雲の富田氏より「ストーリーは発展するが、ドラマの質は展開しない」とくり返し指摘され、女工の世

界があり、細井との出会いがあり、カフェの場があつて、この三つの世界がどう質的に関連しつゝ発展するのかわかりわからない。ひとつの場で展開されたものが次の場でもどう意味をもっているのかわからない。また、新しいさちおが現れるようにみえる。という発言がこの問題を言いつくしているようだが、森本氏は「このドラマは場と場の間が大切なので、例えば、カフェの場で、さちおがくびを言ひわたされて店を出る所で場は終るが、大切なのは、その直後、さちおはカフェを出て夜の道歩いて帰るだろう、その路上で何を思ったかを、舞台上で表現してよいのではないか」と言い、足した事もきわめて演出的だ。

結局、最後に高尾氏は同じ作者の立場で、ずばりとしめくくつた。「物語の期間として約4年程だし、例えば三幕として凝縮出来なかつたらうかという思いが残る。最近の芝居は多場面、多場面という事になつて自分もすぐそうなつてしまふが、そこではついスケッチ風という域を出ないままになる。凝縮という作業を充分にくぐつて、それから新しい場面の展開を生みだしていくという事が、自分にとつてもつと必要なのだという事を痛感している。」

休み時間中、作者の和田さんに私の劇団四代会も座付の内田昌夫の作品をもつと上演せよと森本氏なんかによくしかられるが、劇団の中に作者を殺してしまう何か私達の劇団にあるんでしようかとおすおす聞くと、言下に、「そうです」ときっぱりいわれ、へどもどした。それは作者として何か非常に鋭く劇団というものの体質に抗議する悲痛なひびきがあつて、私の如き演出主導型の劇団の代表としては一瞬言葉を失ひ、つい西リ演事ム局として交流会の世話に忙しい内田昌夫の後姿に目がいつて、更に胸がいたんだ。

劇団四代会20周年記念最後の作品としての彼の十年來の大作「あゝ八月の陽の如く」、大正の川崎・三菱の争論は、その改稿がこの正月、三百枚という大ききで出され、ボロカスにたたかれ、更にその改稿の締切をこの作家演出家会議の日の翌日にひかえ「すまんけど事ム局として受付だけにしてくれませんか。この土・日曜でかかぬあかんわ」と申訳けなさそうなのは、今から帰つて、持病の心臓を押えつつ徹夜をするのだろうか、そして又、子宮筋脈の疑いのあるヨイハンにも清書を強いつつ、と思つ時、何ともやりきれぬ重みが私の上にのしかつた。(一九七八・二・二六)

カルメンの日

——人間座朗読教室の報告——

田 畑 実

(一)

二月十六日。木曜日。雪。

十一時三十分、国鉄宮津線の峰山駅に降り立つ。駅前の大衆食堂で昼食をしたためいと、野間分校から西垣先生が車で迎えに来て下さった。芦田鉄雄と菱井喜美子に私の三名、同乗させて頂く。車は見渡すかぎり暗闇(がいがい)白一色の丹後半島一周道路を北行し、やがて弥栄町へ入る。さらに一周道路を捨てて狭い雪道を野間の谷へ向かう。

山も森も、散在する農家の屋根も、山巒(ひだ)にひっそりと肩を寄せ合せて立っている落石群も、雪に覆われてみな美しい。時折、粉雪が風に舞う。

先生は、去年の記録的な豪雪に比べると暖冬の今年は雪は少なく、この二月初めの寒波のさいにも積雪は一メートル余だったので助

かった、と仰有る。去年は実に丈余の雪が軒を埋め尽くし、通字路をあけるのに三日もかかった由である。

十二時を少し廻る頃、ようやく学校に着く。弥栄町立弥栄中学校野間分校。分校主事以下七名の先生がたが迎えて下さる。生徒は一年生から三年生まで合計わずかに二十五名である。

話は変わるが、今から十二年前の昭和四十一年に、私たちは、折柄ようやく社会問題化し始めていた、いわゆる華家離村の増加等による僻(へき)地の急激な過疎化状況をこの目で見すえて、戯曲にしてみたいと思いい立ち、丹後半島の各地を取材して回ったことがある。(『寂(あられ)の谷に』三幕)。そのときはこの野間分校にはまだたしか五十名の生徒が就学していたと覚えていたから、爾来この十二年間に生徒数は実に半減した勘定に

なる。しかも今から十年後の昭和六十三年にはこの分校の生徒は確実にヒトケタになる。

これは現在の小学校児童の数と乳幼児の人数を数えれば弾き出すことが出来るわけである。生徒数がヒトケタになれば分校は廃校になるかも知れぬ、と主事先生は深刻な表情で話される。乳幼児の少ないのは当然で、十二年前には十数戸あった木子(きこ)という集落が今はわずかに五戸、細川ガラシャ夫人幽居の地として有名な味土野(みどの)も当時の八戸が四戸に減少してしまっただけ、しかも集落に残っている家の殆んどが老人世帯なのだ。老人世帯に子供は生まれぬ。

さて、二十五名の観客には体育館は広すぎて芝居をみていられそうにもない。そこで一年生の普通教室をわか劇場に仕立てることに決める。石油ストーブに火を入れて頂いたら結構暖かくなってほっとする。教室だから無論暗幕も何もない。従って照明設備は全然不要である。またこの教室はどういうわけか教壇というものが無いので、チョークで線を書いて舞台と客席を分ける。

ここで一寸、この『中学生のための朗読教室』と銘打った移動劇場について説明して置

きたい。

ウラからオモテまですべての仕事を三名で始末する。

まず、私の軽乗用車に黒幕四枚(うち二枚は大黒、二枚が袖幕)、厚ベニヤに緑色の絨毯(じゅうたん)布地を貼り山と草を表わした切り出しが五枚、照明器具は二百ワット投光器五灯と綿コード、音響はテーブロード一台とスピーカー、その他、衣裳と小道具から救急薬箱を満載し、「女優」菱井喜美子と同乗させ、車は私が運転する。芦田鉄雄は『日本芸能実演家団体協議会』に所属する

「俳優」中恐らくは最高の百余キロという体重の持ち主、角力とりにもなって居れば今頃は左団扇で暮せたらうという名だたる巨漢であるから勿論軽自動車などに搭載できるわけがない。そこで彼は彼の常用している五十CCのバイクに跨り、私の車を先導することになっている。丹波育ちの上に、父上も弟君も国鉄マンという一家の出にふさわしく、彼は地理や方角には滅法強く、どんなに暗い夜道でも迷わずに目的地へ連れて行ってくれるからありがたい。その方向感覚の確かさは演技の方面に発揮されていたら、大した役者

になれたらと思うにつけても、彼のために残念でならない。

芦田のゼロ半バイクを先に立てて、荷物と人を満載した私のクルマが氣息奄奄(えんえん)と学校へ着くと、大いの先生がたが目を見詰めて来る。「これで京都から来たのだか。それはそれは御苦労さんで。」と仰有る。さらに体育館へ入って、三人が幕を吊りたり照明や音響の器具を仕込んだりしている。先生がたは気の毒がられ、見るに見かねて脚立に上って手伝って下さったりする。芝居を始める前からも「感動」して下さるのである。

けれども今回の野間分校公演だけは厳冬のことゆえ、慣れぬ雪道の運転にどうにも自信が無く、安全をとって始めて汽車にした。だが汽車となると、荷物の量も三人が手で運べる範囲に限定されるから、嵩(かさ)張るものや重いものはこの際割愛させて頂き、トラクタとポストンバッグ一人当たり三コずつを携行することにした。三人ともが、まるで乞食か浮浪者の姿かたちになる。

午後一時二十分。

担当の川上という女の先生の挨拶のあと、『朗読教室』をこらく。まず生徒の作文二

篇。作者の生徒自身が朗読する。一年生の女生徒二名の、『手織りのできない母』、『家の仕事』と題する生活綴りである。丹後ちりめん機業始まって以来という空前の不況の打撃を蒙って、兼業の機を止めざるを得ない苦境に追い込まれた農家の生活が飾らぬ筆で実的に描き出される。いずれも厳しい内容である。聞いている生徒の表情が次第にひきしまつてゆくのが、ひしひしと伝わってくる。(付記。この作文は二篇とも、昨年十一月に京都市の文理園という出版社から出た『丹後ちりめん子ども風土記』という本に収められている。)

作文朗読の後は、大宰治の『走れメロス』と夏目漱石の『坊っちゃん』の朗読実習。何れも『現代国語』教科書に載っている。さらに、過ぐる戦争で十九才の若さで戦死した越後の生んだ天才的農民詩人大関松三郎の詩二篇『水』と『虫けら』が付く。これで前半の部を終わり、後半は私たちの『カルメン』なりたいを上演する。終演は第六時限の終わりに時間を合わせて午後三時。

後片付を済ませて、職員室へ入り、主事先生から『上演実費』を頂く。この『朗読教室』は、生徒数の多寡(か)にかかわらず一

生徒一人当たり二百円を頂戴することに決めている。但しこの野間分校の場合、生活保護世帯の家庭の子が八名居るので、差引き十七名分で金三千四百円となる。京都から峰山までの一人分の往復交通費にも満たない、と主事先生は恐縮される。

「朗読教室」は、どこの自治体からも「補助金」等は難(びた)一文頂いては居らぬ。そこで極度に省力化を図り、経費を切りつめてある。また、赤字になる少人数校と数百名規模の学校とをセット公演する日程を組んで、収支のバランスがとれるように工夫する。が、それでも苦しいことは苦しい。

ところで、「芸術」というものは、本来、豊かなもの質的なものであるべきであるから、このような貧弱な内容ではそもそもものあり方としてまちがっている、という人も間聞ある。けれども、登場人物ももっとふやして舞台装置もしっかり飾り、照明や音響などもふんだんに使う「本格的な」芝居ともなると、どうしても相当な費用がかかるから、必然的に、生徒二十五名などという小さな分校は素通りせねばならぬ。「職業劇団」としては素通りする方が正しくて、私たちの方が或いは誤っているのかも知れぬ、とも思う。

れば、いまの世の中で、一度ははじめに自殺を考えたことのない人間など、よほどのバカか悪党に決まっている。むしろ子供たちの方が、この「閑節の外れてしまった」世界の不幸を、理屈ぬきで膚で感じとっている気がする。

そういう話を、北桑田郡の周山中学校の、西浦・長野・仲島三先生と話し合っていたら、実は学校でも生徒の進路や生活指導の問題で頭を痛めているのだから、ひとつ、中学生の生き方を真剣に考える内容の創作劇を作ってみないか、そのための協力は惜しまない、ということになった。先生がたや生徒諸君からうかがった生々しい報告をもとにして作り上げたのが、朗読劇「カルメンになりたい」である。

むろんフィクションであるが、ある僻地に生まれ育った女子中学生が、親にも教師にも友人にも心を閉ざして、ひたすら文学書を耽(たん)読してひとり空想の世界に遊ぶ、その姿を通して、人間というものの、なべてその発達志向は無限であるべきだ、という理想をはなはだ舌足らずながら主張してみた。

北桑田の周山・北星・八ヶ峰の三中学を皮

「しかしどんな僻地のすみずみまでも文化を」という政策の実践は、京都の民主府政の誇りであったはずである。さすれば、赤字になるところへは行きませんでは済まされぬ、という気がする。だから、そんなに突っ張るなよ、と譏(そし)られるのは承知の上で、私たはいささか意地になって巡回を続ける。 「ようやはらはるワ」などと憫(びん)笑されることも多い。まるで愚なことをしているのではないか、と我ながら情無くなる。 そういうときに、さきに述べた底の、生しい生徒の生活綴方に触れたりすると、それこそ「古い銅貨に硫酸をぶっかけられた」ような気がして肅然となる。 疲れも吹きとび、掛け値なしに、ほんとうに、来てよかったなと嬉しくなる。 胸のふくらむ思いを味わう。

(二)

朗読劇「カルメンになりたい」について、多少述べさせて置くことにする。

去年は、青少年の自殺がことのほかに多かつた。警察庁が十月に発表した資料によると、三月から九月までの半年間に自殺した未成年者は四百何十名かのにのぼるそうだから、一日平均二名以上の子供が自殺している勘定

切りに、丹後地方では峰山・大宮・網野・橋・弥栄・間人・高竜の七中学とその分校、中丹・南丹地方では東綾・上林・六人部・北陵・別院の五中学、京都市内では梅遷・京都女子の両中学のほか、大江高校と福知山女子・淑徳女子各高校を巡演した。

なおこの企画には、各学校の国語科や進路指導・生活指導の先生がたに並ばならぬお世話をお願いしていることを、感謝の意をこめて書き添えておく。



になり、たしかに異常としか言いようがない。 中学三年の女生徒が愛知県下で集団入水したり、東京の中学生が「カセット」つきのラジオを買ってくれぬから」と福(い)死したり、果ては小学六年生の女の子までが「きれいなところに行く」と書き残して死んだりした。今年に入ってから未成年者の自殺は減少するどころか、むしろ増加の傾向を顕著に示しつつある。

子供が自殺すると決まると、家族は思い当たるフシがないと言ひ、新聞などは、入試の重圧だとか、親の期待が過大だったとか、勝手な推測を並べたてては、「なぜ死に急ぐ？」などと警世の論陣を張る。けれども実は、子供が「死にたくなる」ような社会を作ってしまったことの方が問題なのであって、思い起こせば、あの戦前の世界不況期にも自殺は確かに多かった。つい先だって亡くなったシャノン歌手ダミアが歌った「暗い日曜日」というレコードを聞きながら自殺する、という奇行が欧州の青年に大流行したと覚えてい

る。 近年の打ちつづく底無し沼のような不況、増加する一方の企業倒産、やがては二百万人にも迫ろうかという失業者、とこう並べたて

劇団通信

青年劇場

往復はがきが不明になり、返事がこんなにも遅れて申しわけありません。

事務局の手違いではがきの内容も知り得ていないので、的を得た返事になるかどうか分かりませんが、これからの劇団のスケジュールをお知らせします。

「かげの巻」1月～3月(首都圏周辺・実行委員会での上演)

「偽原始人」5月～7月(東北・北海道での学校及市民劇場での公演)

第22回東京公演

「夜の笑い」(原作・島尾敏雄)接
触▽小松左京八春の軍隊▽演出 飯
沢 匡

5月9日～16日 俳優座劇場

5月17日 厚生年金小ホール

にて上演されます。現在、東京公演の成
功に向けて劇団員が奮闘中です。

(東京都渋谷区千駄谷5-33-6)



関西における戦前プロレタリア演劇の研究〔二五〕

大岡 欽治

京都地方のプロレタリア演劇 (第二回)
日本プロレタリア劇場 (演劇) 同盟
プロット京都支部・京都青服劇場 (二)

(2) 一九二九(昭和四年)年(続)

京都青服劇場の最初の活動は、その時の政治的・社会的条件の中から生れた「山宣追悼劇」という形式を生んだのだった。

政府は、この労働者農民の大衆的反撃に驚ろいて、四月十六日に「四・一六事件」として知られる弾圧を全国的に企て、千人に及ぶ活動家を奪っていった。

青服劇場は、この状況のなかに、メーデー芸術祭を行うように準備を進め、大阪戦旗座の協力を得て、公然たる演劇活動を開始し初公演を持つ計画を樹てた。

メーデー当日よりは遅れるが、五月四日夜京都烏丸鞍馬口西にある「みやこクラブ」という集会所を借りて行うプランだった。

この活動は、今迄の青服劇場史には発表されていなかったが、私は私の手で切ったガリ版ビラを幸いにして持っている。それには次のように刷られてある。(半紙半載)

『見よ!』

京都で初めてやる

労働者、農民の芝居!

諸君! 諸君はチャン チャン バラバラや、金持のノラ息子が芸妓とフザけたりする芝居は見たことがあるだらうが、諸君は、其の日暮しの苦しい俺達労働者農民の中から産れた芝居を見た事があるか。

東京や大阪では度々やっているが、京都で

も今度始めて、俺達の劇団が出来たのだ。五月四日 夜六時に会場に殺到しろ! 青服劇場を支持せよ!

青服劇場はかって、山宣お通夜の晩に、即興劇を上演して、労働者農民の喝采を博した。

或る争議団の応援にも行って感激を与えた!

吾々はいつでも、何処へでも出動する準備が出来ている!

争議団応援、懇談会、慰安会の余興として続々、事務所宛に出動を要求してくることを心から待っている!

京都青服劇場

I 「父」三場

労働争議・悲劇

II 「早鐘」 一幕 農民劇

大阪 戦旗座

III 「機死隊とビケット」一幕 争議劇

○時

(一九二九年) 五月四日(土曜) 夜六時

○処

みやこクラブ(市電 烏丸鞍馬口 下車

西へ約三丁)

○会費 二十セン。労働者農民割引券 十五

セン

(割引券入用なれば、枚数を事務所に知らせれば、すぐ送る!)

京都青服劇場

I 「父」 久板栄二郎作 大岡欽治演出

II 「早鐘」 小野宮吉作 大岡欽治演出

大阪 戦旗座

III 「機死隊とビケット」 久板栄二郎

作並に演出

京都青服劇場事務所

市内 田中門前町三一 浦川方

この活動に対して京都府警察部保安課は、

会場の使用禁止、「父」の検閲による上演禁止という弾圧をもって圧迫してきた。それは「山宣劇」上演、四・一六事件などの諸事件が、影響していると思られる。

劇団はやむを得ずとして、この第一回公然化の公演を中止するに至った。まだ弱体だった青服劇場は、この弾圧に抵抗して乗りきることが出来ず、移動活動を続けるのみだった。

ところが、この年の九月に、急進的立場に立つ劇団として、前進劇場というのか発足することになった。

主催者西条照太郎は『戦前・戦後の京都の新劇』その二回目において次の如く語っている。(二四―二五頁)

「西条 僕はちよっと年代が記憶にないんですけどね、四・一六(昭和四年)の時だったと思うんですが、「前進劇場」という劇団をつくりましてね。私の家を事務所や稽古場にして、小山上総町、烏丸車庫の横ですが、あそこにおったんです。

出しものは前田河広一郎の「二階の男」それから北村寿夫の「怪しい貨物船」という、その二本を上演することにして稽古したんで

す。さて始めるといっても、メンバーが全然揃わないです。それで、どういうきっかけでプロットと連絡をつけたのか、ちよっと記憶にないんですが、プロットから大勢応援してくれました。その中に杉村長之助君や大岡欽治君、後に満州映画で監督になった上砂泰蔵君なんかもいましたね。」

この前進劇場の公演には次のような経過があった。

「前進劇場」 第一回公演

前田河広一郎作 山村耀三演出

「盗 人」

ゴルキイ作 松崎啓次訳(共生閣版)

大岡欽治・西条栄二 演出

「小 市 民」

演出部 西条栄二 山村耀三 大岡欽治

文芸部 長谷川伸 小野金次郎 前田河広

一郎 松崎啓次 北村小松 湊那

三

演技部 東条英彦 大河内俊雄

衣笠みどり 二木妙子

宣伝部 玉木潤一郎

△昭和四年九月二十八日(土)

五時開場 五時半開演

△会場 日出会館

私がこの劇団に参加したのは、恐らく、プロキノの松崎啓次から話があったからだと思ふ。松崎との関係は映画「山宣労働者」のスタッフの関係があったのは前記したが、ゴールキイの戯曲「小市民」を豫訳出版した松崎が文芸部に名をつらわっているので、青服や私にコネをつけてきたのであらう。

この文芸部は、長谷川伸を中心とする大衆小説の作家グループ(現在まで長谷川をしるんでグループは存続している。)で、西條照太郎(本名土屋欣三、現在京都嵯峨に住んでいる。シナリオライターとして他に波多謙治、多喜社二、他のペンネームを使ってきた)が組織したものである。ほとんどの関係者は京都の映画人であった。

さて、しかしゴールキイの「小市民」は脚本検閲で、直前に上演禁止になった。

そこで、「小市民」に変えて、北村寿夫(笛吹童子の作者、小山内薫の門下)作「怪しい

貨物船」を提出した。これは検閲は通ったが「怪しい」というのはいかんというので、プログラムには「貨物船」という題になった。

私は「小市民」の共同演出だったので、そのまま続いて演出参加を要請されたが、この公演の直後にある東京左翼劇場の京都公演にプロット加盟劇団として京都青服劇場も協力することになっていたので、名前を変えて「大矢新」という劇団側がつけた名前を使用することになった。

なお、西條の談話中にある、前田河広一郎作「二階の男」は、記憶ちがいで、プログラムにあるように「盗人」が正しい。

そして、前進劇場第一回公演は次の如くに行われた。

一九二九(昭和四)年九月廿八日(土)午
後五時半より 於・華頂会館

前田河広一郎作

「盗人」 一幕

北村寿夫作

「貨物船」 五場

演出 西條栄二

大矢 新

キャストは映画人が主体であるが、船主朝吹の役を青服劇場小山勇(杉村長之助)が演じている。青服の演技者が公演に参加、名前

を出した最初のケースである。

この前進劇場公演の直後、全国のプロットの先頭に立つ東京左翼劇場の関西第一回公演が行われることになった。しかし、この公演も脚本検閲の問題でもめることになった。

本誌第17号(1971年3月号・本誌第四回)にこの左翼劇場の大阪公演に触れて書いてきたが、最初左翼劇場はわが国のプロレタリア演劇史上に記念すべき輝かしい作品として、東京で上演した村山知義作「暴力団記」を持ってこようとした。東京では題名について検閲で「全線」と改題させられたが、大阪府保安課検閲係は、その革命性を恐れて、上演禁止にした。また同時上演予定のカスパイ・ハウゼル作「足のないマルチン」も反戦劇であるとして不許可にした。京都公演も、京都の検閲は、大阪の検閲に同調してきた。これに対するプロット側の反攻も同時に開始された。

京都青服劇場の発行したピラをみよう。

「東京左翼劇場来る」

関東地方に於ける労働者農民の斗争場裡に移動劇場を駆使して、その年の如き英雄的行

たのである。

「母」 四幕 九場

——この台本は八住利雄氏脚色の「母」(五幕七場)を、更に左翼劇場の立場から再編したものである——

演出 佐野碩、小野宮吉・装置 金須孝

Ⅱ ハンス・ザックス原作

「莫迦の療治」 一幕

演出 仲島洪三・装置 村山知義

配役の内、青服劇場員でプログラムに載っているのは、頼春仁(芸名で京大生河田潤)一人であるが、小山勇も直前の演劇講習会にも出席しているので参加している。他に青服劇場員として大岡欽治が、演出助手として起用され佐野碩についた。

(「プロレタリア演劇」△昭和五年六月号▽「プロット第二回大会における京都青服劇場報告」より)

動は夙に名を馳せたもの。今関西地方に於ける大公演に際して大挙して押しよせる。しかも全労働者農民の圧倒的支持を受けた村山知義作「全線」は、当局の忌避するところとなり、今や陣容を新にして、わがソビエット・ロシアの巨人、大ゴールキイ作「母」を掲げ、全労働者農民諸君に見えんとする。両日の公演を労働者農民の力もて守り抜け

下鴨中川原町七六 川田潤方 眞任者 田島善行

日本プロレタリア劇場同盟

東京左翼劇場 関西第一回公演

劇場同盟 京都青服劇場

大阪戦旗座 共演

一九二九年十月十六・十七日

大阪・朝日会館

十月十八日・十九日

京都・華頂会館

I マキシム・ゴリキー原作

左翼劇場文芸部脚色

(3) 一九三〇(昭和五)年

前出「プロレタリア演劇」の「青服劇場報告」による。この年の始めの状況は次の如くである。

「今年一月にゼネラル・モーター争議の応援に出動しましたが、新労働者のダラ幹達は、言を左右にして、遂に我々の活動を拒絶

した。

我々は直ちに争議団へ徹を免し、奴等の裏切りの行為を暴露し、一層の奮斗を激励した。(中略)又今年度のメーデー公演を、大阪戦艦座との合同に依り、昨年度におけるその連絡の不充分さを再び繰返すことなく、闘い抜く決意であります。(下略)

そのメーデー公演は、大阪戦艦座と合同で徳水直の「太陽のない街」の公演計画であった。

それは「京都青服劇場・演芸大会・斗争報告」(多喜荘二「プロレタリア演劇」一九三〇年八月号)によれば次の如くであった。

「(前略) 最初我々は「太陽のない街」の公演を計画したのであるが、一月以来打ちつづく(弾) 圧のために、次ぎ次ぎに活動分子を奪い去られ、人員の動揺と不足を生ずると同時に資金の捻出に悩まされた結果、「太陽のない街」を秋の斗争に備える為に一時期延期し、京都をあげて演芸大会を持つことが決議され「太陽のない街」秋季公演基金募集を目的とする演芸大会の準備と斗争に移つたのは公演日の約十五日前であった。

詩の朗読、落語、舞踊、講談、ハーモニカ吹奏、それに三つの芝居に依つてプログラム

が編成され、直ちに稽古に着手したが、如何

せん公演の経験も乏しく、而も打ちつづく(弾) 圧で、メンバーの不足している際ではあり、一人で四つも五つもの部署を受け持たねばならぬ関係上、万一落語や詩の朗読で中止を喰つた場合、芝居に出られないというような失態を演じてはならないという充分な用意?の下に、落語は脚本と同時に掲本して検閲を受け、詩は全部大阪戦艦座員に受け持たせる等、中止を喰つても支障を来さないよう周到な注意が払われた。かくして準備は着々と進められた。落語も舞踊も、三つの脚本「莫迦の療治」「地獄の審判」「暴力五人男」それに、若しその内の何れかが蹴られた場合の子備脚本として選ばれた「荷車」を合せて四つの芝居も、共に自信を以て公開し得る程度にまで猛練習が繰り返された。然し保安課に提出してあった四つの脚本と二つの落語もどうなつたか。落語は元来検閲すべき性質のものではない——という理由の下に返して寄越したが、「莫迦の療治」を除く他の三つの脚本は簡単に禁止されてしまった。我々は連日府庁に押しかけてガン張つたが、結局「莫迦の療治」は前に一度(左翼劇場来演の際)許した事があるから、今度は仕方ないから

通りだった。

「太陽のない街」秋期公演基金募集プロレタリア演芸大会

六月二十一日(土) 六時 三條青年会館
主催・日本プロレタリア劇場同盟・京都青服劇場

後援・ナッブ京都地域協議会、東京・左翼劇場、大阪・戦艦座

1 詩の朗読(戦艦座員)

下川儀太郎作「勝利のレポーター」/三好十郎作「姉さん」/×見×夫作「獄に迎える血の三月」/大滝友二作「プロレタリアの子守唄」/合田綱天作「獄」

2 プロレタリア落語

永島一作「家賃値下げ」/成田梅吉作「漫談会」

3 プロレタリア舞踊

源龍次案「にくしみのルツボ」(青服劇場)/源龍次・矢部辰天案舞踊「救へ」(源龍次)

4 講演

5 ハーモニカ独奏 (大阪) 中井一夫

6 芝居

A 村山知義作「莫迦の療治」 演出大島建

吉

B 佐々木孝丸作「地獄の審判」 演出沖圭一郎

C 富田常雄作「暴力五人男」 演出多喜荘二

もう一つのガリ版刷りのプログラムがある。『全京都の労働者・農民諸君 俺たちはこの演芸大会を諸君の果敢な斗争の前に捧げる。』

我々は連日稽古と準備に忙殺されて来た。芝居は佐々木孝丸作「地獄の審判」富田常雄作「暴力五人男」村山知義作「莫迦の療治」の三つを用意し、予備脚本として佐々木孝丸作「荷車」を用意した。然るに××(官憲)は安寧秩序をみだすという名のもとに「莫迦の療治」を残して全部禁止してしまつた。これは明かに××(官憲)の計画的な×(陰謀)だ。俺達は出来るだけガンバツた。そしてこの新しいプログラムを作つてあくまでやつける。

○諸君の劇団青服劇場を守れ!!
○ガッシリ腕を組んで、最後まで演芸大会を闘い抜け!!

と、ところで実際の進行は、多喜荘二の報告によれば臨検と舞台裏での干渉の内に次の如く

許しておくが、他は一切まかりならぬ。而もその確定したのは公演の二日前のことだ。(中略)我々は直ちに第二段の策を建てた。即ち「太陽のない街」の脚本朗読を以て奴等のこの暴×(圧)と闘うべく陣容を建て直された。(中略)今年に入って初めての意義ある集会在万一叩き潰されるようなことがあつてはならない事を杞憂した我々は、奴等の言うが儘に朗読すべき時まで一応検閲を受けることにした。それと同時に我々は所轄五箇署に仮設興行届と屋内集会届(それは講演詩の朗読、脚本朗読に対する)を出して準備を整えたが、奴等は当日の午后になって「莫迦の療治」舞踊「にくしみのルツボ」「救へ」それに応急策としてプログラムに加えた映画「大阪メーデー」以外のものは絶対に禁止すると云うのだ。

特高に押しかけ二時間に渉る談判をしたが「やるならやれ、その代り全部検束するぞ」と威嚇したが、固い決意で開催された。

七時開演なのに五時から観客は集つてきて七時には八百人収容の会場はガッシリ満員制私服のスバイが五、六十名内外に配置されるうちに開催された、その時のプログラムの最初のプランは次の

(プログラムは次の如く変更されている)

- 1 挨拶
- 2 詩の朗読
- 3 舞踊「にくしみのルツボ」青服劇場員
- 4 詩の朗読
- 5 落語 永島一作「家賃値下げ」大島建吉演
- 6 詩の朗読
- 7 映画「大阪のメーデー」プロキノ京都支部
- 8 詩の朗読
- 9 ハーモニカ独奏 中井一夫
- 10 詩の朗読
- 11 舞踊「救へ」源龍次
- 12 詩の朗読
- 13 芝居「莫迦の療治」演出 大島建吉
- 14 詩の朗読
- 15 落語 成田梅吉作「演説会」多喜荘二演
- 16 詩の朗読
- 17 挨拶
- 18 脚本朗読 徳水直原作 小野宮吉脚色 宮野彰改訂「太陽のない街」 指揮多喜荘二 沖圭一郎 宮野彰
- 19 閉会の辞

行なはれた。

(1) 舞踊「にくしみのルツボ」

(2) 祝辞 大阪戦旗座員

(3) 映画「大阪のメーデー」

映画中観客よりメーデー歌の合唱になり
官憲と映写技師の乱斗となり中止さる。
労働者二十余名検束される。

(4) 祝辞 各友誼団体

(5) 舞踊「救へ」

獄中にいる前衛が×(拷)問に堪える生
々しい表現なので観客の憤激に驚いて中
止命令

(6) 芝居「莫迦の療治」

(7) 脚本朗読「太陽のない街」

開幕しようとするとき薬屋を襲ったスパイ
は「許してやったものだけは全部演つた
んだから閉会しろ」と強制的に散会を命
じた。

劇団としては解散したら、京都市営バスの
争議団と合流してデモをやらうと計画してい
たが、連絡不十分で散会した。

(この「解散からデモ」への方針は、後にプ
ロット常任中央委員会から、根本的に誤謬で
ある、と批判された。)

西条照太郎は「語りもの・京都新劇史」そ

「プロット第二回全国大会議事録」
一九三〇年八月号

多喜荘二「京都青服劇場演芸大会斗争報
告」

プロット報告「京都におけるプロレタリ
ア演芸大会で青服劇場が犯した最大の誤
謬」

一九三〇年九月号

小山勇・西條栄二「京都青服劇場史」

「語りもの 京都新劇史 その二」

一九七六年三月 京都新劇団協議会発行

〈資料〉(筆者所持)

青服劇場 「みやこクラフ公演」ビラ／「演

芸大会」ビラ・プロ

前進劇場 第一回公演 ビラ・プロ

東京左翼劇場、関西第一回公演、ビラ、伝

単、プログラム、ポスター

のII」において、この青服劇場の公演を次の
如く述べている。

「(前略)昭和四年か、五年の初めですね、
プロキノの「京都のメーデー」の公開の時の
アトラクションにやったんじゃないかかと思
いますが、メーデーの映画になってから凄
かったですよ。」

と言っているが、これは前掲の如く実際の
記録として西條の報告が残されている。

また、当時のエピソードとして、絵画専門
学校(現京都美大)の学生だった吉田義夫が
学校劇でゲーリングの「海戦」の水夫の役に
扮して出演したが、配属教官が反戦劇だとし
て呼び出され、説論を食ったので、学校の劇
団(アトリエ座)の責任をとって辞めてしま
った。だが、どうしても芸居をやりたいと思
っているとき、「太陽のない街」のポスター
を見て、よしここで演らうと思って「青服劇
場」に入るようになった。と吉田義夫も同誌
に於て語っている。

また、この公演で舞踊をやった源龍次は、
本名は源孝強で、戦後日本共産党京都府会議
員として活躍したが、この時点では同志社演
劇研究会のメンバーで、舞踊「救へ」は同志
社の発表会で按舞、出演したものであった。

〈劇団通信〉

演劇集団編

①本年度より銅鑼として本格的に学校公演
にとり組むことになり、「狐とぶどう」で
全国をまわることになりました。本公演は
秋に、「峠の風は知っていた」(秩父事件)
と六月に「狐とぶどう」の東京公演の二本
です。課題としては創造を高める分と財政
面での安定的基盤を見つけていきたいとい
うことで出発しています。

②現状の問題点としては、いつものことな
がら、経済的に不安定なことをどうする
か、又アトリエ公演を通しての創造面の上
を中心意欲的にめざしている。

③六月二十三日二十八日まで砂防会館、「狐
とぶどう」の本公演。

④昨年の暮々本年度上半期まで劇団内部で
の新年度の普及問題など、全員劇団集中
で、「大学」への参加も出来ず、東リ演と
のかかわりもうすくなっていました。四月
一日から新組織も発足して活発にやりたい
と思います。

(東京都杉並区水福二一六〇一三三)

このあと、青服劇場は技術的未熟の自己批
判が行われ、講習会、研究会などを計画的に
持つ方向を採ることになった。

滝沢修、藤田満雄、山川幸世を講師に迎え
て講習会を開催した。

また毎月五日間の技術講習会、毎土曜日は
理論研究会、毎火曜日は移動劇場稽古日と定
めて、その実行に努めることになった。

この時点で「青服劇場発展史」によると、
劇団員と研究生を合せて、約五十名に達し、
映画関係者、労働者、学生によって構成され
ていると、報告されている。

青服劇場は、この秋には「太陽のない街」
を上演する方針でできたが、その実現は仲々困
難な状況で、ついにこの予定は、更に延期す
ることになり、劇団は内部の整備に力を注ぎ、
移動演劇活動を続けながら、来春の新しい活
動のプランを進めることになった。

(一九三〇年の項、終り)

本稿に関する参考文献資料

〈文献〉

日本プロレタリア劇場同盟機関誌

「プロレタリア演劇」

一九三〇年六月号・(創刊号)

劇団レオ

◇前回は通信を休んでしまい申し訳ありませ
ん「レオ」は細々々と乍らも活動は続いて
います。仲々団員の補充がつかず……とい
っても前の通信の後、入団した者男二名女
二名ですが、退団と休団が男二名女三名で
結局一名マイナス……。なんとか団員をふ
やそうというのが今年度の課題です。

◇「演劇大学」は公演のあとしまつで参加
できませんでした。

◇最近の公演「一九七七年」九月人形劇
「おぶさりてえ」民話劇「うぐいすの尻」
むつ市(九〇〇名)十月「春になれば」五
所川原市(三五〇名)十二月人形劇「おぶ
さりてえ」児童劇「魔法のテーブルかけ」
五所川原市(三五〇名)……いづれも創作
劇です。全体で六万円ほどの黒字(内フィ
ーム代四万、研修二万)

◇六月には、井上ひさしの「11びきのネコ」
をやるつもりで、作曲も完了し、けい古に
入っていますが、作者から仲々許可の返事
が届かず困っているところですよ。

◇その後は学校公演などの要望に応えてい
くつもり、秋以降の公演は未定、再演の予
定。
(五所川原市松島町七七八七)

京都新劇略年表(Ⅱ) <1928—1930>

年/月日	劇団名	会場	戯曲名	作者	演出者	出演者	その他	備考
1928(昭和3)年								
2/4・5	エラソソウイ タール	先斗町 歌舞練場	検査官 ジュノーと孔雀 アサトール	ゴーゴリ ツエノン・オケイワー ジュエニツラー	野瀬 稔 野瀬 稔			上演禁止
2/11	掛籠座 小劇場	岡崎 小会場	長い婦りの船路 勝利者と敗北者 美しき白痴の死 スカートをばいた ネロ	エーゾソオニール ユルズワージー	清水竜之介 清水竜之介 清水竜之介 佐々木孝丸 村山 知義		(顧問) 近藤伊与吉 仲木	第1回公演
3/7	前衛劇場	岡崎 公会堂	勇ましき主婦 偽造株券 踊子になった書記 の妻	村山 知義 村山 成吉 村山 知義 イフメソ	佐々木孝丸 村山 知義 佐々木孝丸 村山 知義 土方 与志		前衛芸術家 同盟所属	「新興文学全集」刊 行記念 公演不許可
4/23・24	築地小劇場	岡崎 公会堂	アソナ・クリステイ 熱	ユージン・オニール ストリンドベリイ ルノルマン	山川 幸世 青木 孝一	大岡 欽治 築地 浪子	同志社演劇 研究会	イフセン生誕百年記 念 上演中止
4/21	沼 座		時は夢なり ラ・ボエーム		野瀬 稔	久保 武		
5/12-14	エラソソウイ タール	三条 青年会館	誰か一番馬鹿だ?	ウイグトフナーゲル	野瀬 稔			

5/14・15	観 衆 座	先斗町 歌舞練場	そ の 妹 盗 賊 談 人 造 人	武者小路 実馬 国枝 完二 カレル・チャペック	加藤 精一 工藤信一良	佐々木 積 大岡 欽治 藤島 みのり	京大・同志 社演劇研究会 新劇劇団 連合公演 近藤伊与吉	第1回公演 出演中止
6/2	原 始 劇 場	先斗町 歌舞練場	人 造 人	前田河 広一郎 菊池 寛	大岡 欽治			
6/6	原 始 劇 場	大坂 朝日会館	盗 賊 談 人 造 人	久米 正雄 鷗田 英太郎				
6/24	世 紀 座	先斗町 歌舞練場	良 願 注 堂 地 蔵 法 成 三 和	谷 崎 潤一郎 武者小路 実馬 北 村 小 松	青山 杉作 青山 真澄			
8/14・15	築地小劇場	岡崎 公会堂	狼から貰った柿の種 ピョククリ箱					
10/9	街 頭 座	先斗町 歌舞練場	洗濯屋と詩人 喧嘩 仲間 ジュノーと孔雀	金子 洋文 ダグラス・ハイイ ン・ユーン・オケイ 谷 崎 潤一郎 ジュエニツラー	平川 真澄 野瀬 稔 野瀬 稔 野瀬 稔			大丸博覧会アトラク ション 上演禁止
10/13	エラソソウイ タール	大丸博 覧会場						
12/7・8	エラソソウイ タール	大毎会館						
12/25	全日本無産者芸術連盟 小山内薫死去		再組織 (ナグフ)	全日本無産者芸術団体協議会となる (ナグフ)				

1929 (昭和4) 年

1/24・25	築地小劇場	岡崎公会堂	夜の宿	マキツム・モーリヤイ	小山内薫	小山内薫追悼公演
2/4	日本プロレタリア劇場同盟 (プロレット) 結成 京都青服劇場創立。プロレット加盟承認	宇治花屋敷 みやこクラフ	山宣道悼	北久川	鉄 ^ニ 夫 ^ノ 久 ^ノ 太 ^ノ 郎	山宣労働通夜 公演禁止
3/5			父	久小野板	大岡欽治	
3/14	青服劇場	大阪戦隊座 劇団築地小劇場	朝から夜中まで	ゲオルグ・カイザー	北村喜八	築地分裂後京都初公演 築地分裂後京都初公演
5/4	青服劇場	岡崎公会堂	飛ぶ唄	金子洋文	与志	
5/9・10	大阪戦隊座 劇団築地小劇場	岡崎公会堂	生ける人形	片岡鉄兵	土方与志	築地分裂後京都初公演 築地分裂後京都初公演
5/19-21			日出会館	義勇兵の影	ジョーン・オニール	
6/22-23	エラソングイタル	華頂会館	長い婦りの船路	ユージン・オニール	野淵親	上演禁止 第一回公演 「怪しい貨物船」を改題
7/7・8	新築地劇団	岡崎公会堂	何が彼女をそらさせたか	金子洋文	土方与志	
9/28	前進劇場	華頂会館	小市人船	マキツム・モーリヤイ	西条大岡	

9/29-10/5	青服劇場	三条青年会館	演劇講習会 (佐野碩、伊達信、久板栄二郎、佐々木孝丸・講師)		
10/4	左翼劇場	華頂会館	プロレタリア文芸講演会 (佐野碩、佐々木孝丸、久板栄二郎、伊達信・講師)		
10/18-19			全線	村山知義	佐野碩
10/30	同志社演劇研究会	同志社学生会館	足のないマルチン	カスパー・ハウゼル	佐野碩
11/24	エラソングイタル	日出会館	母	マキツム・モーリヤイ	佐野碩
1930 (昭和5) 年					
1/21	青服劇場	(移動) 同志社学生会館	莫迦の探治	カスパー・ハウゼル	佐野碩
2/8	同志社演劇研究会	同志社学生会館	莫迦の探治	カスパー・ハウゼル	佐野碩
2/27・28	劇団築地小劇場	岡崎公会堂	プロレタリア前進	カスパー・ハウゼル	大岡欽治

公演日	公演名	会場	劇名	脚本	演出	出演者	備考
4/4	プロット第2回全国大会	青眼劇場報告 (於築地小劇場)	西部戦線異状なし 森 建設の町	ル オストロフスキー			
4/14・15	新築地劇団	岡崎 公会堂	慶安大平記後日譚 太陽のない街	落合三郎 徳水直	土方与志		マナー芸術祭中止
5/	青眼劇場						
5/2	エラソソグイ ターナル	岡崎 公会堂	ゾゾソ先生 コスモス女学校	フランク フランク	野瀬 野瀬	野瀬	プロレタリア演芸大会 上演禁止
6/21	青眼劇場	三条 青年会館	莫迦の療治 地獄の審判	村山知義 佐々木孝丸	大島健吉 沖圭一郎	大島、多喜、沖	上演禁止
9/23	エラソソグイ ターナル	岡崎 公会堂	太陽のない街 にくしみのルツボ	徳水直 龍次	龍次 龍次	龍次	舞踊 舞踊
12/21-23	エラソソグイ ターナル	大阪道頓 堀浪花座	壺芥掃除組合 フナトール 結婚式の朝 義勇兵の影	ジュネツクラー ソウニソウ オケイソウ	野瀬 野瀬 野瀬	野瀬 野瀬 野瀬	全関西新興演劇連合 公演 大阪構成劇場、七月 座、シアタK.G.D.S とエラソソグイターナル の4劇団の公演

劇団通信

通信依頼の要領

- ①一九七八年への課題と展望
- ②集団の現状と問題点
- ③さいきんの公演。本年度上半期の具体的スケジュール
- ④「大学」「作家・演出者会議」の感想と意見
- ⑤その他

(通信ははほこれに準じて答えてある)

劇団潮流

- ①劇団の法人化を計画しそれに取組みます。
- ②平均年令が高くなって来ているので有望な新人を求めている。
- ③七八年度小学校移動公演、高松昌治作・平田一紀演出「おさよとかっぱ」高校公演、ブレヒト原作・八木浩訳・高松昌治潤色演出「ガリレイの生涯」5月17・18日一般公演として大阪郵便貯金ホールで公演します。
- ④「あゝその時の太陽は」で和田さんの御苦

勞を聞かされて大変勉強になりました。

(高松)

(大阪市西成区松一丁目六一一七楠モーター
気付)

劇団徳島

今年はいよいよ忙しくなりました。準備サークル結成以来一年ようやく新しい劇団の旗上げにこぎつきました。劇団名は徳島の地域に根ざして「劇団徳島」と決定、五月十九日(月)郷文ホールにて第一回旗上げ自主公演です。レバは宮本研「人を喰った話」と三好十郎「おさの音」の二本建、現在上演許可依頼中。

この劇団はかつて徳島で活躍した劇団水車、劇団つくし、劇団未来のメンバーに高校演劇のOBなどが参加して新劇大同団結徳島版の感じ、人数は現在約15名。①徳島の地域に根ざす劇団②自主的な演劇創造集団③観客を大切にする劇団などをめざすことで合意。

代表者さいと、さとし、事務局長田淵豊。二月十八日徳島市民劇場総会席上で発足あいさつ第一声。現在協力後援団体、個人、マスコミ等を対象に、創立あいさつと協力依頼活動を始めるかたわら、旗上げ公演の準備活動に入りしました。五月旗上げ公演の後、八月に

県民まつり演劇の日に参加出演の予定。その後秋のシーズンにもう一本やれるかどうかは問題、市内に止まらず都部にも出たいし、芝居のできる機会があればどこかでもでかけて行きたいと考えています。よろしく御指導下さい。連絡先は左記さとう方。

(徳島市南佐古八一五―16さとうさとし
TEL 〇八八六―二五―八四九五)

劇団四日市

昨年は創作劇「戦中派」の公演で、十五周年を記念し、四月より研究所システムを確立し、一期生2名、二期生1名を劇団へ迎えました。

そして暮れも押し迫ってあわただしく、専属ケイコ場を持てるようになりました。

これは、古い家屋を借り私たちの手で五十日かけて大改装した、文字通り私たちが作ったケイコ場です。

三十五号で市内四ヶ所の施設を転々と利用してゆく「ジブシー劇団」のことを報告しましたが、こんなに早く専属のケイコ場が持てるなんて全く夢のようです。そこで、元氣よく「河」公演に取り組んでいます。

第十九回公演として四月十五・十六日に四日市市民ホールで上演いたします。

劇団名を変更しました。これは大分前より劇団名をもっとすっきり言いやすく、ということでも考えられていた事ですが、ケイコ場が確保できたのを機会に全員一致で「劇団四日市」に変更したものです。

電話は、〇五九三五一―九四二六です。20人位は楽に泊られます。泊りがけで「河」を観に来て下さい。

目下の所「河」の公演で目まぐるしい毎日ですが、このあとはケイコ場を持った意義と位置づけ、そして今までの活動の総点検を行ない、二十周年に向けての新しい運動方向を決定しなければと考えています。(森賢郎)

(四日市市北浜町九―一〇)

演劇集団土の会

①課題は沢山ありますが、イメージを身体的に自由に表現出来る役者を創る基礎訓練。演出力のアップと機能としての位置づけ。集団員の増強。未来への準備(スケッチ劇場・矢野喬司作劇)。

②一人一人の力量不足や自分にとって演劇することは何かという認識の弱さを芝居を通して己にどう獲得出来るか。それらの問題点を考えることが出来る状態にあることは集団の状態として非常に良いと考えている。問題は

集団の質と量の獲得にある。

③一月二十一日(土) 勝山俊介作「嵐」一月二十八日(土) 真山青果作「玄村と長英」、けい古場にて小公演、観客約八〇名。この作品は継続して上演する予定。六月二十三、二十四、二十五日、清水邦夫作「楽屋」、於シブターグリーン(池袋)

④「演劇大学」は講演が素晴らしく、非常に感銘を受けた、続ける上で大きな力となった。分科会は散漫で難しい。事務局の皆様御苦勞さまでした。萩坂さんも眼に十分御注意御養生下さい。(倉田真)

(東京都練馬区大泉学園町四七四―一八)

人形劇団京芸

湯浅町以来御無沙汰致して居ります。「作家・演出者会議」も総会準備や何かで追われ失礼してしまいました。

①二月に定期総会を終って愈々本格的な今年度の活動がはじまりましたが、今年から一年がかりで、劇団綱領の現状に即した改訂を計る事を決め私たちの仕事の目標を改めて見定め様としています。今年度の課題は、劇団組織機能を高め、目まぐるしい情勢変化に対応出来る様、各セクションのギヤ―のかみ合せをよくしようと思っております。

②まさに問題が山積していて処理するのに追いつかない有様です。そのために諸会議が仕事の合間をぬって開かれますが、その回数が多くなっていくのも仕方がありません。保育、運輸、事務所、文芸専従等、職業的専門劇団として、抜本的に脱皮しなければ解決がつかないところに近づいている様です。急流の向うに落下する滝つぼの轟きが聞えて来る様な思いです。

③一月四日―八日までの七ステージ慣例の正月公演をおえました。出しものは、「たちえさるかにばなし」と寺村氏の初めての人形劇台本による、「うそつきテンボを知ってるかい」でした。

④劇場公演が東日本を振り出しにはじまります。今年から劇場班のメンバーから離れて三班の学校、保育所、幼稚園、親子劇場地域例会等へ巡回する班がめいばい活動します。

(宇治市白川鍋倉山三五―二〇)

演劇集団和歌山

①昨年の12月に総会を開き、本年度の方針をだしましたが、今年の課題は、栗原省氏を演出に迎えて上演した「ばらのいれずみ」の成果を充分に劇団のものに消化しきり、さらに「何をどう表現するのか」という劇団の方向

性を確立していきたいと思えます。

②当面の課題は劇団の拠点稽古場の確保です。

③和歌山在住の柳谷新氏による朗読「耳なし芳一ばなし」(ヘーンの原作を潤色)と落語を素材とした「だくだく」「轟どろ」「穴どろ」の創作劇の上演をめざして稽古に入っています。

④「作家・演出者会議」は期待はずれでした。問題提起が少し弱かったような気がします。(幸)

(和歌市小松原6―3―23楠本方)

岡山職場演劇集団

①一九七八年の課題と展望。こういう課題に弱いのです。敢えて書けば、書き手を育てることと役者を育てることが課題。展望……続けておれば自ら開ける一寸キザかな。

②集団の現状と問題点。現在男優不足。

③さいきんの公演、今年上半期の具体的スケジュール。志摩敬子作「白い路程」3幕を自主公演、五月予定。六月、全国鉄ゼミ参加。

(総社市富原四八〇―三岩城方)

京浜協同劇団

①今年、春に「星の牧場」でかわさき演劇まつりに出演、夏は太鼓の移動公演、秋には

創立二〇周年記念公演No.1として、集団創作劇を予定し、現在執筆中です。

③七回目を迎えた川崎市教育委員会・川崎演劇協会主催の「かわさき演劇まつり」には小山祐士脚色の「星の牧場」をもって演劇集団高津と合同出演。3月下旬に2会場、4日6ステージで観客四千人。演出は佐藤張二。演奏は川崎市民交響楽団の協力を得ました。市からの委託料が七〇万円しか出ないため、入場料の有料化をめざして市側と交渉するも実現せず、結局市民、観客にカンパをお願いしカンパ額は七〇万円となりました。

④「演劇大学」には四名参加。全体として好評ですが、なかでも芝田進午氏の講演と土方与平氏との企画についての報告に大きな刺激を受けました。

⑤労災の適用を受け、ケイワンで療養上の美濃順子(休団中)が北辰電機から解雇され(二月)、労基法にも違反するとして撤回闘争をしています。ご支援をお願いします。(城谷護)

(川崎市幸区古市場二―一〇九)

大阪府職劇研

前略、いつもご連絡ありがとうございます。昨年は創作劇「選挙カー」と創作ミュージ

カル八明日に築く俺たちの街Vの2本に取組みました。今年の活動方針を昨年12月の決定しています。

「今年の方針」。今年は主体的な演技力や創造力を向上することを目標に、身近なところで小公演の連続上演を行う事にしています。まず四月に、宮本研氏の「五月」を上演し、六月には自演連主催の春の演劇まつりに参加し秋には再度独自公演を行う予定です。

「目標」。広く私たちの活動を知って貰うため月一回機関紙の発行(一〇〇部)公演への協力依頼と劇団員の拡大に努めています。

「問題点」。職場演劇サークルとしてさらに大きな活動を行っていくため、劇団員の獲得を大きく前進させることが課題です。

(大阪市東区大手前之町・府職員会館)

府職労第2分室ボックス内)

世仁下乃一塵

「世仁下」としての現状は77/12月の公演そして総括等をへて、数名の退団者を出し、いよいよという矢先のことであり非常に残念です。このことから78年は、春については従来の研究公演形態ではなく、新しく東リ演に加盟した東京は江東地区で積極的な公演活動を行っている「石るつ」の創作小劇場(オム

ニバス方式)へ創作を持ち参加、相互に学びあうという企画。公演は5月中か6月中に江東にて。秋については東橋演参加の方向で考慮中です。「世仁下」でなくては出来ないものをつくり上げることか又、つくり続けられる限り展望は切り開かれるであろうと考えます。

「大学」については低調ではなかったかの印象です。

78年度第16回東橋演は勤労福祉会館が使用できないということで他会場(俳優座等)を選定中です。

○「民主文学」の戯曲研究会(月一回)及び東橋演の戯曲勉強会(月一回)への参加をよびかけます。(岡安伸治)

(東京都練馬区羽沢二―二三
第一美野荘15号 岡安方)

名古屋演劇集団

①創立30周年を迎え、3回の自主公演と年間30〜40ステージの移動公演を計画しています。舞台サービスの事業も発足、企画・道具製作から貸出し、アルバイト何でもやりま

す。よろしく。

②相変らず過密スケジュールと男性不足が悩みの種ですが、老いも若きもがんばっています。

交流しつつ前進したいと思います。ヨロシク

(名古屋市南区沙田町三―四〇)

劇団京芸

おせい梅花のほころびと共に、京都府知事選も住民の力量がためされる正念場を迎えています。

劇団も一進一退なんとか歩き続けています

◇三月京都府文化芸術劇場

「見知らぬ人」(真船豊作・川崎裕之演

出)

3月3・4・5日 府立文化芸術会館

◇中・高校移動公演

「鼠とぶどう」 七月迄の予定で巡回中

雲の荒木昭夫氏が執筆中。

◇京都の伝説「酒呑童子」を劇化する話が地元

の丹後丹波の研究者とまとまり、その準備

がすすめられている。

(京都市伏見区納所北城堀31―18)

劇団道化

①昨年は後半からですが、量質ともに充実した活動ができたと思っています。今年には年間を通じて更に充実した一年とし、学校に、ホールに、観客に待ち望まれる劇団でありたいと考えています。

す。

②2月4・5日、研究所第15期卒業公演、ジュリアン・リュシユール原作原千代海沢「海抜三二〇〇m」を名演小劇場で行い、13名を送り出し、4名が入団表明。第2回創作劇場として、おたの啓子作「UFOの来た町」を4月12・13・14日名演小劇場で上演します。演出若尾正也。久しぶりの新喜劇風作品で楽しい古をやっています。

7月25・26日、名古屋市民会館自主企画で中高生対象二、三〇〇名の企画が決定していますが、レバがまだきまりません。

④「演劇大学」は2名のみ参加、とても勉強になったと思います。「もつとみんな行くべきた」ノと声をかけています、来年はもっと送り出します。

(名古屋市区内通4―16―13)

劇団息吹

いつも御苦勞様です。春のおやこ劇場はさねとうあきら作「ゆきと鬼んべ」です。

始めての児童劇ですが、お母さん方や先生方の「子供たちに良い演劇を」というつよい願いに改めて目を開かされた思いです。3月25

日の八尾公演を始めとして、4月16日の市職労30周年記念行事での買いとりと長瀬(東

大阪)公演5月、松原、柏原(いづれも予定)公演、6月18日の天王寺新婦人主催の公演で打ち上げの予定です。

秋の「大和川」東川宗彦作は数回の現調を終え第三稿に入り、合せて演出準備も進みつつあります。出演人数も50名をこえ、大変なとりくみになりそうですが、団員拡大も進めつつ、20年目の息吹にふさわしい公演にしたいと考えています。

(八尾市堤町一―四〇)

劇団名芸

「演劇大学」へは充分な取組ができず、すみませんでした。参加した新人二人は色々な刺激を受けてがんばっています。

劇団は今、五月一九・二〇・二一の三日間行なう第16回公演「娘たちの明日」(栗木英章・作、拓植洋・演出)を目指して稽古に宣伝普及活動にと努力しています。

最近若い劇団員もふえ、久しぶりの創作劇でもあるので稽古場は活気に満ちています。

また、二月から第八期研究生も開講して、十二人の研究生が基礎訓練や卒業公演(六月予定)の準備をしています。七月には恒例の子供劇場、秋はシェイクスピア劇場第三弾と多忙な一年ですが、中部ブロックの仲間とも

②現在13名。まだまだ力不足だし、人間も

っと欲しい。活動の巾を拡げるために、創作

オルグに専念できる人も欲しい。切実な問題

です。

③中学校作品「奇蹟の人」は三月いっぱい

で打上げ、次の作品を準備中。小学校作品「ひ

と鉄ぼり」は更に一年間続演予定。

7月13日〜18日、ホール公演。

8月には、子供向け「にわか」をやる予定

(福岡市中央区春吉一―七―一八)

劇団群馬中芸

○「群馬未来劇場を建設する千人の会」の発

足。みんなの力でみんなの劇場。人が人の

心の内に拓くすべての芸術表現の場、人間

と人間をつなぐ「きずなの広場」としての

機能をもち、そこで私たちが、人間が人間

であること見出し育て得るもつとユニ

タな劇場の構築を。

○「わらしべ王子」(木村次郎作)八月まで

小中学校公演。

創立十五周年記念公演「草の碑」(いしぶ

み) 風見鶏介作・演出。

4月19・20日 於群馬会館

(前橋市昭和町三丁目15―2)

劇団東風(やませ)

①劇団員獲得と団内組織の確立。旅鳥的稽古

場の定着、集会場の確保を目指す。

②創立以来のメンバーが激減し、最近入団し

たばかりの若手が大部分を占め、質的低下が

表れている。各専門部所担当を決めると

同時に演技の質的向上をはかりたい。

③理論社刊吉田とし原作・榎谷伸夫脚本「ゴ

ネリは泣かない」3幕10場。

77年12月14日八戸市公民館ホール。観名

下斗米蓮一作「八幡馬の家」ほか一本

78年5月14日 八戸市公民館ホール

④やる気が起こり、はりきっています。新鮮

な感動を受け、「今年はやるぞ」という気

持。来年もまた参加します。

⑤住所がかわりました。(註・末尾記載)誌

代産れて済みませんでした。(榎谷伸夫)

(八戸市鮫町熊島町一四)

劇団どろ

(一)・劇団としての新分野における親子劇場の

定着と発展について・演劇集団としてのきび

しさと同時に個々の創造力の強化、発展につ

いて・二期目研究所の内容の充実と発展

(二)・稽古場が追いだされることになり(ピル

取り壊しの為)、稽古場を購入するか、又新

しい所を借りるか探択を迫られている・組織

的には、今年の一月総会により決定し、前進
しています。

昨年12月にて「親子劇場」移動公演パート
1を終了。二千名動員。

3月11・12日斎藤隆介原作・吉川雅喜脚色
「ゆき」上演。外部より一〇〇名を越える応
援者をえて創造的にも高まる。

5月親子劇場、8月県民土曜劇場予定。
四スケジュールの関係で参加できませでし
た。

(神戸市生田区海岸通三―三三三
海岸モータープール内)

演劇集団「石るつ」

前略。遅ればせながら、東リ演加盟後の第
一信です。東リ演の仲間皆さん、演劇会
議の読者の皆さんよろしく、

以下設問に沿って―

①と②演劇活動を、どう一人ひとりの日常生
活に組みこんでいくか、最も緊急で困難な課
題と云えます。我が「集団のめざす演劇」に
おいては職場や地域、社会状況そして家庭が
分離しては考えられないはずですが、現状は
はずの問題が具体的に定着するまでに到って
いません。自己変革の作業は集団的にみて困
難をきわめています。

五月下旬公演予定―栗原省・作「河童証
文」(演出・加藤雅敏)の稽古に入ってい
ます。

(旭川市末広四条八丁目五〇―一三―12
高桑修一方)

劇団造形劇場

百姓と芝居の吉四六劇団の今年の課題と展
望。私達が巡回しないと芝居を見ることが出
来ぬ大分県の幼稚園児や小学生の為に始め
て人形劇を制作します。当座二人だけで上演
できるもので、地域にちなんだ素材として、
(吉四六さん)(豊後浄瑠璃)、百姓の目か
ら考えた、(動物会議)(野菜会議)を構想
中、先日小学校・幼稚園の先生方と話し合い
をしたところ、是非、人形劇も造ってくれ、
そして子どもでできる脚本を書いてくれと要
請され、確かな展望をもてるようになりました。

劇団の現状は若者二人、今年一杯、他劇団
へ留学中ですので目下二人だけで百姓をや
り作品の制作中です。人形劇もやるので新人を
求めます。集団生活と百姓も好きな若者を
5、6名養成するつもりです。その点では経
済大岡の考えを捨て去り、自然と調和してひ
そやかに、そして充実していく道筋を述べこ

今年前半のスケジュールですが、第4回江
東演劇祭参加に加えて、江東四季のコンサ
ー(横井久美子さんを中心にしたステージ)
への参加を中心に動いています。コンサート
の第一回は2月4日に行われ、集団的創作の
コント(歌入りコント)をもって参加しまし
た。江東演劇祭については集団内創作の第一
稿が現在4本提出され、上演に向けて作業が
急ピッチになりつつあります。公演は5月18
日、21日の4日間5ステージです。

(東京都江東区東陽4―7―17―17
匹田方)

劇団若者座

・「いきいきとした演劇活動を展開する為
一人ひとりが劇団への姿勢を明確にし、お互
いの信頼感を立て直そう」と二月五日の総会
で決議しました。

・劇団が老令化して特に古い団員の結果が悪
い。「早急に若返りをはからねばならない」
という事で、三月五日、宇部市内の二つの
高校の演劇部との交流会を開きます。新しく
社会に入る「演劇人」を一人でも多く我々の
仲間に入れてするために、当日の企画を慎重に
練っています。

・最近の公演、十一月二六日、国際シンポジ

とが必要で。

動物は念願の対州馬(メス)が入り、山羊
うすく山羊が子どもを生みはじめます。七面
鳥は毎日卵を生んでいます。春には一段と賑
やかな動物園となることでしょう。その頃か
ら二人だけの人形劇(吉四六さん他)が県南
を走りまわります。土地もどんどん増えてい
ます。乞御期待!!
(野呂祐吉)

(大分県大野郡野津町板屋)

劇団四紀会

①集団の現状と問題点
②合同推進体制(団内の四つの制作班が―市
民・若者・家族・実験劇場班―それぞれ独自
にレバを決めプロデュースしてゆくやり方)
によるスケジュールの過密をどうするか。
③「働く者の演劇教室」が10年目を迎えて一
貫して事務局の責任をとって来たTさんが復
団することによる新しい派遣問題。
④団内の世代による「芝居のこだわり方の違
い」からくる不安。

⑤最近の公演

○1月21・22・29日6ステージ。観客二一七
〇名。松谷みよ子原作・瀬川拓男脚色「竜の
子太郎」岸本敏朗演出。

ユウム「山口のヒロシマ」の集会に構成詩
「峠三吉・その日はいつか」で出演。
・スケジュール。2月25日山口県文芸連総会
と記念集会に引受地区として中心的役割をは
たす。

・6月25日。昨年成功に力を得て、「ちび
っ子フェスティバル78」を市内の合唱団、マ
ンドリン・オケ・奇術クラブ・人形劇団・映
画サークル等と共に催催します。すでに実
行委員会ができて動き始めています。若者座
は多田徹作「陽気なハンス」を天羽新平演出
で稽古に入りました。

七月には右の各団体に呼びかけてキャン
プを行う予定です。次の通信にはいい報告が出
来ると思っています。(天)

(宇部市松山町四―一―〇―24東洋針灸科
内)

劇団同胞

前略、近況をお伝えします。
①②・創作劇への取り組みを具体化(準備中)
・劇団員の拡大・業書による劇団機関紙
「ミニ同胞」の年6回発行。
③二月九―一二日旭川冬まつりへ参加、雪像
「やすらかにチャップリン」を半月がかり
で創作、地方紙に写真が載り好評でした。

大変好評で気を良くしています。来年は五〇
〇〇名、再来年一万人の観客動員をやって
たいです。

4月28・29・30日

内田昌夫作・麗武史演出

「あゝ八月の陽の如く」(大正10年神

戸川崎・三菱大争議)

ケイコをやりながら本を創っています。少
し心配です。

7月3・4・5日 ケイコ場で実験劇場

エタウスのシェーファの作品。乞御期待

(神戸市兵庫区三川口町一―八九)

演劇集団土くれ

①昨秋の第17回公演で減少傾向にあった観
客動員に歯止めをかけることに成功しました
が、創造内容についてきびしい批評を受け、
深刻に受とめています。10年に当って、創造
面での脱皮が求められています。

②現在青年劇場さんの指導のもとにモダン
ダンスと「必死」に取り組んでいます。表現術
発想の転換、肉体系ムの安定など参考にし
ようと思っています。女優陣の新陳代謝もあ
り、レベルアップに必死です。
③「日本警学入門」のうちの矢野喬氏の作

品に決定。青年館文化祭など小公演を重ね、18回公演「国税万事始」に参加します。公演は5月末を予定。

④「大学」参加者、その殿しさにブルブル、テープを廻し合っています。

(東京都足立区東和五―12―17―183 石塚方)

編集部註・差出劇団名が洩れており「土くれ」は推測です。お許し下さい。

演劇集団わだち

①今後2年間の具体的活動方針を出し年2回の公演を中心に活動してゆく、特に注意したのは、活動の空白期間を無くすること。

②昨秋の学校公演以来劇団員の減少などがあり一部の人達の努力に負う所が多かった。

③昨年十一月小学校公演3ステージ一四五〇名 木下順二作「陽気な地獄破り」

五月二・一三日 大阪自演連「春の演劇祭」参加

六月 劇団内演劇教室開催 芳地隆介作「幽霊はどっちだ」

④申し訳ありませんが参加しておりません。(木下 修)

(大阪市福島区福島六一―二―一七 川村ビル4F)

劇団やまなみ

①一月に開かれた総会で、ここ数年薄められてきた劇団の創造活動を強化することが確認され、集団創作を考えようと、みんなが問題を持ちよる第一回の集りが近く開かれます。また今年はいけい古場を確実に建てること課題。

②若い人達が着実に成長している反面、旧い人たちが困難に直面して集中できない現状をどうするのか。どうしようもないこととして放置するのではなく、劇団として意識的な対応が迫られています。

③「女の一生」の甲府再演を含めて六月まで県内移動公演の体制をとる。七月には十一期生の卒業公演を予定、夏のプロックゼミのための準備を進める。プロック間の親劇交流の強化。

④ゼミの隔年化とプロックへの移行と関連して「大学」の意義も益々重要となっていて、ますます年々充実しているのを感じますし、プロック活動の強化と共に東リ演劇の柱としての性格をもちつつあるように思います。

⑤山演協での友誼劇団、富士吉田の表現座が昨年に続いて二作目、郡内に材をとった「殉候義民伝」を上演しました。(資料後送)

(甲府市青沼一丁目八一五)

劇団名古屋

①地域に責任をもつこと、日本の演劇に責任をもつこと、仲間にもつこと、あくまでも舞台上に執着し、同時に稽古場の外に出ることを恐れない。

②劇団の未来をにやう若い仲間たちが大半を担って来た今、若い仲間たちは創造の力量アップを計るために今一度、芝居に対する基本姿勢を考えてみる必要があるのではないか。

③12月8―9日(2ステージ)に東別院青少年会館にて、劇団創立20周年記念公演第2弾として、「日本の青春」―里はまだ夜深し富士の朝日影―(作・しかたしん、演出・久保田明)を上演。江川太郎左衛門と現代との接点に、もう一つ肉迫出来なかった点が指摘されました。12月24―25日(3ステージ)に名

演小劇場にて、附属演劇研究所第10期生卒業公演「夕映えのうた」(演出・浅井靖章)を上演。

④私たちの活動は無意識のうちに、内部思考へと向かってしまっているので、いわゆる「井の中の蛙」になりがちである。こうしたことを打開するためにも、この「演劇大学」等をもっと活用し常に視野を広くもって、演劇活動を推

し進めて行くことが大事なのではないか。という意見が、演劇大学へ行った人から出されました。(歩)

(名古屋市中区熱田区新尾頭町五〇)

劇団ぐみ

①劇団員増加。

②退休団により劇団員不足からくる意欲半減

③七月八日 78年度定期公演予定(作品検討中)。

今後の連絡は左記大谷方まで。

(米子市博労町四の七五 大谷昇方)

劇団きつがわ

私たちがとうとう創立15周年を迎えてしまいました。もともと15年といっても、演劇集団らしい積み重ねはその半分にも満たないかも知れません。右も左も分らぬ若者サーターが、つぶれもしないでよくここまで続いたものだ、というのが実感です。

そんな私達にも、やっと念願の「けい古場」ができました。小さなけい古場ですが、「地域」にじっくり腰をすえようとする「運動と創造の誓」なのです。

春の取り組みは、この「けい古場びらき」と昨年の秋好評を得た「かげの誓」を、青年劇場のご厚意により、地域公演第5弾として

三ヶ所で再演の予定です。

◇けい古場びらき

5月27―30日

『寒鴨』(作・真船豊、演出・赤松比洋子)

◇地域公演No.5(第2回大阪春の演劇まつり参加)

『かげの誓』(作・小寺隆徳、演出・林田時夫)

5月14日(日) 大正区民ホール

5月28日(日) 住吉区民ホール

7月2日(日) 住之江区民ホール

(大阪市大正区泉尾四丁目二番七号)

劇団大阪

東西演の皆様、お元気でご活躍のこととおもいます。

私達の劇団は昨年暮に総会を開き、昨年の総括、並びに今年の方針を討議しましたが、仲々展望は開けて来ませんでした。

むしろ、「積極的模索」という珍語が物語る通り、方向は見えて来ないけど積極的になんて手さぐりでもやって行く以外にはないのではないかとということになりました。その中味として、一月―三月に元関芸の小松徹氏を迎え、J・M・シング作「西の国の人気者」

を公演する事になりました。少しでも良い舞台を創り出そうとするための努力として位置づけ、団員も相当の努力が要求されるはずで、その結果が劇団の肥料となり、次の作品へ生かされるのではとの取り組みです。

次の取り組みは、五月末と十月半に、従来より協力して頂いている、長谷川伸二、井上満寿夫両氏の創作劇を上演する予定で、両作家に奮闘を願っています。

課題としてのいくつかとして、「ケイコ場」を維持して行くための劇団経営と、公演会計の健全化を、より一層確立すること等、山積んでいます。

現在、「西の国の人気者」の公演直前で忙しい毎日を送っています。終りましたら専門化と芝居創りについての経験等の総括を送りたいと思っています。

尚、今年のスケジュールは次の通りです。三月十二日―十四日、十七日―二十日、谷町劇場No.5、J・M・シング作「西の国の人気者」演出・小松徹、於ケイコ場。

五月末、第2回春の演劇祭参加作品、第11回本公演、創作劇「電信柱に花が咲く」(仮題)作・長谷川伸二・演出堀江ひろゆき、於青少年会館小ホール。

十月十六日、十八日、第七回新劇フェスティバル・大阪文化祭参加、第12回本公演、創作劇「井原西鶴」(仮題)作・井上満寿夫、演出・熊本一、於郵便貯金ホール。以上

(A・T)

(大阪市南区谷町七丁目二一)

新谷町第二ビル一〇三号)

劇団上野市民劇場

全国の仲間のみなさん今日は、いいよい春です、各地で公演が盛んに行われます。殊に東リ演では演劇大学での字が合いがどう活かされるか、期待の高いところです。

①一九七八年の課題と展望

去る一月上旬に開催した総会では、けい古場を含めた劇団経営と創造の両立にむけて、組織の整備と移動公演体制を確立しました。小都市における業余劇団としての自立の方向を追求するのが、この一年の課題であり、専従配置をめざすための一年でもあります。

②集団の現状と問題点

新入劇団員の定着と組織の強化が遅れています。それが創造の力量に影響するので弱小劇団の悩みとなっております。

③今年上半年のスケジュール

・3月7日「吉四六さん」

四日市市立水沢小学校公演
・5月21日「へこき三良」(儀間比呂志原作 道井直次脚色) 10時・2時
産業会館ホール

・その他「吉四六さん」移動公演

(四日市、および南勢)

※第7期研究生5名で4月30日終了をめざし学習にはげんでいる。

④「大学」の感想と意見

演劇大学に参加して感じたことは、夜の交流会が少し余分な気がしてならないこと。それは第二日目芝田進午氏講演など、いねむり族もいたようだ。「演出分科会」に参加したが報告者に指名されながら、核心にふれる報告ができず、申しわけなしです。

あえて感想を言えば、現代の状況の中の芝居づくり、作品をどう画くか、創造理念との関連が分析できる、そんな援助をいただける分科会として深く討議できる分科会として時間を増やすと良いな?…:…ということですが、講演も大変よく、自分たちの方向に確信もてる内容でした。

(三重県上野丸市ノ内共同ビル3F)

演劇集団未踏

春まじか。みなさんお元気ですか。

我集団は三月四日、「朴達の裁判」を大阪郵便貯金ホールにて公演しました。八百数十名の観客が、初めての大阪公演で大きな成功を勝ちとりました。

最初にこの喜びの報告をさせていただきま。当日は時折激しい雨、客足の伸びに大きな影響があるのでは、惨めな結果に終るのであるの不安をよそに、開演一時間前くらいから統ぞくと押しかける人々に、私たちの気持ちも次第に張りつめたものになってゆきました。稽古の成果を思い切りぶつけることができました。若手を初め、惜しめない協力をし

て下さった客演のみなさんからも、一回だけの公演では勿体ないとの声も。当日、はぐるまのこばやしさんと島さんが観にこられました。また、西リ演の劇団「未来」の方々はじめ多くの人々に身内にも秀らぬご協力をいただいたこと、紙面を通じて深く感謝致します

①及び② 今年の課題は経営の確立、若手の育成も含めた俳優の基礎訓練の日常徹底、学習・研究の強化などが挙げられます。今年には稽古場をフルに活用し、小劇場公演(発表会)をもってゆく方針が立てられています。経営面では昨年暮からの困難な状況を完全に克服しえたとは言えないものの、それ

ぞれの自覚を深めることによって、一歩前進の状態にあると言えましょう。

③冒頭にも述べましたが、三月四日の「朴達の裁判」大阪公演、そして九月末から十月にかけて、中野・小金井・江東の三会場で本公演「幸福の設計」の上演予定。さらに五月には稽古場が近くの会場を借りての研究公演、年中フル回転の子供劇場巡演とまた忙しい一年のスタートを切りました。

④演劇大学では講師の各氏に感謝します。

次回はより多くの参加で、劇団に多くのものを持ち帰りたいと思っています。分科会に参加しても感じたことですが、私たちの演劇活動に制約を加えている様ざまな問題に対して、私たちが協力共同して闘ってゆくことの重要性を改めて考えさせられました。(清)

(東京都新宿区新宿一―十一―十五)

劇団すがお

暖かくなってきました。皆様お元気のことと思います。劇団すがお、今年の展望は

①久々の一般公演

『狐とぶどう』 奴隷ソップ物語

4月30日(日) 桑名市民会館

(石垣正司の初演出)

②秋は中高生向けレバ

・二つの公演を軸にすすめるため、劇団員を増やすこと、稽古場を最大限に利用して創造の発展と地域文化の中心となる努力をすること。

・来春、劇団四日市との合同公演にむけて態勢をつくること。

・稽古場建設資金借入金返済計画の確立(市の助成金と劇団員の積立、公演収入等での展望をほぼもつことができる)等々です。では又。

(桑名市森忠上野一〇五八)

劇団てまり座

こんにちは。劇団てまり座です。

(一)私たちの文化を私たちの手で、(二)演劇を通して生きがいや友情と連帯を、(三)たのしく豊かな未来をひらく演劇を、(四)というスローガンで、昨年十一月に出発しました。当年一回の定期公演と児童劇の上演を目標に活動計画をもちました。目下、演劇する仲間呼びかけ運動にとりくみ、あわせて基礎学習と定期公演にむけて上演レバの選考を行っています。

六月から七月にかけて第一回子ども劇場として市内巡回公演を計画し、ミハイルコフの「三匹の子ぶた」をとりあげて準備に入り

ました。

不況と退廃化のすすむ文化状況の中で私たちは、現実的に生活感情と実感を受けとめて地域演劇のあり方を模索したいと思えます。皆様方のご指導をおねがいします。

(鋼路市貝塚一丁目六一―一九加藤猛春)

劇団未来

◇3月4日(土)夕、大阪郵便貯金ホールであふれ返る超満員の観客を集めて、演劇集団未踏の大阪公演「朴達の裁判」が持たれました。文字どおり「未踏」であった大阪での大入りは、賛助出演していた地元の方々(14人)にとって大きな驚異でした。

◇それにしても、未踏の仲間のオルグ活動での真摯な取り組み、誠実な舞台作りには感動すると共に、学ぶところ大でした。

◇さて今年も開かれる大阪自演連の春の演劇まつり(5月12日・13日)で「未来」では大鼓構成で参加します。

◇7月7日・8日、15周年記念No.3「太鼓構成」日本のふるさと」も決っており、連日、古タイヤに向けて練習しています。(N)

(大阪市西区江之子島一丁目七―十一)

新うつぼビル4F)

福井劇の会

①今年、福井劇の会創立20周年に当ります。昨年は創作劇への指向や会活動への集中がぶって忍従を余儀なくさせられました。20周年を踏み台として80年代への飛躍の道をきり開こうと意欲を燃やしています。1月29日の総会では左記のような運動の柱をたて、既に幾つかは準備実行にかかっています。

A 日常例会活動の充実と改善(運営体制の強化改善)

B 20周年記念パーティ(5月)

C 20周年を記念するに足る脚本創作と大公演(7月)

D 第一回演劇シンポジウム開催(9月)

E 若手会員による脚本創作と公演(11月)

F 20周年間の資料の整理とまとめ

②ここ2、3年、日常例会への結果が悪く新旧会員間の演劇観の相違がめだつてきています。今年に思い切って運営の方法や体制を改善強化しましたのでいづれ実ってくるものと考えます。また、文化団体間の統一や協力共同の企画も、例年になくもりあがっており、創作劇運動にも充分反映してくるものと期待もし努力もしています。

③20周年記念創作劇は、この3月に「福井空

準備中です。それに秋に創作劇の上演に向けて、書き手(劇団の会友へ依頼)と団員の話し合いを踏まえ3月末を目途に構想を具体的に作り上げて取り込んでいきます。

④「演劇大学」へ、まずしい劇団財政の中から2名参加したのですが、とても勉強になりました。今テーマを聞きながらまとめているのですが、日常の稽古の中で意識的に見ようとしたら、問題がいくつもあり、それを解決していく努力が足りないのを感じました。当然のことなのですが、そこが出来てない……。(尾田浩)

(釧路市鶴ヶ岱二一十一—十五東野方)

劇団協同

演劇大学ごころうさまでした。

参加した者はそれなりに勉強になったようです。私共では現在移動小公演の作品選定を、あれこれと時間をかけて行なっています。「鳩」「乞食の歌」「春雷」「にんじん」等があがっています。平行して二月に入り、元統一劇場の人で「波」という集団の人に「寄せ太鼓」「バカばやし」「八丈島太鼓」を教えてもらっています。大太鼓、小太鼓、笛、すりかね等をそろえて、意気込みはあるのですが、なかなか思うように行きません。

歴史」が刊行されたこともあって、福井空襲に題材を求めました。会代表の田島の手により「いまもおあの夜のことは」と仮称する3幕8場の第一稿ができました。かなり大膽な手直しが必要で3月一杯は集団創作に集中します。4月より準備、けい古にはいり、7月10・11日、観客二〇〇〇名以上を目標に公演の予定でいます。5月に20周年記念パーティ計画中です。

(福井県坂井郡金津町旭92—11田島伸浩)

劇団さつぼろ

御無沙汰しております。

①今年四月開所予定の付属演劇研究所を軌道にのせる事。定期公演「狐とぶどう」の全道公演を成功させる事が大きな課題と展望です。

②冬期間の小劇場公演での教訓ですが札幌市内での取り組みの弱さ、地元を根をおろしきれないのが現状の一つに上げられると思います。

③三月十日(金)十一日(土)第4回定期公演「狐とぶどう」を道新ホールで上演し、六月中旬から全道公演に出ます。小学校公演「チポリーノの冒険」五月八日から全道各地の小学校で。小劇場公演「はやてに走れ、あ

今年には集団創立20周年の年ですので頑張らねばと思っております。三月に劇団員同士の結婚式があり、これで既婚者が2組5名になります。(黒田)

(立川市曙町三一四八—七)

劇団新劇場

すっかりごぶさたしました。皆さん方、連日のご奮闘ご苦労さまです。北海道では2月異常な豪雪に見舞われどうなることかと心配しましたが、3月に入ってから、3日くらいらかな陽がさし、ようやく春の息吹が感じられてきました。でも周りを見ると不況、不景気と色めく材料に乏しく、いよいよ厳しい年になりそうです。

さて、劇団では4月8日(札幌)9日(小樽)の公演に向けて今、燃えています。特に今回は、小樽「新芸」札幌「統一座」の仲間と合同ということもあって、お互いハッパをかけながらの毎日です。本山節弥作の「オホーツクの女」を上演します。先日4、5日と現地調査に行ってきました。北海道の春一番は「オホーツクの女」を成功させることから始まりそうです。走り書きで申し訳ありませんが、劇団の近況まで。

(札幌市中央区南24条西11丁目)

まんじゃく」「乞食の歌」を五月一日から札幌を皮きりにスタートします。

④都合で参加できなかったので悲しからず。(札幌市西区手稲宮の沢四八番四一)

釧路演劇集団

いつも御苦労さまです。

①2月19日に総会を終え、新しい運営委員会でスタートする事になりました。課題はやはり劇団員の参加をどう可能にしているのか、だと思えます。現団員23名中8名が休団の状態です。それと劇団民主主義(とてもむずかしい言葉ですが)の確立です。今年には毎月一度の全体会議を設け、団員の現状把握と日程の徹底を計っていきたくと思います。それと年間スケジュールの中で2ヶ月間くらいの学習期間を設けようと計画しました。計画としてけい古場建設基金を作るため、団員の他に5年計画で一月一〇〇〇〇円の積み立てと公演予算組み入れて、まずまとまった金を作ろうと決まりました。

②まず休団者が多いこと。公演活動の中で日常活動をどう充実させていくかということ。

③6月22—24日第七回本公演、中村おがわ、大橋喜一作「車椅子の王女とその騎士」の再演(49年にアトリエ公演で上演)に決まり、

劇団はぐるま

昨年の市民劇場・劇団四季公演「ウエストサイド」は、開演数時間前からお客さんが並び、私たちの公演や労働例会にはあまり見かけない顔が会場にあふれたのは、やはりシヨックであった。歌と踊りが一つの演劇の可能性を押しひろげ、若い人々に圧倒的に受けられているのは客観的な事実である。

こぼやし曰く、宇野さんのおひざ元の福井で民芸は三、四〇〇どまり、しかも年配。四季は満席、しかも若い人たちというのもうなづける次第。

そんななかで劇団の何人かが、東リ演の劇団の公演はあまり見に行かないのに、東京まで、四季の公演を見に行ったりやつが何人か出た。そして今年の総会で、順風満帆でやってきた親と子の劇場の「こけおどかしたスペクタクル路線」の行きづまりと新たな創造の開拓のためにも、演出部強化と歌舞プロジェクトチームの誕生がうたわれた。

とりわけ、本年度の一番の課題は、冬開場予定の第二の創造拠点(小林劇場)の建設とこけらおとしと25周年「郡上」公演への準備であらう。

当面公演スケジュール

春 第49回公演 4月29(祝) 30(日)

4ステージ 岐阜産業会館

秋元松代作・こばやしひろし演出

「かさぶた式部考」

夏休み親と子の劇場 7月16(日) 日

大垣市民会館 2ステージ

7月22(金) 23(土) 24(日) 日

岐阜市民会館 7ステージ

斎藤隆介作・松岡直太郎脚色「ゆき」

秋・冬 小林劇場こけら落し、小劇場公演

「演劇大学」への参加は、小林演技教室の

みが大繁盛だったとかで、東リ演のぶっかっ

ている壁を改めて認識、日夜、小林演技教室

をうけているわが劇団員のしあわせは、もっ

て祝すべきか。

(山口和紀)

(岐阜市西野町一丁目)

岡崎演劇集団

①劇団創立10周年を前にして秋の創作劇上演

を鋭意準備中です。②劇団の新人の定着の懸

き、中堅層の薄さ古手の集中の悪さと、三拍

子そろっているのが問題です。

③12月18日(日)アラルコン作・木下順二郎

色「三角帽子」於岡崎商工会議所ホール。

2月11日(祭)「三家福」豊田市立美里中

学体育館落成記念。

6月11日(日)木田英郎作「五月の人々」

於岡崎勤労会館(予定)

④2月11日に公演があったため「演劇大学」

に参加できなかったのが残念です。来年を期

待します。

(岡崎市元欠町3-10-3)

劇団埼芸

みなさんお元気ですか。

埼芸は去年創立10周年を迎え、今年はいさら
に20周年へ向って新しい一步を踏み出す年だ
す。そのスタートとなる公演として「アンネ
の日記」(脚色・アルバート・ハケット、フ
ランセス・G・ハケット、訳・菅原卓、演出
塚田恒夫)を決定し、一月から稽古に入りま
した。

一方、埼芸の第5期研究生の卒業公演が、
会場の都合で、昨年中に行う予定だったもの
が、今年にずれ込み、2月19日(日)に一回
公演で実施しました。作品は芳地隆介氏の
「幽霊哀話」演出・塚田恒夫。研究生は女子
4名と劇団員の中の新人男子1名、女子1
名、新人ではない劇団員女子1名が参加協力
しました。舞台の出来ですが、研究生自身で
選んだ作品でしたが、作品の要求しているも
のに対して表現能力の不足が目立ちました。

彼らの努力については、一応の評価が出来よ
うかというところです。観客の方はますます
の入りで、制作上の赤字はまぬがれたよう
です。

続いて三月九日には、劇団員の子どもの通
学している浦和の小学校から、子どもたちに
人間による芝居を観せたいという強い要望が
あり、劇団としては日程的にかなり厳しいも
のがありましたが、一昨年公演した、さねと
うあきら氏作・川村武夫演出の「ゆきと鬼ん
べ」をもって、学校公演を行いました。この
作品は、舞台づくりに更に工夫を加え、良
ものにしながら、埼芸のレパートリーとして
いつまでも上演できるようにしていきたいと
考えています。

こういった公演活動が続いた関係で、先に
稽古に入っていた「アンネの日記」の方がお
くれ勝ちになってしまい、ようやくこれから
と云った状況です。出来るだけ早く遅れをと
り戻し、実りある舞台を創り、普及面でも成
功させていきたいと考えています。

なお、今年の児童劇は、劇団内で脚色した
民話劇2本の内から一本を選ぶ予定で、準備
を始めています。

最後になりましたが、先きに行なわれた東

リ演の「演劇大学」ですが、丁度研究生公演
の準備の迫込み時期に当たっていたため、地元
劇団としての役割の殆んどを果すことが出来
なかったことを深くお詫びします。

(川口市領家五一六一九)

仙台小劇場

◇七八年の課題と展望としては、劇団内にい
かに民主主義を定着させるか、劇団の総合的
創造水準をひきあげるか、劇団財政をどれだ
け健全化できるかです。とりわけ団内民主主
義については、演劇創造のための民主主義、
演劇運動のための民主主義の追求にどれだけ
近づけるか、「集団の目標と一体となった集
団づくり」が課題としてうかんでいます。

◇若かった子どもの時代の仙台小劇場も青年
期に入ってから、運営をめぐって団内が上を下
への大ききわぎをするようになりました。一人
一人が主体をかけて、劇団のあるべき努力目
標を議論しています。言わく「けい古場とは
一人一人が自分のできるかぎりの創造を持っ
て集まり、仲間に分け与える所である。誰か
教えてくれる人が外にいるからと、教わりに
いくようなものでないのではないか、演劇と
いうものは、学校と劇団の違いは区別しよ
う」と。

(静岡市昭府町二八九-二)

福岡現代劇場

縮切に遅れてしまいましたが、一応簡略に
通信送ります。

①創る側も観る側もワクワクするような芝居
を創りたい、体験したい。
②演出対俳優ではなく、役者対役者の拮抗が
生れる中でアンサンブルも生れ、創造性も豊
かになるのではないかと。

(しかし、依然混沌した状況が続いており、
目下現状打開すべく頑張っています。……。
色々あり容易に進展しません。)

③昨年10月、「アンティゴネ」は1000人
を越す観客動員をし、財政的にも黒字で一応
の成功を納めましたが大変困難な仕事でし
た。劇団の弱点を大いにさらけ出しました。
今年5月は新人を中心に実験的な芝居を、秋
には大作とハリキっています。

(福岡市中央区薬院一六一五)

◇東海甲信ブロックでは、浜松からっかぜ
「愛」三部作、富士宮つくし「富士山」、両
劇団への観劇交流を実施し、四月中旬に、ブ
ロックゼミナールのための第一回実行委員会
をもつ予定でいます。

稽古場建設の歩みと活動のひろがり

——三重県三劇団による座談会のまとめ——

栗 木 英 章

(劇団名芸)

二月四日、寒気団が居すわって粉雪が舞う寒さの中、久保田氏(劇団名古屋)と私は桑名の劇団すがおへ向かった。

三重県の東リ演加三劇団(すがお)「四日市」「上野市民劇場」が、ここ一年位の間にそれぞれの形で稽古場を完成させたのでその建設過程やら、それからの活動のひろがり等をめぐって座談会を企画したためだ。

かつては会うたびに「稽古場を借りる苦労話やジブシー劇団の悲哀」を語り合った東西リ演の加盟劇団の多くが、血の痛み出るような苦勞をしつづめて拠点を建設したのは、やはりその地に根づいた創造活動を展開しようという不退転の姿勢のあらわれであろう。

「すがお」の稽古場は、まだ人家もまばらな高台にあり、定刻の五時前後には、久しぶ

りに会う三劇団の面々が、「寒い」を連発しつつそろった。

座談会は多岐に亘り限られたスペースでは可成割愛せざるを得ないが、できるだけ発言要旨をまとめる形で以下概要を報告する。

出席者 すがお 加藤、石垣、増原

四日市 森、林、笠原

上野市民劇場 杉森、岡本

司会 久保田

(敬称略)

久保田 三重県の三劇団が、ここ一年位の間に自分たちの稽古場を持ったわけですが、そこで地域に根ざす我々の活動がどう展開されていくか、までもふくめて気楽に語り合いたいと思います。まず、きっかけとし

だ。すがおは長く使っていたお寺の好意もあって続いていたが、十周年には是非稽古場を建てようと言ってきた。

正式に決定したのは七〇年で、八項目の方針をたて、ラーメン会計をやったり、街を車で走っては空ビンや古新聞を拾い集め、映画、市民ホールの裏方、司会、色紙販売など、ありとあらゆる努力をした。問題は土地で、四回ぐらい構想が変わった。

七六年三月には二百三十万たまったが、そのうち、カンパを続けてくれている人から「いつ建つんや」という苦情も受けた。

劇団内も、代表の後藤が休団状態(その後退団)で、かなり迷いもあったが、七七年一月の総会で「やろう」と決意した。棟上げ時点でなお二百万不足で、臨時総会を予定したところが、その劇団員が住むアパートでプロパンガス爆発が起り重傷を負って深刻な事態になった。

正直いって建設を中止するかどうか随分悩んだが、重傷者の回復の目途もたったので、不足分は共済から借入れて、やっと業者への支払いをすませた。

市役所へも百万円助成してほしいと交渉し、かけずりまわって請願書も提出して、

とりにくい補正予算で、「桑名演劇協会への助成として三十万円援助」を獲得した。色々苦勞したが、借金はあと三年位で返済できそうだ。

森 四日市は、ほんとに長い間ジブシー劇団の哀しさを味わってきた。かつては社会々館や、新聞社の支局の二階や、お寺など借りまわった。

今でも忘れられないが、十年前、公会堂の日本間を借りていたとき、深夜放火による火災が発生して、駆けつけた私は、頭から水をかぶってとび込み、衣袋だけは救ったこともある。

ともかく、転々として、日程表をみてなると、稽古する場所がわからなくなるといふ苦しい状況だった。そんな中で団員も少なくなり、七年前の浜松での東リ演ゼミのときは、たった二人で参加した私と山本で「もういよいよおわりか」とまで話し合う状態だった。

しかし、その後若い人がふえてきて「キユーポラのある街」等を通じて全体に上昇気運にのり、内部から「金をつくってどうしても自分たちの稽古場を持とう」という気持が盛りあがってきた。そして去年の六

て、つくるまでの苦勞などから出していただければ……。一番はじめの上野市民劇場からどうぞ。

杉森 以前は市の公民館を独占したような形で使えたが、市民の運動が活発化してきて利用が難しくなり、別に借りた六畳一間のアパートもせいぜい話し合いや学習会どまりだった。

それでは創造の上で、稽古が途切れるマインナスが大きいし、どうしても自由に使える稽古場がほしかった。しかし、貧乏世帯で金もない。そんなところへ、劇団と長いつき合いをしていた人が「共同ビル」を建設するという話を聞き、腹をくくった。

こちらの要望通り、壁もぶちぬき、内装もして、四十六平方メートルの稽古場とすることができた。権利金と改造費で百五十万。家賃が月五万五千円だが、金は労金から借り、永久に借りるという契約にした。小さなスペースだが、駅から二分、街の中心という便利さがあった。他の劇団のように、土地を買って云々という苦勞は少なかったが、決断するときは幾晩も眠られず、全体会議をくりかえして踏み切った。

加藤 今でも「よく建ったなあ」という思い

月から、ポータスの一部出賃もスタートした。折りもおり、劇団のつながりで古い民家を借りれる話を持ち上がり見にかけて。全員その古さに借りるまでもないという判断だったし、私自身も無理して借りても劇団はよくなるのか、と随分迷いはあったが、四月に上演を決定した「河」を成功させるためにも拠点の稽古場が不可欠と決意して、運営委、全体会議で決定し、一気に踏み切った。

改装は、専門家の見積りでは三百万円必要とのことだったが、年末に全劇団員毎晩と土日は終日仕事に取組み、人件費以外約八十万円で作成できた。まだ二十万円の借金もあるし、家賃は毎月三万円必要だが、「やればできる」という自信は大きく、「十年後は名実ともに自前の稽古場をつくらう」という決意をもっている。

久保田 今の苦勞の中で、代表者や主だったメンバーの腹をくくるといふか、「いざとなりや退職金をつぎ込んで」といった土性骨みないなものが、踏み台になっているわけですが、他方若い人たちにとってみたら、その決断についていいのかという不安もあったと思います。

四日市は下からのつきあげもあつたようですが、上野やすがおはいかがですか。

岡本 確かに稽古場を持ったあとの財政運営はいいか、という不安もあつたし、実際は会場問題で苦勞して、また、古いメンバーが核となつて話は進められた。しかし、一年余りたつた今、話し合いや活動を通じてみんなが実情を把握して劇団全体のものとなつてゐる。

増原 私は入団もおそく、代表の加藤たちが必死になつてゐたことを知らなかつたし、稽古場への願望も劇団歴の古い世代ほど切實ではなかつた。しかも建てた時のドラマチックな半年間を職場の都合で離れていたので、今でも心残りだ。

久保田 金というのは一般的には出ししづる傾向があるけれど、たとえば四日市の若い人たちが、自分たちでボーナス出資を決めたきつかけなど話してください。

笠原 やはり創造との関わりだ。『ゆき』のあと、いい舞台をつくるには、どうしても頼りになるいい稽古場、夜の九時半以降も使える場所がほしいという気持ちが強くなつた。現在の場所については、最初は反対だつたが、大家さんが、「十年契約なら自由

に改装していい」という条件で了解してくれたので気持ちが変わつた。

久保田 すがおが、桑名。演劇センターと位置づけて補正予算を組ませた。あるいは上野も同様センターと名づけて巾広く活動の場としている。そのあたりの実態というか、地元と結びついた活動はどうですか。

加藤 桑名にも色々文化団体はあるが、実質的にも人的にも続いてきたのはすがおのみだ。したがって、それ、わらび座がぐるぐるの事務局をどうする、労働や労音との地域での共同活動をやりたいが場所は……となると、すがおが柱となる必要があり、稽古場も最初からすがおのみという発想はなかつた。

しかし、最終的に建設したが、辺びなところなので目的とした文化センター的役割には問題も多いが、この地域のセンターにならうという思いがある。

森 すがおの稽古場をみたとき、私たちは便利な場所に持ちたいとおもつた。文化センターとは名づけてないが、稽古場のある北浜町のクリスマス会など企画して五、六十人の子供たちが集まり、とても喜ばれてゐる。

は、照明器具等の道具貸し、メイク指導、仕込み援助等々、常客もできてきたので一層広げていきたい。

それから子供劇場や、近所の琴の演奏など、センターの利用もふえてゐる。但し、いわゆる一般の貸会場的なことになると、常に貸すための会場整理問題がでて、稽古へのマイナス面もあるので、劇団が主体的にかかわれる仕事を通じて役割を果たしていこうと思つてゐる。

久保田 劇団の変化という面から、四日市どうですか。

林 稽古場の管理も当番制にしたため、当番になると早く来て掃除し、戸締りもする、そんな中でみんなの稽古場を大切にしていこうという目算を持ちつつあるし、劇団員どうしの交流も深くできるようになつた。

森 稽古終つてから、喫茶店へも行かなくなつた。

林 そうだね、稽古場に酒もあるし——。

加藤 すがおの場合、辺びなということもあつて、先程石垣や増原の言うデ・メリットもあるが、マイカーの活用などで補えない、事務局の仕事もふくめて前進している。

ただ、地元の若者たちをどうつかむかが

自治体の援助はあてになつたが、かわりに、むこう十年間、無条件で毎月千円ずつカンパしてくれる人が二十人になつた。劇団全体も、そういう仲間をふやしていこうという気運だ。

杉森 上野で色々な文化行事が組まれながら、センターとして働く機能がなかつた。だから、私たちの便利なスペースを確保したら運動が広がるという思いもこめて文化センターと位置づけた。

今では労働、労音の連絡会や青年の学習会にも使われ、利用する側の喜びとともに、劇団の貴重な財政活動にもなつてゐる。その典形は、一昨年建ててすぐ、『狐とぶどう』の公演をしたとき、丁度、わらび座がきて、演劇センターを事務局にして多くの団体が結果する時期と重なり、劇団の公演の制作にもプラスとなつたり、全体へも認識してもらふことができた。

久保田 色々建ててる苦勞から、建設後のメリットが出つつありますが、次へ話をすすめる前に一言、建設する踏ん切りどころは、結局「やろろ／＼」といったことですか。

加藤 そうだね、「何でも建てよう／＼」という気持。拠点を持つのは自分だ、拠点を核

一つの課題といえる。日曜日の音楽団体使用などはじめたが。

杉森 稽古場を持ったことでのプラス面は、創造活動が日常的になつたこと、研究生教育が定着して、三人、五人と劇団員がふえてきていること、そして、ジブシーでなくなったので東リ演や三劇協などの事務処理がスムーズにできるようになつたことだ。

岡本 杉森もいったように、劇団や劇団員の主体的サイクルで創造ができるようになったのが大きい。たとえば、稽古日以外も集まつて日常的な仕事もできるし、劇団の団結も強まってきた。

森 「戦中派」のとき、百二十時間稽古目標で、八十時間しかとれず、不十分なまま幕開きを迎えた無念さがあるが、これからは特訓稽古もできるし、合宿もできる。稽古の量を拡大できる魅力は大きい。

久保田 「創造が日常化した」という言葉でプラス面が端的に示されていますが、経営、制作面へはねかえりをもう少し出してもらえませんか。

岡本 家賃だけで、年間八十万円の出費だがみんなは団費の値上げをせず、公演の収益などで保障していこうとがんばつてゐる。

に運動を進めるのは自分たちだという姿勢かな。

杉森 それと、集団の団結が保証（条件）となる。腹をくくるとき、つい、「こいつは続けていくかな」と、顔色をうかがつてしまつた。

久保田 稽古場を建てたデ・メリットはありませんか。

石垣 遠いという問題はありますね。

増原 遠くから駆けつけて、三十分位いるとハイ稽古は終り／＼という残念さね。そして帰宅するともう十一時——。

森 創作劇（『戦中派』）を上演しよう、研究生制度を開設しようという二つの課題を達成し、そのエネルギーが稽古場をもつところまでいった。

久保田 どうやら、きつかけは、すがおの「やろろ／＼」であつたり、上野の「団結」であつたり、四日市の「創造へのエネルギー」であつたり、そしてそれらがかみ合った情熱だろつといえそうですが、稽古場を建てた後の集団の変化、展望といったところへ話を進めたいと思います。

加藤 センターとして、今までも努力してきて、これからも果たしていく課題の一つ

創造を高めるとともに。財政も経営もという姿勢が強くなってきた。

加藤 会計は四本柱の独立採算制とし、それが競合し、また助け合っている。財政基盤は、基本的には公演活動と、他への援助活動しかないもので、これからも人形劇の講習会や、高校生の演劇研究講座も企画していきたい。そんな中で、地元の連合自治会も助成を考へつつある。

久保田 色々運動の広がりができていますが、おわりに今後の展望をまとめてどうぞ。

笠原 ほんとに自前の稽古場を十年後に確保したい。

林 同じく。そのためにがんばりたい。

石垣 大人用の、創作小劇場をやりたい。また、物置など拡充して、セットや衣裳、小道具など集約したい。

加藤 創作小劇場をやるためには、桑名の中心部からも観にくる人をつくっていく必要がある。だから、いつかもっと便利などころへ、もっと広い小劇場(稽古場)を持ちたい。

森 そうなれば、すがおと四日市の合同稽古、合同公演も可能になる。

杉森 この一年は財政的にも試練の年だが、

それをのりこえたら、近い将来、三階をぶち抜き、小劇場をつくりたい。そこで創作劇を上演したり、更に移動公演など活発に広げて、名実ともに市民権を得る劇団にしていきたい。

森 難かしいと思っていた三つの夢がまたたく間に実現したので、これからは、仲間をふやすことと、いい舞台をつくることに専念したい。

久保田 色々話は尽きませんが、稽古場は持ったあと、それを守ろうという姿勢になりがちで、気がせまくなる面もあるわけですが、**すがお**のように、次はもっと広い稽古場を、と展望をもっている人ではないかと思えます。

次へつぎへ打って出よう、よりいい舞台をつくろうという心強い発言がでたところで終りたいと思います。どうも雪の中、また多忙なところ御苦労さまでした。

かつては、そして今もだろうが、たくさん難問をかかえた三重の三劇団が、それぞれ大変な努力で稽古場を持ち、いい舞台を多くの人へと必死にがんばっている……、それは

感動であり、ともすれば惰性におちいりがる私への、私たちへの励ましでもある。寒風の中、三劇協の理事会を引続き行なうすがおの真新しい稽古場に別れを告げた。

追記——その帰途、すぐ名古屋へ帰る久保田氏と別れて、私は森さんに案内してもらい四日市の新稽古場を訪れた。

古家を改装したその木の香りにみんなの突貫仕事を思い、若い劇団の人たちの心暖まるもてなしに、苦節十六年の森さんを核とした四日市の明かるいこれからの思った。

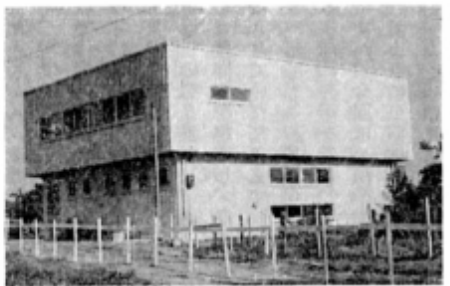
酔うほどに去来する今までの苦勞や「河」への熱意を語り続ける森さんの瞳にひかた涙を、私は忘れることができない。

泊めていただいた翌朝、四日市の空は晴れだった。帰路、通りすぎる桑名も、名古屋も、そしておそらく上野も——その日は寒波が和らいで、暖かく、吹く風もやさしかった。



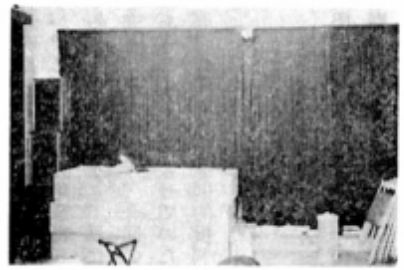
劇団四日市

建築面積 1F 80㎡
2F 35㎡
(内稽古場有効面積40㎡)
改装費 80万円(人件費別)
家賃 3万円/月



劇団すがお

敷地面積 370㎡
建築面積 82㎡
(総工費 640万円)



劇団上野市民劇場

部屋面積 44㎡
稽古場 37㎡
事務室他 7㎡
改装費} 150万円
権利金}
家賃 55,000円/月

上演権・著作権をめぐる……

著作権（上演権）を守ることの大切さ

劇団名芸の「若者たち」無届け公演
準備の経過と反省にたつて——

劇団名芸運営委員会

私たちが劇団名芸は、去る七七年十二月一日と四日、第十五回公演として「若者たち」（山内久、相沢嘉久治、堀口始作）を上演致しましたが、その過程で代表著作権者の堀口始氏と青年劇場に対して、無届けで公演体制に入るといふ基本的で重要な誤りを冒しましたので、ここに概要と反省の意を表明し、あわせて兄弟劇団どうし、著作権を尊重し、必ず守るようアッピールさせていただきます。

劇団名芸は、去る七一年にも「若者たち」を取り上げ、その時は事前に許可を受け、上演料も支払ったわけですが、今回は公演準備期間が少なく、追われるように公演体制に入るといふ劇団側の一方的事情により、前回許可を得たことに甘え、結果、公演日直前

に青年劇場より指摘を受けた次第です。

直ちに運営委員会と全体会議で討議し、青年劇場にお詫言をするともに、改めて許可依頼を提出し、最終的に配慮ある許可をいただき、公演も無事終了することができました。著作権の尊重については、すでに「演劇会議」誌上でも再三、再四訴えられています。私たちが創造者が基本的に守るべき権利であり、自由と民主主義の根元にかかわることもあります。この重要な権利の侵害は、いかなる理由があろうと許されるものではありません。劇団として、運営委員会を先頭に、著作権に対する甘い姿勢と認識不足があったことを深く反省するとともに、今後学習を深めて二度とこういふ誤りを冒さないよう内外に誓うものです。東り演の兄弟劇団である青年劇場をはじめ、運営委員会並びに仲間劇団の連帯と信頼を傷つけたことを深くふかくお詫言申し上げます。

本件につきましては去る一月十四・十五日

の問題をいま一度考えあう必要があると思いましたが、絶えず問題が起るからです。

作家の創造の自由のためには、言論表現の自由という政治的保証が必要なのはいう迄もありませんが、自分の著作物に対する完全な管理支配権が必要です。今日この権利は著作権として法律で保護されています。この権利基礎は自分の著作物から生れる利益がすべてその著作物の所有になることを基礎としており、作家が職業として、作業にふさわしい生活を保証するものとして、芸術の分野だけでなく、科学の分野の人びとも含め、著作権の確立は学術文化の発展に大きな役割を果たしています。法治社会で著作権が法律で保護されていないとすれば、今日のように文化産業の発達した社会では、誰でも簡単に他人の著作物を手に入れ無断で増刷（海賊版）、改作、（全部又は一部）盗用、脚色、舞台化、映画化、テレビ、ラジオにのせることもできます。つまり、著作者は自分が反対でも、また、知らないうちに、他人が自分の著作物を勝手に使って有形無形の利益を得、本人は何の報酬も受けとることができないという社会的不正が起り、作家は著作で生活することができず、書く意欲を失ない、よい芸術作品

が生れる筈はなく、新人作家が出にくくなります。このような場合、作家が自分の権利に対する不法な侵害に対して対抗措置をとるのは当然で必要なことです。今の著作権法はまだ不十分ですが、右のような社会的不正を抑え、作家の創造と自由を守る法律的な保証となっています。

いま、私たちは俳優の生活権、著作隣接権、二次使用にあたっての請求権の確立、劇団としての創造、普及の自由と権利（事実上は制限されている）、その社会的物質的な保証の実現をめざしてたたかっています。この点で東り演では意志統一されており、これらの権利斗争は著作権とも合わせて、私たちの自由と民主主義のためのたまたかの重要な一部分で、東り演の誰ひとり異存のない所です。従って、私たちにに対して右のような権利に対する侵害があれば、それは私達東り演の連帯に対する不法攻撃であり、このような侵害行為者が私達の友人だとすれば、それは「自殺行為」と言わねばなりません。

2 多発する類似の行為

著作権の侵害は、無断上演をはじめ、様々な問題が絶えず起っています。戯曲の無断改変、添削、著作権料の値引き要求や未払。

の運営委員会においても話し合われ、全体に著作権を厳しく守ることが再確認されておりますが、必ず事前に許可を得、事後に公演総括を報告することにより、私たちの創造の連帯を守り、高めるよう、今回の反省の上でここにあらためて訴えさせていただきます。高、青年劇場の原則的批判とあたたかい配慮（上演許可）に厚く御礼申し上げます。

劇団名芸上演「若者たち」の著作権問題

問題をめぐっての感想

秋田雨雀・土方与志記念

青年劇場 大阪 隆 一

劇団名芸が青年劇場に無断で「若者たち」を上演しようとした問題については名芸のコメントが本誌に発表されましたが、私は青年劇場常任運営委員会の指示により、この問題の処理に当たった実務担当者として、平素感じていたこともあわせて報告させていただきます。

1 基本的なこと

私は今回の問題を、東り演の各劇団に共通の、演劇行動の基礎理念である「自由と民主主義」の根本にかかわる問題として、著作権

恐らく無自覚的に、公然、平然と行なわれている著作権の侵害があります。公演のポスター、ちらし、パンフレット、ニュース等を作る時の問題です。第一は、絵画、書き文字、写真等の意匠の無断使用、改変、変色、文章の無断転載—美術家、デザイナー、写真家、執筆者の著作権に対する侵害です。

第二に右のような問題を避けるためやその他の理由で、上演劇団や鑑賞団体が独自に宣材をつくる場合です。その意匠や文章が著作者の意匠やイメージに反し、或はその人格や名誉を傷つけるようなことがあれば、著作者の人格権に対する侵害です。宣材の内容、形式も作品同様作家の人格表現の一部と考えられるからです。十分に著作権関係者の了解をとり、必要な二次使用料等を支払うべきです。

3 上演料について

劇団名芸との交渉の中で、今回の名芸のように演劇の処女地に進出しての小ホール・小規模公演を推進して行く上で、現行の最低限の料金でも公演財政の赤字は避けられないが、何とか考えられないかという問題がありました。

これまでも上演料の値引き要求は、絶えず起っており、執拗なものです。その理由とし

ては、Aははじめから、(ノ)正規の上演料では成立しない予算。B観客数が目標に達せず赤字となった。C同じ仲間ではないか(ノ)D養成所の試演だから、卒公だから、等々です。

私たちは東リ演運管委員会、日本演劇協会にも何度も問合せ確認しましたが、私たちが基準としている日本演劇協会の公共上演料金は、客席数・公演収支等に関係なく、アマチュア料金の最低限度として無条件なものです。上演料は上演許可の条件であって、許可あり次第直ちに支払うべきものです(そういう劇団は稀です)。

尚、劇団名芸は、非常な困難を克服して上演料及びその他の経費を全額支払済であることを付記して終了。

くり返したくないあやまち

黒沢 参吉

戯曲の上演権をめぐるトラブルが、このところいくつかおこっている。「若者たち」のそれはそのいくつかのひとつであって、例外中の例外というわけではない。

(1)劇団は演劇活動の中で戯曲がいかに大切なものかを、最もよく知っている筈なのだから、劇作家のもつ著作権、上演権を十二分に尊重しなければならぬ。今日の日本で劇作は、最も酬いのすくない仕事であり、そこへシワよせを集中するならば、すぐれたドラマの再生産は不可能になるだろう。

(2)無断上演をはじめとする劇作家への尊敬を欠いた劇団の行爲は、それが悪意のない不注意不用意のものであっても、劇団の作風に悪影響をおよぼす。劇団が選定した戯曲は、少くともその活動期の「顔」であり、内外の敬愛が作品に集中してこそよい積古、すぐれた上演が約束される。戯曲の軽視は、天に唾するにひとしい。

(3)上演権の問題を上演料支払の問題と短絡させて済ませる傾向がある。上演料を払えばいいのだ、という考えは作者に対して非礼である。また、上演料そのものについても例えば日本演劇協会の「入場料千円以下、上演九十分以内のもの」「一万円以上」の定めは、一万円ポッキリでOKということではない。同時に、日本演劇協会の一応の目安であるこの規定に拘束されない劇作家も多い。基本は、劇作家と劇団の合意によることを忘れてはならない。

劇評

演技が問題?

——中部ブロック77年後半の上演から——

丸子 礼 二

(一)

「創造委員」という空恐ろしい肩書きをぶら下げている以上、何とかして中部九劇団の公演だけは全部観劇させてもらおうと願っているのだが、なかなか出来ない。今度も岡崎演集の舞台を見ることが出来なかった。自分が役者で出ている名古屋演集のとあわせて、二つについては劇団名古屋の久保田明氏に依頼した。紙数の関係で彼の丁寧な批評を全部紹介できないことをお詫びしておく。

9月から1月までの上演は以下の通りである。

- 名古屋演劇集団 9/21・22 於愛知県中小企業センターホール 寺島アキ子作 若尾正也演出「かあちゃん達の明日」
- 劇団四日市(旧四日市市民劇場) 10/16 於四日市市民ホール 10/28・11/20 於北部公民館 多田徹作 山本淳子演出「陽気な

「ハンス」 10/30 市文化祭フェスティバル 森賢郎作・演出「緑よ水よ空よわがふるさとよ」

上野市民劇場 三重新劇合同公演77(劇団津演と合同) 11/11 於上野市産業会館ホール 11/19 於三重県文化会館(津市) ゴリキー作 安井侑子訳 杉森正美演出「小市民」

劇団はぐるま 岐阜労働創立10周年記念共同企画例会 11/18・19 於岐阜市民会館 こばやしひろし作 こばやしひろし・松岡直太郎演出「かわいた湿地」

岡崎演劇集団 11/27 於岡崎労働会館 丘橋作 梁夢海訳 浅井克彦演出「三家福」 12/18 於岡崎商工会議所ホール アラルコ作 浅井克彦演出「三角帽子」

劇団名芸 12/1~4 於南図書館ホール 山内久・相沢嘉久治・堀口始作 柘植洋演出「若者たち」

(4)「若者たち」にかかわって表面化した今回のトラブルは、それ自体不幸なことだったが、その後の双方の劇団の努力によって原則的な解決をみるとともに、東リ演全体にもこの問題の正しいあり方を示唆した。教訓をいかして、こういう誤ちをくりかえさぬよう、全体の認識をふかめよう。

さて、いくつかのトラブルの根っこを考えると、創造の思想の鈍化—風化が感じられる。ごく単純な言い方だが、戯曲を選定するとき、多くの劇団は単行本や雑誌や台本の活字で作品を読む。既に書かれ、読まれ、上演された戯曲でそれはある。しかし、はたしてどうか。劇団が、これがやりたい、何をかいてもこれをやるのだ、と決めた時、その戯曲はわが劇団のために書かれた作品ではないのだろうか。

そうであるなら、作者に上演許可をもとめ、上演料を支払い、積古のプロセス、上演の結果を知らせる等々の行爲が、単なる事務処理ではなくなる筈だ。劇団にあっては、一つの事務処理といえども、創造活動の外にはない。その理解が、劇団と劇作家との望ましい関係をつくる土台であろう。

劇団名古屋 創立20周年記念公演NO2 しかたしん作 久保田明演出「日本の青春— ……桑名の劇団すがおは地元職業俳優の催した「ペンギン座」公演に協力出演。又、名古屋の劇団つむぎ座は公演がなかった。

各劇団の移動公演、特に演集、はぐるま、すがお等について触れられないのは残念だが止むを得ない。移動をぬきにして創造は語れないのだが……。

(二)

「ここ数年、整っていても、どこか隙間を感じさせたが、今度はピンと張りつめたアンサンブル、さすがである。装置等も手抜きというもののない気持ちのいい舞台だった」久保田明は演集の「かあちゃん達の明日」を一応評価してから、「秋田のかあちゃん達のやり切れなさを描き方について、出隊ぎによる夫の浮気、妻の不貞、出隊ぎしない家の貧困、親子の断絶等々ひとつも見逃さず、農村問題がバックされている感じがする。そしてかあちゃんの一人であるサロが、夫の愛人を殺し自殺してしまうという悲劇があり、それと前後していくつかの問題が解決して行く。

何か一人の死がとりかえしのつかない事と受け取められていない。舞台の整いと同時に矛盾までが整いすぎている。明日がこんな事で明けて来るのだろうか。演集にも多くいるかあちゃん達による、男の論理とは違う、筋書き通りではないあれこれ思い切りからませた舞台が見たい」と注文をつけていた。

(三)

演集の場合も女優陣が強いのだが、「かわいた湿地」に見るはぐるまの舞台にも多少その感があった。汲田正子の厚みのある演技に対して、なみ吾郎、三島幸司らはぐるまの第一線のメンバーも、大変軽く見えてしまう。朝鮮人河村(なみ)と日本人康子(汲田)、その子と夫(青木茂)の一家の物語というより、一人の女性の歩いた道を描いた芝居に見えて来る。まじめであるが故に日本の朝鮮人擲取の先手として使われてしまう河村の苦惱も、もう一つ浮かび上って来ない。しかし、全体的には「かわいた湿地」は見ごたえがあり、はぐるまの力量をうなづかせるものがあった。

現代の日本人にとって朝鮮の問題は、戦争の危機から日常の生き方まで、見のがし出来ないこと、難しさと大切さをも一度つかみ直して欲しいと思つた。

逆な意味のことが、幕末の時代を、特に江川太郎左衛門の技術者としての生き方を描いた劇団名古屋の「日本の青春」の舞台で痛感された。前回「金冠のイエス」で盛上った集団演技を見せた彼等が、和服を着、刀をあつかい、となるとまるでガタガタなのである。立ち姿一つサマにならない。武家の娘が、師と対話する時、立ちん棒で、両手をだらりと下げたまゝといった不なれさが随所に見られ、芝居全体を歪にしようとする。暗転にならないうちに道具を片づけてしまう初心以下のミスもいくつもあつた。上手、下手に和服ではとても歩いて昇降できない高さの階段がある。これは、装置担当者の不勉強。見ていて気の毒になつてしまつた。

しかたしんの技術の天才が武器として使われしか使われない根底は、という問いかけは、興味深かったが、遠山金四郎、高野長英、渡辺華山、斎藤弥九郎という登場人物では、劇団の力量をオーバしてしまつたのでは、ないか。

失敗は成功の因、これにこりてがんばって

ないことをひしひしと感じさせた。むしろ、それだけに、北鮮へ帰ることによって康子と河村父子をふくめたこのドラマの問題が解決される幕切れが現在の私達としては一寸スリヤリしないのである。尚、今回の装置照明ははぐるまのこれ迄の水準から見ると少々雑な様に感じられた。

(四)

上野と津―距離約50km、車で一時間以上この空間と時間の壁を越えて三重県二つの劇団がつくり上げた合同公演。大変な努力でもあり、素晴らしいバイタリテイの結果でもある。プログラムに並んだ写真の若々しい顔、顔、顔。しかし、その若さ故のプラスマイナスふくめて生かし切るには、ゴリキーの「小市民」はやはり荷が重すぎたレパートリーではなかつたか。いざけい古に入ってから演出杉森正美の苦勞は想像に余りある。私は津市での公演を見た。会場の広すぎるせいもあるだろうが、第一幕が終つた時、客席では「全然わからん」という声がかなり聞かれた。古い生き方にしがみつき、若者達に捨てられる小市民ベッセミョーノフの内心の苦悩から外面の行動、そして重要な扮装の方法

欲しい。

岡崎の「三角帽子」について久保田明からは「大らかにレジスタンスをうたい上げる程、はずんでいない。装置、衣裳の努力にうなづいて、演技がもう一つ。ルーカスの軽妙さ、フラスキーターの豊かさが出る力量がない。」と、又、観客の少かつた「せい」も指摘があつた。

四日市の北部公民館で、地元の文化団体共催の交流会。「陽気なハンス」は集まっている人達には一応楽しんで見てもらつていた。劇団四日市の活動ぶりには好感が持てた。しかし、脚本のもっている面白さの何分の一も出ていない。又、発声、演技の工夫も不十分である。随所で、面白い所をそのまま通りぬけてしまつている。まだこなれていない、もつと何度も上演と研究を重ねて、手持ちレバとして生かすべきだろう。

(五)

数年間見て歩いて痛感していることは、中部全体として、俳優の演技が一向によくならないという事である。下手は下手なり、上手

まであるいは鉄道の機関士で、彼の養い子でもあるニールの情熱と未来へ向けての確信をどう具体的に表現するか、その他多くの役について、理解と具体化する力が不足したまま、で終つてしまつていて私は感じた。しかし、タチャーナ(中島智子)ボリーナ(竹村敬子)等ここでも若手女優陣の着実につくられた演技がわづかに救いだつた。この合同公演に働いた多数の若者達の意欲を生かせる企画を、次の機会にこそ考えて欲しいものである。

(六)

全国的にやられている割には、「若者たち」という芝居はわかりにくい芝居である。長男太郎の形象化が難しいのだ。彼の生立ちの苦勞、一本気な性格、彼に來たおせい春とその挫折、これらがよほど丁寧に描き出されないとけんかばかりしてゐる一家になつてしまふ。名芸の舞台も、栗木英章が熱演してしたが、彼にとつてもかなり困難な仕事だつたようであり、他の役者の層のうすさもあつて、主題曲まで作り直した努力がどうにもみられない。この所、シェークスピアや文七元結等やって來た名芸の俳優陣は、自然な演

は上手なりにそれぞれ発展、成長、あるいは飛躍があり、それが舞台上に花咲くのを見せてもらつてこそ、観客にもよろこびがあるのだ。

下手がいつまでも下手のまま、上手がいつまでも横ばいで、年数が古くなるにつれ経験主義にこりかたまる傾向が、まだ若い俳優の演じぶりにもうすで見られる時、私はどうにもやり切れなくなる。時には、ほんの数例、身体が熱くなるような演技に出会つた。だが、大部分は……、かなり古い人でも、発声、イントネーションが出来ていない人がかなり居る。セリフを口のうえでとなえるだけ、気分だけで、役をこなす内面を作らない役者は更に多い。怠慢なのではなく、どうしたら「勉強」になるのかわからないのだから。演劇に生活と情熱を打ちこんでいるはずなのにである。立派な上演の思想も、舞台の演技がよくなければどうしようもない。執念を感じさせる俳優は目下の所中部プロダクション全体として大変少ない。

本当に、何とかしないと……。

「黄金の海を見ていた」

— 京都自立劇団協議会合同公演 —

福 島 春 雄
(京都労働)

昭和五三年二月の京都府文化芸術劇場は京都自立劇団協議会の合同公演でした。演目は芳地隆介作、近藤公一演出『黄金の海を見ていた』。

この公演を主催したのは勿論『京都自協』ですが、ほかに主催者として京都府、後援者として京都労働が名をつらねていました。

現在の京都自協は五つの集団——『全通演劇サークル協議会』『劇団「橋」』『京都府庁演劇サークル』『劇団・自立の会』『劇団コスモス』によって構成されておりますが、公演には自協以外の集団も参加しました。パシフレットには次の名が協力団体としてあげられています。『京都演劇教室』『京都労働グループ』『池ノ坊女子短大演劇部』『立命館大演劇グループ』『マイナーシアター』『京都府文化事業団』。

この文章の筆者は京都労働の一会員でありまた、全通の平組会員であります。全通演

劇サークル協議会とは無関係です。つまり筆者は芝居をしたことがないのです。従って、演劇における演出や演技の巧拙をのべる能力を全くもたず、ここでは、芝居によってあるいは出演した俳優にかかわって、筆者が如何なる剣戟を受けたかを述べるに留まりません。この文章は『演劇』そのものを語るのではなく、演劇との極めて私的な、しかも誤解に満ちたかわりを語るものです。お許しくださいたいと存じます。

筆者が自協演劇を見るたのしみのひとつは役者が日常の彼あるいは彼女と比較してどれほど魅力的になったかを觀賞し、確認し、ひとときその舞台の上の彼あるいは彼女とつきあうことにあります。彼あるいは彼女がひごるより一段と人間的になり、彼の総体が実力相当に舞台に出た時、あるいは今まで彼の人間柄と想っていた範囲外の、例えば「するどい」「たくましい」「説得力のある」人柄が舞台

の彼や彼女に見えた時、私はその舞台を見てよかったです。

「黄金の海……」の場合、たとえば一人の彼は、いつもオンチャレでフアッシュヨナブルでなかなかの伊達者です。声にも低音の魅力があります。その彼が弊衣にぼろがき、ひげもちやの「浮浪者」、しかもカン高い声で舞台を生きているのです。そしていつもと違った口調で、いつもは決して見せない表情で、自からの心の生き方を演じているのです。彼は実は公務員であって舞台の上だけの浮浪者であります。私は舞台上に彼本来の人格を見ることが、私は彼は浮浪者であって、公務員は世をしのぶ仮の姿ではないかと、——幕がおりてからも浮浪者の彼であつたらどんなに素晴らしいかと私はフト思ふのです。

次に例えば、いつもは瞳の魅力的な彼女は常に論理的で、意思的で、安定し落着いた女性です。でも舞台の彼女はそのヒトミだけでなく姿と顔——体全体が天照大神のように輝いています。彼女はセミ、セミ、スードなのです。そして日常の彼女とは異なつた、しかも彼女が素質としては確実に秘めている青っぽくて初い初い少女の内部を、あたかもジャンヌ・ダルクの如く、不用意なほど美しく耐えがたくアコギなのです。今の世が所有したい劇的感性を必要に促しハツラツと展開するには、このような人物の登場が必然だったのです。彼等二人が舞台にあらわれ、過去をいづくし、現代をたいつつ極めて古典的な作法で演劇恢復を企てた時、私は身を乗り出しました。彼等二人がいる限りこの世はタイクツしないと云うたのしい予感が私を勇気づけたのです。この二人の働かざり一九七八年が影をおとす舞台空間にナチと佐渡がおしかけ同居しても——江戸時代と第三帝国が対立抗争してもすぐれて同世代的だと思つたのです。

最後に蛇尾をつけ加えます。伝え聞くとこの上演当日を含めて数日間以上演出家が不在であつたそうです。でも自協の彼等はアクシデントを統御しようと思われまふ。劇的行動は常に期的当為を用意していても言うべきなのでしょう。

かくて、観劇は大満足のうちに終わりました。私は今スタッフとキャストに敬意をこめてお礼がしたいのです。自協さんご苦労様でした。さらに爪をとき力をたくわえて再び三たび観客の前で羽撃いてください。

く表現します。日頃、かいまみることが出来ない女の魔性と美をひととき俳優になつた彼女をたぐつて私は始めて知ることが出来るのです。翌日ある会合での彼女はすでに昨日の彼女ではありません。落着いて、しつとりした現代女性でした。あの日の彼女はマボロシであつたのでしょうか。

自協演劇を見る第二のたのしみは、ひごる私にとって不透明な部分——もやもやして不気味にしか思ふことが出来ない側面に、自協の世界がかなり強烈な光をあててくれることです。度のあつたメガネをかけるように、ガラスの汚れをふきとるように、目のうるこが落ちるのです。『黄金の島……』でも書ききれないほどの、そのようなテーマの提示がなされました。ひとつだけあげてみます。第四場「船の中の殺人」です。この場面は人買商人が一人の善意の男を殺す話ですが、そこでは現代におけるいわれなき暴力の本質を明晰に劇化しています。よく管理者や第二組員が労働者によって暴力行為を受けた話が伝えられますが、この舞台はヒトのよい男の『暴力』を客観的には否暴力をきつかけにして殺戮的の反撃に転ずる管理者側の論理と心理、さらには非倫理的で反社会的なカラクリ

を衝撃と共に観客のものにします。演説や評論や小説や劇評などからでは決して共有することの出来ない根元的で感傷的ときえ言えるおもしこみを私は舞台の外なる観客席でだいでしまつたのです。

自協演劇第三のたのしみは「戦場」演劇、「労働者」演劇と云う一面特異な意を通した普遍性を見つけることです。今、京都人の、私。と云う労働者は時代と地域と階級と能力の制約を受けておりますが、それでも過去と未来、東と西の一点に生きる普通の人間として万同的にわが歴史のなかに存在したいのです。その全体性への欲求が「黄金の島……」のドラマブルギーと重なって、私はトータル人間の生誕を見たのです。流れ者（浮浪者）がそれでした。

かつて芳地隆介さんは死者にも労働させることによつて体制的時空の抑圧をはねかえしました。「黄金の島……」における流れ者（浮浪者）はSF的と言つていいほどカッコよく神出鬼没なのです。彼等は時代をこえ、国家にとらわれません。頭には超モダンハット。足には草鞋。彼等は時にオルグのようです。でもいつかは組織ハカイ者に似て孤独なのです。ある日は限りなくやさしく、ある瞬間は

口説で見せた鮫川忠助

— 劇団京芸「見知らぬ人」 —

萩 坂 桃 彦

この頃、真船豊のものの上演を見かけるようになった。全部を見ていないので一概には云えないが、そのスタイルは、可成、思い思いなのではないかとおもう。テーマのとり方や役の解釈にしてもまちまちのようだ。

「いたち」などは、あの作品からそんなにハミ出られるとは思えないが、それにしてもこの戯曲が慧星の如くにしてあらわれた昭和九年の頃の、鮮烈な、セリフの魅力はいまや再現すべくもないとすると、そこをどう押さえるか。

「裸の町」もある劇団で見たが、金貨と無力なインテリ夫婦の対比は、昭和十一年頃を背景とした抜き差しならぬ関係のものとして感じさせるには無理があった。

真船の、その名を高からしめた作品は、ほぼ「いたち」を発足として、その後の二、三年の間の作品に尽きるけれど、この時期にあ

らわれた奔流のような一種の生命力。それには意味があったのである。その押え方で、こんにち上演の様相もちがってくると思う。永平和雄氏に「真船豊—求道者の戯曲」という評論がある。「人間喜劇」から「人情喜劇」に変質していった真船戯曲の分析には、多く、ぼくは教えられたが、逆に、こうした視点が、こんにち真船上演の手だての入口になるかもしれないと思えて来たりする。

前置きが長くなったが、実はこれは、劇団京芸「見知らぬ人」の鹿村家の長男良之（大木路郎）にからめて、まず、ぼくは云いたがっている。

一家倒産も意に介せず、酒に溺れていて、甘やかされ放題の坊ちゃん育ちのダメな青年という風に、ほぼ舞台では見てとれる。セリフ言ってもそのように観がっているし、酔態の

間」に憧れた。忠助を見つけた良行がそれだった。という風に、ぼくなどはどうしても見してしまう。

鹿村一家の構成を喜劇仕立てにするのは当を得ている。しかし、それは鹿村夫人（早見栄子）をあのように固定させたらえ方、また、自己の経営するタイプライター速成学校が、父の汚名の影響で破滅の淵に類している娘の曉子（加藤小夜子）をそれに張合う型として据えてみせた演出（川崎裕之）は、因循に過ぎた。ナチュラリズムを排除した意図はわかるにしても、人物の心理に必要なフレッタシンビリティまでを殺す必要はない。

鹿村夫人の早見栄子さんは、ぼくも「ひやごたんの軒」で初見していて、京都弁の日常生活のこなれた役者だったが、こんどのように、どこか歌舞伎、新派を思わせる声音の張り方は動きをいたずらに堅くするのである。だから、殆んど分裂症ともいえる、巨大財閥未亡人の支離滅裂さが、人間のおもしろさとしてコンパクトに出てこない。

この鹿村夫人の規定に見られるように、しかし、京芸の「見知らぬ人」には、先ず演出があったということになる。一緒に見た黒沢

氏も、それには、興味深いと洩らす。

結局、演出の一種の押しのようなものでどこか納得させられたが、芝居のふくらみでひとつの説得力をもったとすれば、当然これも演出もかかわったであろう鮫川忠助（藤沢薫）の潤滑な役づくりが寄与している。

ぼくは「東野英治郎」の「忠助」を見ていたので二重写しになって困ったが、逆に云えば、わが薫さんも、この役では独演三昧境を見せてくれたといえそうである。そういうことで東野英治郎を云えば、枯淡、渋味、飄逸酒脱、言ひ様のないうまさであったが、忠助にまつわった現代的飄刺とベーススは当然演出者（千田是也）の眼を通してのものだった。

京芸の忠助はむしろ、語り、口説きで見せる。鹿村邸乗込みの第一幕。権内とお民を相手に独演する有名な日刺の場。黒谷重蔵と対決の第三幕。終幕、忠助煙滅のサワリ。薫さんはなかなか上手い。惜しい哉、貌が忠助に似つかず、童顔の愛らしさが、紙屑探求者、陋巷の猥雑さを遮るのである。

権内とお民のリアリティをどう描くかは興

演じ方もそうである。しかし、それが円滑であればあるだけ、ぼくは違うと思った。

良行は生得ダメなのではなくて、彼は敗残者なのである。かつてエリートだった矜りも目的も崩れ去った落伍者なのだ。このきびしい淋しさが彼に宿らなければ意味をなさぬ。陋巷の強が者鮫川忠助が、時に良行にたじろぐのはそのためである。

良行が滑稽に見えるのは、彼の酔態やおどけたしぐさのためではない。何もかも百も承知で陥ちこんでゆくインテリの自虐の哀れさである。彼の、画の才能は信じていいだろうと思う。無能な才能が自分の画いた絵（忠助の肖像）を破ることに執着するはずがないのである。

良行が陋巷の怪物鮫川忠助に驚嘆するのも「裸の町」の富久善光が金貨増山金作に魅せられるのも同じパターンである。

左翼運動に挫折した昭和初期のインテリゲンチヤは、日増しに兇暴化する、国家警察の圧力の前に、いわば壮大な転向劇を展開したのだった。彼らは行動を失った。無力感とニヒリズムが、戦争協力へのよび水のようにおしよせて来た。彼らは「実在感のある人

味ある課題だ。むしろ、こんにち観客に刺さってくる生活者はこのふたりである。

これにも演出の配慮があって、おろそかな仕事ではなかったと思うが、お民の、第二幕と第五幕の運びなどもうひとつ追ってこない。これも仕様のないことだが俳優座の中村たつには感服した。忠助に惚れているという点だけでも、紅燈の女の哀れさが息づいていた。

京芸の「見知らぬ人」は喜劇性を重厚な様式できめたかったようである。黒谷重蔵の退場の震えをかくした、或は表した膝がしらの震える摺り足など一見に値するが、それも絵づらとして客の眼を過ぎてゆく。

真船豊の上演は、こんにちやはり一定のむつかしさがあるようにぼくは思う。ひよわな役者、ひよわな演出では無理である。京芸はそれをどうにか免れた。



ヒロシマのモヒカン族

神 谷 量 平

私は今年の夏、広島へ行った。始めてではない。応召して宇品から大陸へ渡ったのは、一九三七年、今からざっと四十年前も前のことである。当時の広島は軍都と云われて、町全体が戦争で活気づいていたが、今はすっかり変わってしまった。ついた日は快晴でひどい暑さ、翌日は曇り、三日目は雨だった。無敵と知りつゝ、私は何か変っていないものをさがし求めたが、それは地形と海と空ばかりだった。期待はあと生存者しかない。三日目に私は原爆スラムで、やっと一人の男に出会った。年頃は六十三四、顔も手足もやせとがっていたが、髭つきは頑丈で、日々労働を売って生きてきた、また現在も生き続けていて、

今後も当分は続けるであろう、ぎりぎりの材料を残している形骸に見えた。黒いソフトは頂上の凹みも、此の区別もなくすっぽりとかぶり、よれよれのジャンパーと進駐軍の作業ズボンの、ポケットというポケットはふくれ上って、一切の日用品が入っているかと思われる。そして、左の腕に編組帯をかゝえ、右手に焼酎の樽を持っていた。傘はさしても、つぼめてもあまり布の部分には少なく、雨をよける役には立ちそうもないが、紳士の体面を汚さず、落ちてくるタバコの箱が空らかどうか、突っついて見たり、塵箱をかきわけてめぼしいものをさがし出したりする際には、結構役に立つかと思われる。

スラムは所謂労働市場で、大衆食堂や一杯のみ屋が軒をつらね、晴れた日にはさらに屋台が道いっぱいになり、おでん、煮込みの店を広げるが、その日はびしょびしょと雨が降り、またやみ、人も少なく、一層うらぶれた一角であった。私は誰に聞いたのでもないから、その男が生存者であるという確証はなかったが、私が四十年前に宇品を離れるとき、脱走をはかって忽ち捕えられ、衆人環視の中で無茶苦茶に殴打され、半殺しのめにあった兵隊によく似ていたので、何となく心に惹かれたことから始まる。その兵隊は全身クリカラ紋々の挿一つで、酒をくらって暴れまわっていたが、捕えられると「兄いにおわせてく

れ、一目でいゝから会わせてくれ」とわあわあ縛られたまま泣き叫んでいたことを今もおぼえている。親でもなく、妻子や恋人でもなく、重をかわしたゞけの兄貴分に会いたいという、その心根に痛く同情した私は、それからすっきりその兵隊が好きになり、輸送船の中で好きな酒をくみかわして仲よくしたものだ、上海へ着くと別れ別れになり、それっきりその後の生死はわからない。

しかし、その男はクリカラ紋々ではなかった。暴れまわってもいなかった。たゞひよっとして今生きていたら、一かどの親分になっているのではないか、という期待もあったのだらう、何となくその兵隊とその男が結びついてしまったのであって、理由は全くわからない。とりわけその男は決して親分的貫禄なぞありはしなかったから、余計理由がないわけである。たゞ、今はあいつだ、あいつに違いない、と固く信じはじめていた。その時、私はその男がコンクリートのせき板置場の中に、せき板を敷いて坐っているのを、通りをへだてた赤提灯の店から、始めて見た。何かしきりに通行人に呼びかけている様子だが、誰も聞いてはいない。酒を呑んで、うだうだと、またぶつぶつと、際限もなく世迷言

を云っている風景は、こうした連中の中にはよく見かけるものだが、見てみるとよくある例の陰々滅々たる感じがまるでなく、極めて淡々と、時々一人で笑っているのが心地よかった。私は勘定を払って外へ出て、さり気なく暫らく一角をひとまわりし、もとへ戻って、出来るだけ近くに、けれども決してまともな聴衆とはならず、ものかげからそっとその一言一句に聞き入った。そして、私はその内容に深くうたれた。それは私が始めて聞く一人の男の生きざまであり、言葉は野卑だが巧みずして一つの状況批評とうけとれた。

も、またその明るく日も来なかった。止むなく私は広島を去った。機会があったらもう一度訪ねたいと思いつながら、今日まで果せない。そこで私はうろおぼえながら、出来るだけ忠実にここに再現してみようと思う。そして、私はいよいよ「あいつだ」「あいつにきまってる」と固く信じるのである。

その男 わしやこれでも十五六年前は川上組の幹部じゃつてのう。嘘じや思うなら、これみんさい。この育なかの大きい刀疵が証拠じやい。昭和三十八年じやった。新天地で塚組の奴らに襲われての、こっちや二人、向うは三人じや、わしや郵便ポストを盾にしての、立看板をひっぱずしてふり廻したがの、向うの一人がドスもってたけん、逃げなあかん思っちゃるうち、仲間が七首を閃かして突っ込んで行きおったけんわしや素手で体当りじや、「こん外道」云うて二人ぶっしやげたがの、後ろからザツと斬られたんじや。えゝ年してこんな話するのは阿呆じやがの、まあ聞いてつかあさい。……こん広島、今は平和じやい。えゝ町になったもんじやい。じゃけど本まはようわかったらんのじや。早い話がこん

雨じゃい。こん広島で夏の雨じゃ云うても、思い出せる人がた何ほいんさるかの。おい、おどじや、おどに聞いとるんじや。幹じやの、傘なしでの、どうじゃい、今日の雨はぬくいじゃろ？ 何じゃと？ むしむししていやじゃ？ くそつたれめ！ おどりにやわかるまいがの、真夏のさ中ても骨の髄まで凍るような雨が降るんじやい。わかちよるか？ まっ黒な雨じゃ。こすつてもこすつても、一っぺんくっついたらとれっこのない、どろどろの黒い雨じゃ。イペリットちゆう毒瓦斯のは、舂にくつついて肉を腐らせるちゆうがの、そんななもんがくつついた思うたら、骨の髄まで凍りついたら、舂中がふるえるの。おい、傘なし、わかちよるか？ 今日の雨はぬくいど。この雲の上でお日さんがぬくめて、それから降り下さるんじや。お日さんほど有難いもんがどこにあるかの、太陽エネルギー、え、言葉じゃの。しやけど今は恐ろしい言葉になってしまふたがの。……しやけど本まは暑いわ。むしむしするわい。あばれたくなるのはこんな時じや。天満屋前であばれたのも、こんな暑い日じやつたがの。その日はわし

やドスもって、こうして走つたの。舂ごとぶつつけざまにドスで叩くんじや。空を斬ると、ふん込んで突くんじや。そしてチラッと頭をかすめるんじや。くたばれ、外道！ あの日おどは死んだんじや。おどばかりじやない、みんな死んだんじや。そうじやけみんな死ぬんじや。みんな死ね！ 死ね！ 死ね！ わしやそう云うて刀をふり廻したんじやい。おい裸足！ こりや気に入った。おい、そのおどがふんごる地面の下な知つとるか？ 骨がいつぱい、血がいつぱいじや。骨は埋められ、血はしみこんで消えたがの。それ、そこじや、そこで片足の先きがちよるちよる、青い火をふいて燃えていたんじや。鬼火じゃい。空は真暗で、この世のさまじやない。天罰じやい。この世の終りじや思うての。この罰あたりが、ざまあ見れ！ 何が戦争じや、何がうちてしままんじや。ざまくなッ！ くそッ！ 人間なんちよりはみんなくたばれ！ わしやそう思つたの。本まや、全く痛快じやつたの。咽喉はからから、眼も鼻もきかんで、口だけがばくばく、水、水云うて動いとつたんじやがのう、頭ははつきりしとつて、死ぬるは一緒

じや、みんな一緒に死ぬるんじや、根絶やしじや。ざまあ見れ、痛快じやの、全く痛快じやのう。そう自分に云い聞かせつたもんじや。そんなと思わんけりや、とてもあのまま死ぬるもんじやないわ。死んだ人がた、みんなそんなと思つたんじやい。わしや絶対に信じるわ。今でも固く信じてるわ。倅わせな連中じや。わしのように裏切られなかつたけん、倅わせもんじやい。何時間かたつて、わしやトラツクで搬ばれとるんに気がついたわい。急にパッと明るくなって、空の青いのが眼に刺さつて来よつたけん、頭を横に向けると、そこに瓦屋根が見ゆるじやない。酒屋の看板も見ゆる。電信柱も見ゆる。今朝と全く変らん高須町寺前通り。人も通る。自転車も走つとる。煙草を吹かしたる奴もいる。おどりや、くそつたれが！ わしや今でもその時の怒りと落胆云うたら忘れられんわ。何ちつたらえ、かの、死ぬるか死なぬかちゆう瀬戸際じやけん、ぶつしやける気力もなかけ、みじめなもんじや。まあ世の中ちゆうもんはそんなもんじやい。考えて見りやわしのそれからは、それから始まるんじやい。一にも二にも三にも四にも、そこからじや

い。一にも二にも三にも四にも、これは今日ずつと頭中でとぐる巻いて、やたら口に出てくるんじやがの、何じやろかの。おい、その眼鏡野郎、おどな養生やしとるな。バビババビババビババビバ、うちの女房にや尻があるちゆう歌な、ちようどこん時、トラツクのわしの耳に入つて来ちよつたけのう、ふざけるなちゆうもんじやが、わしや泣いた。あゝ泣いたんじや。涙が出て来ちよつて止まらんじやい。その少し前にな、この広島に慰問団が来ての、そんな中に見舞舞踊ちゆうんが来ての、チビッ子が口懸つて、眼鏡かけて、山高帽子被つて、こんとに口を押えての、バビバババビババビバ……と踊るんじや。可愛い子じやつてのう。それがおかしいが、涙が出るんじや。思い出したんじや涙が出るんじや。何のわけもありやせん、バビバババビババビバババ云うと、ツーツと涙が出て来よるんじやい。じやけど、その時の涙は違う。怒りじや、口惜し涙じや。おどりやあ、こん外道！ 云うてドス抜いてかけ廻つたな、つまりはここから始まつたんじやろのう。

こと極道じや、外道じや云いんさるがの、聞きやみんなそれぞれ事情があるちゆうこととは知らんじやろ。一人の奴は一家みんなビカにとられてしまつた云うとつたし、一人は命かけたスケが違つてしまつた云うとつた。わしや子種がのうなつた。精虫がみんなイカれてしまつたんじや。笑うな、くそッ！ そりやビカのせいじやないかも知れん。現代の医学じやそんなことはない云うとるがの、あてになるもんじやないわい。そりやあん時はいろいろなデマが飛んだ。流言蜚語じや。広島にやもう青い草は生えん、被爆したもんはもう子供が出来ん、そんなニュースが、どこからともなく耳に入つてくるんじや。こりやキツイで。おい、そのおやっさん。おどな一晩に三人の女廻つたことあるかいのう？ それを三晩連続したことあるかいのう？ 知らんじやろが、三晩目になるちゆうとこから下はブラブラじや。この舂を徳利とすりや、底が抜けて風が吹いとるようなんじやのう。じやけどそんな時は自慢話じやが、今度はいけん。被爆してからはあかんど。そんな気抜けがずっと続くんじやけんあ。うーッ、参つた、参つた。思い出し

でも味気ないわい。あの日女房は日浦の方へ買出しに行つていて無事だつたんじやがの、わし見つけるのに五日かかつて、やつと古田小学校の病室で会つた時にや、化けべそ”の母あちやんが弁天様のように見えてのう。お互いに涙ぼろぼろ瀧して抱きおつたがの、その時わしや何も気がついたらん。何しろまだ衰弱がひどいし、考えることもたくさんあつての。しやけど、それからまた一週間たつて、日浦へ疎開してから、こりや変じや思つたのう。病院の時はひと目もあるわ。しやけど田舎へ移つてからは女房と二人つきりじやないのう。それがさつぱりじや。さあどうしてくれるかい？ え、う？ やつぱりこりや根絶やしじや。生きとるだけのぬけ殻じやないのう。馬鹿たれ、デマジやないわい。わしが証拠じや。くそッ！ たまるか！ 笑うなや、わしや何度も女房をひつくら返したもんじや。あかん、何度やつてもあかんのじや。わしやそんな時まだ結婚したのははやじやで。子供も欲しいが、何ちゆうたつてア、レなしで何が人生じやい。それから半年、わしや用の口もきかんと、たゞ天井ばかり見て暮したわい。ユーウツつて奴ちや。し

やけど忘れられん春が来よった。ぼかぼか
とぬくくなったある日のこと、庭の先き
の土手がうっすら青く見ゆるじやないの。
久しぶりで自転車に乗って市内の爆心地へ
走ったもんじや。怖いもん見たさとこん外
道ちゆう氣持で、わしがやられた観音町へ
行って見たんじや。横川へかゝるともう被
爆地じや。何の樹か知らんけど、焼っこげ
た枯木の下に青いヒコバネが、ポッと出と
るじやないの。わしやむさぼるように見た
の。右も見た、左も見た。行く先々の土の
見ゆるところはみんな見たの。豪気なも
んじやい。地面は不死身じやい。そこら中
ポッポッと青いもんが生えちよるわい。嬉
しかったの。有難い、お天道様、わし
や思わず手を合せて拝んだわい。それから
一目散で家へ帰って、真っ昼間もくそもあ
るかい、野良から帰った女房をしっかりと抱
きしめたわ。するとどうじやろ、モリモリ
ッと来たわい。わかるかの、え？ その
氣持がよ。嬉しいの何のって、あとは夢中
じやい。こんなえゝ話、誰も聞かんのか
い？ 罰あたりめ、おい、そこのおっか
さん、でっかいケツじやのう。謎までケツ
じやないかのう。セックスの話じやい。本ま

セックスじや。日本語じやないといけんの
う。はゝゝゝ。行ってしもうた。まだイ
ロ馬鹿に見ゆるんかのう。まあえゝわい。
とにかくお立合、それがそのうちまた次の
心配になるんじやがのう。一年たっても二
年たっても、餓鬼が出来んのよ。やっぱり
……とわしやガクッリ来たわ。何でや？
何でなんじや？ わしやだんだん不安にな
ったわ。医者に見せたかって？ 馬鹿たれ、
そんな気のきいた医者が当時おるか。
また、いたって信じられるもんじやないわ。
女房だって同じじや。直接被爆せんで
も、すぐ三日も四日もウロウロしとったけ
ん、二次作用とか云うやつにかゝつとるか
もしれん。じやけん、お前調べて貰えとも
云えんわい。滅入ったのう。それにわしや
昔っから子供が大好きなんじや。さっきも
云うた通り、バビブベボの女の子が可愛い
くて、何もなくて涙が出るくらいじやけ
ん。よその餓鬼見るとダーッと走って何で
もかでもぶっしやげたくなつたもんじや
い。坊や、ちよっとここへ来てわしの話聞
いちよくれい。わしが兵隊さんだった時分
じや。南支那に雍州ちゆう村があつての、

そこに中隊本部があつて、時々討伐に出る
んじや。ある日隣の中隊へ連絡に行つて見
ると、ちよつと坊やぐらゐの子供が後ろ手
に縛られて、膝をついて、こうして首を前
に出しちよるんよ。その後ろで罷つたら
曹長が軍刀を抜いて、一打ちにぶっ切りし
ちゆうところじやい。わしやびっくりして
「曹長殿、こんとな小さい子供、どうし
んさる？」ちゆうて思わず、こうして手ひ
ろげて立塞つて文句云うてしもうたがの、
わしやそんな時たゞの上等兵じや、「しまつ
た」思つたがあと祭りの顔見よつてからに、「小さく
ろつとわしの顔見よつてからに、「小さく
ともこいつはスパイじや、さぐりに来た奴
ぢや。どけ、どかんと貴様もブツタ切る
ぞ、」抜かしやがるんじや。さあ、そう
なると、こつちも売言葉に買言葉じやい。
「よつしや、やつて見れ、斬れるもんなら
斬つて見ちよくれい。階級もへつたく
れもあるかい。どかッと坐りこんだ時は命
がけじやい。「くそつたれ、刀が怖くて
戦争出来るかい。さあどこからでんやち
よくれい。しやけど腕は確かゝのう？
しかりやつちよくれい。」云うと曹長さん
閉口してのう。刀を納めるところ云うた。

「よし連れてけ、お前がそいつの面倒見
るんじや。もし逃がしたらそんな時たゞで
はすまんぞ」とな。じやけ、わしもその
子の中隊へつれて帰って、それから一年一
緒に暮したんじやい。命の恩人と思つた
か、わしの云うことは何でもよう聞いた
し、ほかの兵隊もよう可愛かつたのう。兵
隊はみんな子供好きじやけのう。飢吉ち
う名前つけてのう。人生劇場の青成飢吉
や。今頃はもういゝ親っさんじやろ。そ
の時分の飢吉ぐらゐの息子もおるじやろ
のう。しやけどわしにはおらん。わしには
出来んかつたんじや。誰もおらん。はゝゝ
ゝ。まあ、えゝから、えゝから……氣にせ
んでえゝわい。慰さめる氣か、小孩？ は
ゝゝゝ。慰さめが一番あかんで。誰も慰さ
めん？ わかつとるわい。

十五年前の同じ河原がダブルんじや。それ
は忘れもせん、大正十四年の暮れも押しつ
まつた二十八日じや。これはあとになつて
別件でふんづかまつた時、警察で記録を見
せられたからよう覚えちよる。わしの始め
ての傷害事件じやい。小学校の高等科の一
年じや。それからわしの一生が狂つて来よ
るがの、この起りはわしが中学へ上れな
かつたちゆうところから始まるんじや。わ
しやこれでも学校の成績はよくての、中学
の入学試験なんぞ屁でもなかつたんじやけ
ど、親爺が前の年に仕事をしくじつての、
前の年云うと、大正十三年、関東大震災の
翌年じや。親爺は紀の国屋文左エ門を氣
取つて大量の材木を仕入れたがの、時季
が少し遅かつたので、一足遅いで材材がど
つと入つて来よつてスッテンテンじやい。
家は裏店に引越すわ、親爺はもとの耕天
着、わしや中学校を棒にふつちちゆうわけ
じや。ある日基中へ行った草間金太郎つて
餓鬼が、わしと同じ高等科の森原岩雄の妹
を活動写真につれこんで、あちこちさわつ
てふざけたちちゆうニュースが入つたもんじ
やい。中学組と高等科はいつも争つとつた
けん、それやつちまえちちゆうて、太田川の

土手つちちで待伏せとつたんじや。奴も危
険を感じたと見えて松本何とかちゆう強そ
うなのをつれて帰つて来よつたわい。まづ
森原が飛び出して「おい、わしの妹をよう
いたずらしてくれたのう……」云うと、下
駄を脱いで両手に持つてこう構えた。わし
や問答無用じやい。いきなり草間をぶっし
やげちやろう思うたら、松本が立塞つて
「身代限りの神代杉が、倒れてつぶれてく
たばつた」ちゆうて笑つたから、わしやカ
ッとした。わしの家は以前にや「神代杉、
諸国銘木」いうデカイ看板が上つちよつて
の、何となく誇らしい氣持がしちよつた
し、友だちも何となく一目おいていたもん
じやつたがの、それが今笑いものになつた
思うたら、わしやその瞬間からカッとのぼ
せて、無茶苦茶になつてしまつてのう。草
むらに置いてあつた鞆にとつて返すと、工
作用の切出しをもつて戻つて来て、見ると
草間と松本を対手にして森原が孤軍奮斗じ
や。わしは切出しの鞘を払つて、夢中で松
本と草間の脊なかに切りつけた。そんな時
はわしやわからんかつたが、あとで草間が五
ヶ所、松本が三ヶ所、深いところで二軒、
大きいところで十軒の疵を負わせたんじや

そうじや。わしは草間の脊なから血が滲み出して流れて来たのを見て、はじめて大変なことをしてしまつた思うて呆つと立つたわい。とどのつまり傷害の第一犯、但し未成年ちゆうことで記録に止めるだけで実刑なし云うことになつたわけじやい。しやけどこの実刑なしは本まは実刑ありも同然じやつたのう。その後のわしを根本的に変えてしまつたのう。第一ひとの見る眼が違つて来てのう。「あいつは恐しい餓鬼やで」「何するかわからんで」「近づいたらあかんわ」、……こうなるともう土地にやおれんわ。中でも一番こたえたんは親爺の態度じやつたけのう。あん時涙を流してわしを抱えて、「世間が何ち云おうと、わしやお前の味方じやい」云うてくれちよつたら、わしや何ぼうかうれしかつたか。わしや今はそんな甘いもんじやないぐらい知つてるが、それまでの親爺は甘くて甘くて、何しろ年がら年中おしなじやおれんちゆう始末じやけ。それがわしをダメにしてしまつたんじやのう。今でこそこんとなダメ親爺はザラにおるが、昔の親爺にしては珍物じやい。阿呆くさいの何のちゆうてお話にならんわ。運動会が一番いやじや

たの。父兄席につかんと、わしの組の後ろで見とつて、それキャラメルじや、それせんべじや云うて持つきよる。恥かしいやら、口惜しいやら、子の心親は知らずじや。これで親を馬鹿にしよらんかったら、どうかしちよるで。何をしようか怖いもんあるかい、そう思わんかったら、そんな餓鬼は出来そないじやい。もつともわしもお陰さんで出来そこのうたがのう。子供ちゆうもんはむずかしいもんじや。そうして親爺ちゆうもんは可哀想なもんじや。親は子の心を知らず、子は親の心を知らん。叱るべき時に甘やかし、甘やかすべき時に叱る、叱らざるを得ん。そんななグレハマでわしみたいハンチクな人間が出来上つてるんじやい。しやけど、わしやことこの起りが親爺の倒産から始まつたちゆうことだけは、金輪際云わんかったわのう。じやけわしは何で刃物三昧になつたかちゆう本まのところは誰も知らん。しようがないわい。どうにもならんちゆうはどうにもならんわい。あん時あゝしたらどうじやつたらうとか、こうしちよつたらどうじやるとか……そんなことはみんな愚痴じやい。どのみちこんとなになつてしまつた云うだけじや

い。はゝゝゝ。バビブバビブバビブバボじや。一にも二にも三にも四にもじや。一にも二にも三にも四にも、どうだちゆうんじや？ 小孩、あゝもうおらんわ。……まあ、そんなわけで、それからはお定まりの極道一代じや。親の金はくすねるわ、隣りの自転車は売り飛ばすわ、弁天小僧じやないが悪事はのぼる上の宮じやい。のぼつてのぼつてとうとう東京のム署まで行きついで、三年クサイ飯を食つた時には、もう押しも押されせん。一っぱしの極道じやい。おい、おい、そこのお姐えちやん。うまく行つとるか？ うまく行つとる顔じやないのう。酸欠乏、そうじや酸欠の金魚つてつらじやの。バタバタしてらうちに眼が上つて、鼻がふくらんで来よつて、こうじや……「あゝゝゝ、サンケツじやないよ、キンケツだわよ……」。色気がないよ、本まに……。いやお姐えちやん、怒つちやいけん。東京にいた頃のおしを見たかつたちゆう話じや。東京の話じやけん、べらんめえでやらしてつかあさい。……こうつと、やい、やい姐えちやん、とこう来らあ、そもその時のスタイル、はどうでもいい。飲みっぷりがよく

て、払いっぷりがよくて、男っぷりがいゝんだ。これを三ぶりつてんだ。お姐ちやんなんざ、その鼻三倍ぐれえ拵けてかぶりつくぜい、いいこともあつたねえ。楽しいこともあつたねえ。今考えて見ると、あの頃が俺の一生の花ざかりだらうな。シマは本所の増田善吉つて、看板は馬鹿だが、大前田栄五郎の流れを汲むれつきとした博奕うちだ。ム署を出るとこの親分に意見をされて、それからはつまらねえかゝりあいは一切おことわりだ。マス印の印伴天一丁で普請場通いを地道に三年つとめあげて兵隊検査よ。界限の娘っことも袖ひきあつて色目を使ってやがるのがピンと来た。中でもお光ちやんてのがいゝ女だつたね。桃割れの匂いと半襟りの白さを今も思い出すとたまらねえよ。夫婦気どりで正月の十五日に浅草の観音様をお詣りしての帰り道、このせがれの野郎も観音様を拝ませろつてきかねえ始末だ。とどのつまりが墨田川の土堤の草むらんで、心ゆくばかり発しやした。勿論始めてじやねえさ。吉原も洲崎もとつて知つてらあ。けれどもあんなのは始めてだ。夢うつ、に一年が過ぎて昭和十二年、名古屋第六連隊に入營。そこで俺は

十年ぶりに広島に帰つた。どういうわけか俺の本籍は名古屋なんだ。いやわけはわかっているんだが、一々説明するにも及ばねえ。とにかく名古屋に入隊してから一度、広島に帰つたんだ。それまで一べんも帰らなかつたかつて？ べら棒め、親のことなんか一べんだつて考えるけん。第一広島まで帰るに金とひまがか、らあ、今とは違つうんだ。でもまあ、双親は喜んでくれたよ。涙を流してねえ。そりやもうこれっぽちのつまらねえ話でも、俺が語ると涙をこぼしやがるんだ。ダラしがねえと思つたよ。その点おふくろの方が気丈だね。「さうござ極道をさらしたんだから、今度こそ立派にお国のためにつとめて来い」つてのたまわつたのはおふくろで、「戦争が始まつたら、これが見納めかもしれねえ」つて泣いたのは親爺の方だ。もつともそれが当りだつたよ。七月に支那事變が始まつた。さあ、それから十八年の春まで戦斗また戦斗、何度死にかけたかわからねえのかそるか、の戦かが続いたが、そんは後の話。あの時には俺に冷たくしやがつたくせに、親爺はやつぱりちつとも變つてねえや。めそめそするねえ、こつちや気が立つてるんだ。

泣きごと何ぞ聞く耳持たねえや。戦争つて云やあ国と国との大喧嘩だ。喧嘩なら三度の飯より好きてえアンさんだ。べら棒めえつてんで、すつ飛び出ると喧嘩仲間の例の森原岩雄の家に出かけたわけだ。するとこれが今じや川上組の若けんえもんの中でもバリバリの口利きになつてるじやねえか。全く愕ろいたね。いや本まにびっくりした。ちやうど呉の西海組と争つてる時分で、事務所は殺気立つてビリビリしてるし、お廻りが警戒してシケバリをはつてやがる。「おどりや、アヤはえゝから見つけ次第カマしたれえノ」ウロつくんな、こん外道ノ」なんちゆう科白が耳に入ると、わしやもうこん胸のあたりがじーんとするんじや。硬派の血じや。あこがれ、そう、つまりこれだつちゆうもんがあつたんだ。軍隊のようで軍隊にないもんがあるわけよ。命をかける、身をすてる。天皇陛下のおんためなんて、お巫山戯じやないよ。持つてまわつたような理窟をつけてさ偉いさんがいかめしい顔をならべてさ、見たこともねえ爺さんに最敬礼するなんちゆう猿芝居にやあきあきしてたところじやい。そんなおかみに屑つとくところが気に入つた。よし、や

ろろじゃないの。といったところで兵隊ズ
っこけるわけにや行かんわ。蓋はあずかり
の、それから十八年の春になる。あゝしん
ど……長い。人の一生って短かいよう
で、やっぱり長いわ。おい、猿又のあんち
ゃん、おめえいくつになる？ 猿又のよう
に短かく暮らすか、パッチみてえに長く生
きるか、料簡次第やよく云われたもんじ
やがの、料簡したってその通り行く、か
い。中に包んだ御本尊みてえにブラブラし
ても、いきり立っても、長えもんは長え、
短けえもんは短けえんだ。けど一番長かっ
たのは戦地の六年間、火つけ、強姦、人殺
しのやり放題じや。悪いことなら何でもや
ったのう。その代りこつちだつていつ死ん
でもいいって気だ。蜂の巣になろうが、平
刺しになろうが構わねえ。さあやっちゃよ
くれ云うて何度スッ飛び出たつて、わしは
射たれんで、いつも次の奴がやられるんじ
や。そう云ったもんよ。けど戦地の話は長
くなるから、今日は止めじや。たゞ一つ云
つときたいんわの、わしや戦争反対なんど
せんで。悪いことしたのも後悔なんどしと
らんで。戦争じやい、あたり前じやい。徹
底的に叩きのめすのが喧嘩の御定法じや
い。べら棒め、手加減なんぞしとれるか

にも、性根が腐つとつたらおしまいじやの
う。性根が腐つとつたけピカが落ちて来
た。今でも腐つとるけもう一度落ちる云う
んじやい。そりやわしやどうせ古い男じ
や。云つとることも新しいわい。だが
な、お立合。この世の中に新しいわい
ことあるかいのう。あるとすりや、みん
なダメーになつたわいことじやないの。
今も大手をふつてのさばちよる色と欲、
古い古い、フルーイ、もううんざりする程
古いもんじやい。古いうちにもえゝもんが
あつたがの、それはなくなつての、悪いも
んだけが着物をきて来て新しい顔しちよ
る。けど一皮剥きやみんな同じ穴のむじな
じやい。そう、そう。この間もここでわし
が寝とつたら、夜中に何かとわしの顔を
舐めるんじや。「何だ、こん外道、」わし
や犬かと思うて、手で払いのけようとする
と、これが俵れえ力で押え込むじやない
の。眼をあけて見ると、そりや雲つくよう
な大男で、前のボタンをはずして変なマネ
をしようとしちよる。「こん外道、」わし
や女じやないわい、」ちゆうて怒鳴ろうと
すれば、それがまた口を塞がれちまうんじ
や。組んずはぐれつしてらうち、わしやぎ

い。その代りこつちだつて負けたら徹底的
に負けるこつちや。手加減なんぞして貰
いとうないわい。中途半端は舐に毒ちゆう
て、あまつ子だつて知つとるわ。それがど
うじやい、その後の日本国のザマは？
まあ、えゝわ。話はおとへ戻さんといか
ん。どこまで行つたかの？ そうだ。十八
年の春だ。やつと上野部百貫銃創の一発で
内地へ返されて、翌年の除隊ちゆうわけ
だ。よかつた、よかつた。再び板が満開の
字品港へ戻つた時にや、本まに嬉しかつた
のう。けど六年もいると戦地も決して悪く
ないで。あの広い大陸から見ると日本は鼻
がつかえるようでの、下関から瀬戸内へ入
ると、どこもかしこもゴミゴミ人家ばかり
で、本まにがっかりじやい。それにもう
太平洋の方も負けがついて、喰うものも取
すっぽねえつてザマじや。冗談じやないわ
い。戦争は負けるもんじやない。始めた以
上は必ず勝つもんじや。負けたらどうなる
か、わしが何をやって来たか、このわしが
一番よく知つとるわい。わしや口を酸っぱ
くして何遍も云うたがの。成程反対はせ
ん、けど何となくビリッとせんのじや。は
り切つた返事が返つてこんわい。糞よご

うつと一件を握られちもうたわ。流石に
気がついたと見えて「何じや、この餓鬼、」
云うて立上つて、ベッ、ベッと唾を吐い
ちよるんじや。「何じや、この餓鬼、」ち
ゆうのはこつちの科白じや、べら棒め、
巫山戯やがんな、わしやもうカッカして
立上つて、よくよく見りや、モトニンダ
何か着込んだ立派な紳士じやないの。結婚
式の披露でくらく酔つて、男女の見さか
もつかないのはいゝとして、このへんにお
ッ立つたデッカいのが、ひくひくとエツ
とるザマあ人間とは思えんわ。世も末もあ
るか、わしやゾッとする、オエツと
吐き気を催したのう。けどな、お立合。い
笑いごとではないのは、その時わしの頭ん
中をつゝ走つた一つの場面があつたんじ
や。それは二十三年前の夏のことじや。わ
しの女房がわしの親爺と寝とるところじや
い。それだけ云えば沢山じやろが。わしや
エロ話をしとるんじやないわ。細かい説明
は聞かんでくれ。わしはたゞこみあげて
来る怒りにまかせて、そのオッ立つた奴を
うねつきり蹴りあげて、頬げたを三つ四つ
ぶつちやげたわい。……まではおぼえとる
がの、それから先きがよくわからん。気が

れ、おどらの女房も、恋人も、妹も、お
ふくろだつて見さかいあるかい、みんな強
姦された挙句に殺されちまうんじや。おど
らの首も、チンポもみんなぶち切られち
まうんじやい。現にこのわしがやつて来た
んじやい。わしやそう云うた。会う人ごと
に云うた。けど満足の返事をしたもんはお
らん。軍が徹底抗戦を叫んだの、工場が決
死の増産に邁進しよるの云うた話は、わし
に云わせりやウソの皮よ。そりやほんの下
つばの若い青年や娘っ子だけよ。わしは婦
つてすぐ三菱重工に徴用されたんでよく知
つとるがの、本当はみんな腰が抜けとつた
んじや。上の方の奴らおどらだけいゝ思
いしよう、酒はおどらさえのみやいゝんだ。
女はわれさえやりやいゝんだちゆうわけ
じやい。おい、おどりや聞いとるんか？ 古
い話じやないわい。今でも同じじや。今も
続いとるんじや。もうどうにもならんところ
まで続いちまつとるんじや。何じやと、
古い話はやめろつてかい？ だがね、お立
合、右を向いても左を見てもちゆう歌が
あるじやろ。まっくら闇じやござんせん
か？ 一にも二にも三にも四にも、はい、
また出て来よつた。一にも二にも三にも四

ついたらそこへ長々とのびとつたのう。昔
だつたらそんなことはあらへんで。やつ
ぱり寄る年波にや勝てんわな。夢かと思
うたが夢じやない。そこら中に折詰の御馳
走が飛び散り、犬がうまそうに食つとつ
た。けどその時わしや久しぶりで気分がス
ーッとしたのう。峠の節々は縮めて起き上
れんが、暗れた夜空は星が一っばいでの、
フーッと息をつく、さあおかしくつて、
おかしくつて笑いが止まらんよ。わっは
ムムと笑つたつもりが、笑うと痛いわ。は
ムムもかも知れんし、うっふふもかしれ
ん。みんな合わせると「ふは、ふは、ふは
ムム」。おい、おいッ、氣遣いじやあ
らせんと、変なワラして見んな、馬鹿た
れ、そんなな心境はの、おどら何ぞにや
わからんのよ。わしやあいつのチンポを
蹴り上げた瞬間からスーッとしたんじや。
あいつは凄腕力でわしを殴り返して来よ
つた。そいつもまた氣味がえゝわ。あんと
に氣持よくのばされたことはなかつたで。
それから親爺のことを考え、女房のことを
思い出し、自分をふり返つて泣いた。あと
からあとから涙が滾れて来てのう。こりや
やつぱりどう見ても氣遣いじやろかのう。

は、まゝ。まあえゝわ、けどどうも話が先きへ飛ぶのう。どっからだっけの、そうそう、十八年の春に内地送還、翌年の正月に家へ帰ったちゆうところじやの。そしてその翌年の、つまり終戦の年の二月におふくろが死んだのう。苦勞ばかりかけたが、いゝ時に死んだもんじや。生きとったら間違いなしビカドンにやられたとこじやい。その頃親爺とおふくろは天満町で細々と駄菓子屋をひらいた。無論売る菓子なんぞありやせんわな。紙みたい玩具はっかじや。おふくろはリヨウマチで足が悪いけん、買出しは親爺の役目、それで親爺は命拾いじやったし、それが縁故で戦後日浦の百姓家の納屋借りることが出来たんじや。おふくろが死ぬとあとは男二人で何かと不便だし、わしだってたまの女郎買いくらいじや不自由でいけん。影浦の百姓の娘でわしに惚れとるという話から、ビカが落ちる十日前の七月二十四日に嫁を買らた。いゝ女とはお世辞にも云えんけど、それでもまだ二十四じや。色っぽいわ。微用さえなかつたら、日がな一日抱きあかして暮らせたところじやがの。実際に寝た人は初夜の晩と、その後の二晩か三晩か、それでビカじ

や。じやけまあ、出来るもんなら飯鬼は出来とる。そりやそうじや。そうじやけ、それからもずつと出来んちゆうは、あながちビカドンのせいばかりとも云えんことは云えんわな。けどわしや一途にそう思い込んで、今でもそう思うとる。無智じやと？ それはどうしたい？ おどりやにわからんとよ。ビカで滅茶滅茶になったもんでなけりやわからんのよ。親爺もわしと同じように、ビカのお蔭で孫が抱けんと思つちよつたそうじや。その阿呆な話はあるに、するがの、わしは女房と親爺の現場を見るのと、そのまんまスッ飛び出して、川上組の事務所を森原を訪ねて金を貰らた。女房は行方知れず、親爺もまたそのあとを追うて、家の一家はおしまいじやい。さあ、それからはわしの天下じやい。もう何も怖いもんはありやせん。ドスとパチンコが命の太く短かい渡世の始まりじや。さあ、お立合い。思い出しとくれい、新天地の出入りで塚組の原が刺された時のこつちや。エビス通りの角をまがって、天満屋前で待伏せてたんはわしと森原で、胴巻きに二十口径のモーゼル銃をぶち込み、昭和刀を新聞紙にくるんで左手にさげ、ヘン

草履をつっかけて、商店街の本通りを走つた時の気持は、あゝわしやこれですた野戦十年の攻防が嘘がえって、天下御免の人殺し、公認のキッタハッタがまた出来るちゆう錯覚で勇み立つたんじやけ阿呆な話じや。おん年三十六歳、お恥かしいと云やお恥かしいが、勿論ヤケが八分、あとの二分は前云つた通り、わしや戦争はまだ終つちやおらん、終つちやいけんじや云う考えじやけんたまらんわい。狭みうちにあつた塚組の新八つて銀鬼が、いきなり血路を開こうちゆうてわしの方へ向つて、ドスをふりかざして来よつた。わしは右へかわして、抜き打ちに左から右へはらつたのが、奴の左腕をサーッと撫でたと思うと、もう一人前からかゝって来よつたけ、やたら刀ふり廻して押えといで、ふり返ると新八の外道め、ジャンパーの袖と自分の腕のペロッとぶらさがつた切れっぱしを押えて、血だらけになつてぶつかつて来よつたのう。しぶとい奴もあるもんじやい。本まの体あたりじやけ、二人ともぶつ倒れたが、わしや無抵抗じやけすぐはねおきて刀ふりかぶつたがの、流石にわしもそれ以上斬れんわ。そこが野戦と違うわ。拝み打ちに

割りつけりや簡単にイチコロだが、そんな怨みはありやせん。たゞ盲滅法ふり廻わしや満足なんじやい。敵だつて同じことじやろう。一丁目から二丁目まで、わしが一番あばれたのう。まるで風が吹いてくるようじやつちゆうて、塚組のもんがわしのことうてたそうじや。ポリ公だつて手が出せんわ。この時は大方が噴らいこんだが、わしだけはのがれたのう。次は新和会の本部に殴り込みをかけて、幹部の鈴木をトツた時じや。わしが殺したんじやないわ。わしは桑野を射つたけじやい。桑野はわしがふん込むと素っ裸で女と寝ちよつたがの、矢庭に蒲団を飛ばして来よつたけ、蒲団の影にかわしてグツとその蒲団をひきつけるのと、矢庭に三発拳銃をブチ込んで来よつた。蒲団の中をスポーッと弾丸が通り抜ける感じがした時や、わしも足がすくんだけのう。わしは例のモーゼルを持つたが、中はまっくらで女もいる。善人ぶるわけじやないが、わしの役目は鈴木をトルまでの押えじやけ、マサの奴が「引きあげじや」云うたら、そのまゝ帰るつもりだったんじや。ところがモタモタしとるうちに下から若いもんが五六発二階めがけてブツ発

すと、ドカドカ上つてくる気配じやの、まごまごしとるとせきみうちじや思うてるうち、桑野が勢いづいて「おい相手は二人じや、カマしたれ」と怒鳴つたけ、わしやその方向へ二発ブチ込んだ。「わあ」と云う声とマサの引揚げの合図で一緒に窓から逃げようとする、桑野が追いつちの一刀を浴びて来た。ところが刀はそれでお宿子を粉々微塵にして数居ではね返えり、前へのめつたと思うと「うーん」と唸つて気絶してしもうたのう。刀の束でわしの胸を打つてしもうたんじや。わしや殺人幫助で一年半噴らいこんだ。そんな時はわしと桑野の女を見たが、こいつが前にわしと寝た女じやつた。それからあともまた寝た。女なんちゆうもんは消耗品じやけ、誰と寝ようと気にせんわい。修羅場と修羅場の間の濡れ場、いや濡れ場と濡れ場の間の修羅場か、とにかくそんな連続じやい、一々おほえちやおれんけど、そのスケはあとで子供こしらえたけんようおほえちよる。無論誰の子かわからんがの、少し大きくなつた時、どこかわしに似とらせんか、そんな迷いがちらつとして、人なみに娑婆なつかしい気分がしたもんじや。けど

それもそれっきりじや。三度目は京橋川原の出入りだ。あん時は双方から自動車がつつ、併せて十台の打ち合いの上に、そのまた廻りをサツとMPが十重二十重にこんだ空前の大出入りじや。わしや今でも忘れられんが、またどうしてそうなつたか見当もつかんけど、わしやつかまる時、こともあるうに抜刀してMPの方へつっ走つたもんじやい。こう刀をふりかざしてのう。こりやまずかつたのう。こりやいけせんわ。MPはわしと蜘蛛の子を散らすように逃げて行きおつた。まずいことにそのつを新聞記者の外道がちやんと写真にとつたんのよ。それでわしや最高の三年をくらつたわい。そうして川上組もお払い箱じや。そうなるともうどの組も入れてくれんわ。わかるかのう？ わかるじやろう、お立合い。やくざの正体が知れるじやろう。くそつたれ、わしの方から破門じやい。男一匹何やつたつて食えるわい、そんなと思つたが堅気もあかんわ。ほいでこのザマじやい。戦争は終つたんじやの、敗けて終つたんじや。わしが一番みじめに敗けて終つたんじやい。阿呆や思いうじやろ？ えゝ大将？ そら阿呆じや。け

どおどらどうかい？ え、恰好しよるが何もわからんじやろ。赤提灯で小皿叩いてチヤンチキオケサがええとこじやい。べら棒め、二にも三にも四にも……また出て来よったの。一にも二にも三にも四にも……よろしい、もう少し行つて見よう。もう少しじや。

そう、わしが川上組に盃を返した時、森原が始めてたつた一度、わしの親爺と会つたちゆう話をしてくれたの。親爺はこう云うたそうじや。「あいつは子供好きじやで、さぞ子供が欲しかる思うとつらくての、子供がないんじやろか、もうこれでおしまいじやろか。あいつの悩みはわしの悩みじや。黙つてふさいどる姿、見るに堪えんで、はいでお前にも生れたで、出来たで、云うちやろ思うて、こりや無論言ひ訳じやけど、そう思いながらついつい己れに負けたことは確かなんじや。そうじや云うても、少しでも許して貰おうとは思わん。じやけこのことは絶対あいつには云わんといてくれ」。は、は、は、は、は、阿呆くさ、わしやもう本主に森原の前で笑ひころげたわ。わしを騙し、女房を騙し、自分も騙して、はいでわしを喜ばそうちゆうんじ

ちよるんじや。そりやもうあのキノコ雲が消えんうちからきまつとるんじや。わしにやはつきりわかちよる。もう一つべんある。もう一度きつとある。そいでおしまいじや。人間の根性が変わらん限り、これは変わる。大地を打つ槌は外れても、こればかりは変わらんで。この地面も空も、もうおどらのやることにやうんざりしてなさるんじや。一人一人、死んだひとら叩き起して聞いて見れ、「おどりや、何しくさる！」云うて嘴みついて来よるで。わしが嘴みつくんじやない。そこらカッぽじつて見れい、みんな声あげて騒ぎはじめるわ。たゞ安楽で、平和で、繁昌だけじやみんな死に切れんじやい。それ、おやっさん、そこ、そこ、そこちようど五つぐらいの子供が死んどつたで。全身から青い火を燃やしての、とろとろと溶けて、骨だけが黒くいぶつてのう。そんな日がもう一度来る。きつと来るんじや。わしが云つとるんじやない。それ、そこで死んだ爺いさんが云うとる。それ、そこで倒れたお神さんが云うとる。それでも、そこでも、そこでも云うとる。「安らかに眠つて下さい」じやと？ くそつたれ、何はざく、安らか

やけ、単純と云おうか、複雑と云おうか、頭の出来がどかおかしゆうて、性欲だけがはつきりしちよつたんじや。田舎じやよくあることだ。わしや大方忘れとつた。けど、お立合い。わしやそれを聞かされた途端に、刀をふりかざしてMPに向つて行つた、自分の気持の中を見たような気がしたんじや。大方弾丸も打ち尽した時分、車の外へ出てみりや塚組の外道ら、反対側の草むらへ逃げて行く。機動隊が追つて行く。キタねえと思つて追いかけようとするMPとが割り込んで来よつたんじや。口笛を吹いて、指を鳴らしてのう。わしやカッとして刀をふり上げて走つた。次の瞬間にやわしや機動隊の盾にとりかこまれとつたわい。そんな時までわしやたゞの一度もアメリカ兵のことなんぞ考えたこともなかったがの、はじめてウワツと咆えたような気がしたんじや。原爆を落された怨みは無論あるが、今更何も云いとうないわ。わしが云わんでも世界中が知つとるわ。みんな悪いことじや云うとるわ。けどわしが云いたいんのは、わしの心の問題なんじやい。わかるか？ わしの子供のことじやい。子供はわしの心じやい。子供ちゆうは自分が、

になぞ誰が眠れるかい？ 安らかに眠つたらおしまいじやい。「過ちはくり返しません」？ 馬鹿たれ、過ちはきつと繰り返すんじやい。滅茶苦茶じや、全く滅茶苦茶じやい。わしに子供が出来なかつたのは、もしかして原爆のせいじやないかも知れん。けどそれとみんな滅茶苦茶になつてしもうたのは事実じや。じやがの、わしはかりかみんな滅茶苦茶じやで。阿呆じやで。チヤンチキオケサのパビブペボじやで。おどらの子供は本まの子供じや思ふかい？ 本まの子供は本まの子供じや思ふかい？ 子供からして、変つてしもうたんじや思わんかい？ 思うじやろ。心あるもんは思ふんじやい。けどそりやおどらがそうしたんじや。騙されたんじやのうて、おどらが騙したんじや。もうおしまいじやのう。もうどうしようもないのう。それを知つとるのはこのわしだけじや。親爺に騙されず、騙かす子供は持たなかつた、このわしだけなんじやい。わしが最後の人間じやい。最後の、最後の日本人じやい。さまあ見れ、刀をふりかざしたわしや最後の一兵なんじやい。どうじやいのう、お立合い。こんと

なぞ誰が眠れるかい？ 安らかに眠つたらおしまいじやい。「過ちはくり返しません」？ 馬鹿たれ、過ちはきつと繰り返すんじやい。滅茶苦茶じや、全く滅茶苦茶じやい。わしに子供が出来なかつたのは、もしかして原爆のせいじやないかも知れん。けどそれとみんな滅茶苦茶になつてしもうたのは事実じや。じやがの、わしはかりかみんな滅茶苦茶じやで。阿呆じやで。チヤンチキオケサのパビブペボじやで。おどらの子供は本まの子供じや思ふかい？ 本まの子供は本まの子供じや思ふかい？ 子供からして、変つてしもうたんじや思わんかい？ 思うじやろ。心あるもんは思ふんじやい。けどそりやおどらがそうしたんじや。騙されたんじやのうて、おどらが騙したんじや。もうおしまいじやのう。もうどうしようもないのう。それを知つとるのはこのわしだけじや。親爺に騙されず、騙かす子供は持たなかつた、このわしだけなんじやい。わしが最後の人間じやい。最後の、最後の日本人じやい。さまあ見れ、刀をふりかざしたわしや最後の一兵なんじやい。どうじやいのう、お立合い。こんと

一族が、先祖からずーっと続いて行くちゆうことなんじや。いやそんな理窟はどうでもええ、わしの夢はわしとともにも亡びる。わしの心はわしが最後じや云うこちや。わしや子供が欲しかつたんじや。それがあかんちゆうこたあ、わしが死にやこの世は終りじや云うこちや。刀をふりかざして走つた時、わしや子供を返せ。返えさんうち戦争はまだ終つちやおらんどの、そう叫んどつたんじやい。あのピカが戦争を終わらせたど？ くそ袋、そう思うちやいけんじや。終つちやいけん、眼ささないけんじや。最初わしや天罰じや思つたのう。アメ公じやのうて、天が落したんじや思つたの。さまあ見れ、この豚くそら、みんなくたばれ、往生しれ、云うて心の中で叫んどつたがの、それが終りじやのうて、アメ公が落したと知つて腹が立つたがの、本まはやつぱりおしまいじやつたのう。もうおしまいじや、おしまいが近づいちゃうちゆう声が聞こえんかのう？ わしにやはつきり聞こえる。あんとなこと一度つきりちゆうことは絶対ないんじやい。それはど人間は利巧じやないわ、辛抱も出来んわ。もう行きつくところまで来

しや生きて生きて生きまくり、行末の末の末まで見とゞけて、さまあ見やがれちゆう遺言状を書き残すんじやい。……親爺、この親爺ちゆうんはわしの本まの親爺のことじやがの、どこかで聞えちよるか？ 親爺よお、可哀想な親爺よお、聞いてちよつてくれい、餓鬼なんざいらんかつたんやで、馬鹿たれ、馬鹿たれ、……けどそれは嘘じや。それは親爺が一番よう知つとるわ。じやけわしや親爺に会わんといけん。わしはそう思うて日本中さがして歩いたがの、とうとう会わなんだのう。本ま云うと、親爺は四年前に死んだんじや。女房も死んだそうじや。子供が一人あつたがの、親爺の子供じやけんわしの弟じや、わしの子供じやないわい。は、は、は、馬鹿たれが、おどりや笑うか？ このわしを笑うつてか？ 笑えるもんなら笑うて見れい、このヒロシマで、このわしを笑おうつてか？ ヒ、ロ、シ、マ。この最後の日本の、最後の人間の土地でよ、こん外道、叩き斬つちやるで、戦争はまだ終つちやおらんどの、まだ腕はにぶつちやおらんどの、最後まで戦うんじやい、やれいッ、やつたれい、こん恥しらすのぶ

たくそ、おどりや、それでも人間か、日本人か？ 死ぬ、死ぬ、一人のこらず死んじまへ、やるんじや、やったるんじや、やれいッ、やったれい、……さあ、これでおしまいじや。帰った、帰った。誰もおらん？ まあええわ。もうわしも話すこたないわい。雨ががったのう。ほならまあ、平野橋の方へも行って見るか……。

男は傘をふり廻して気合をかけていたが、やがて暮れかかって、ほっとするような夕涼の街角を、特徴のある外股びらきの足をひきずり、コソコソと編組傘を杖について、消えて行った。雨はあがっていたが、水溜りを飛び越えて行く足どりは軽かった。

あの時の男だったという確証は一つにも得られなかった。しかし、私は確信している。あの男だったのだと。モヒカン族の老西長チンガタツと、その息子アソカスの魂を、私はかつて会ったあの男の魂として心にとめておきたいのである。そのほかにつけ加えることはない。さらば、モヒカン。ヒロシマのモヒカン族よ、永遠なれ！

あとがき

この一編を私は、劇説と銘打つことにした。新奇をてらうようだが、つまり劇作にして小説をかねるとすれば、読むもよし、演ずるもよし、自由で都合がよからう。さしずめ小説の部分はト書きとも、サブ・テヤストとも考えれば、演ずるに当たっての参考にならう。私は今後もしばらくこの方法を試みたい。また、この広島弁は不正確だが、私の勝手な詩的(?)造語として容認して貰いたい。演ずるに当たっては無論修正するもいゝだろう。御連絡を乞う。

(一九七八・二・五)

△作者住所▽

川崎市中原区今井南町二六三

■あとがき■

◇西リ演発足して16年、東リ演15年、まさに歴史を感じます。本号によせられた劇団通信にも、いづれも深い複雑な表情がありました。歴史といえば、東では劇団下町、労芸、西では荷車が長い苦闘の頁を閉じました。再起を希う気持ちをいう前に、やはり、ご苦労、お疲れさまを云いましょう。

◇別掲しましたが、本年十一月発行の40号に、東西リ演の年表をのせるつもりです。つづいて、回顧座談会、記念論文等でこのさしかかった転換期に備えたいと思います。

◇「歷程」「橋のない川」などで知られている神谷量平氏の新作をいただくことができました。本誌に対する貴重なはげましです。

◇三月の東西合同役員会議を終えてからの準備などで発行が大分遅れました。騒然とした世情の影響もあります。お赦し下さい。(もも)

上演許可と上演料について

上演には作者の許可が要ることは当然ですが、上演料についても作者との諒解の上に立つことがのぞましいと思います。

最近、上演料についての問合せが多くなりました。そこでもう一度参考までに、昭和四十七年一月に定められた、日本演劇協会の規定を参考に供しますが、一方的にこれに準じて支払えば済むというものではありません。

勿論、著作権を代行している出版社や作者によってはこの規定どおりで行われている場合も多くありますので、この規定には十分有効性はあります。しかし何分にも制定後六年も経ておりますので金額については考慮することが必要かも知れません。

◇上演料

昭和四十七年一月一日改訂の日本演劇協会規定による

上演一回につき

- a 無料公演の場合
 - 1 上演90分以内 千円以上
 - 2 // 90分以上 二千元以上
- b 有料公演の場合
 - 1 入場料三百円以下
 - 上演90分以内 五千円以上
 - // 90分以上 一万円以上
 - 2 入場料七百円以下
 - 上演90分以内 八千円以上
 - // 90分以上 一万六千円以上
 - 3 入場料千円以下
 - 上演90分以内 一万円以上
 - // 90分以上 二万円以上
 - 4 入場料千円を越えるとき
 - 当業者の談合による

演劇会議

三八号 一九七八年四月二十五日発行

定価 三五〇円(送料二二〇円)

編集委員 黒沢参吉・こばやしひろし

丸子礼二・仲 武司・土屋 清

岸本敏朗・萩坂桃彦

発行所 演劇会議発行所

川崎市川崎区渡田四一・一三

萩坂方 電話〇四四(三三)〇七七五

誌代銀行振込は川崎信用金庫小田支店一三三五二七へ